岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 734 集

二子城跡（ふたごじょう）発掘調査報告書

北上市特定公共下水道終末処理場整備事業に伴う緊急発掘調査

２０２２

北上市

（公財）岩手県文化振興事業団

二子城跡発掘調査報告書

北上市特定公共下水道終末処理場整備事業に伴う緊急発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする１万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は北上市特定公共下水道終末処理場整備事業に関連して、令和元年度・２年度に発掘調査を実施した二子城跡の成果をまとめたものです。調査の結果、中世の二子城を構成する遺構が検出され、地域の中世史に関連する貴重な資料を得ることができました。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査並びに報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました北上市をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

令和４年３月

公益財団法人岩手県文化振興事業団

理事長　高橋　嘉行

例　言

1　本報告書は、岩手県北上市二子町字渋谷 60-1 ほかに所在する二子城跡の発掘調査成果を収録したものである。

2　今回の調査は、北上市特定公共下水道終末処理場整備事業に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会の調整を経て、北上市の委託を受けた（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。

3　岩手県遺跡登録台帳における遺跡コード・遺跡略号は次のとおりである。

遺跡コード：ＭＥ 46-2214　遺跡略号：ＦＪＣ -19・ＦＪＣ -20

4　発掘調査期間・調査面積・担当者は次のとおりである。

令和元年度－調査期間：令和元年７月 16 日～10 月 31 日　面積：9,000㎡

担 当 者：羽柴直人・丸山直美・河村美佳

令和２年度－調査期間：令和２年４月９日～８月 31 日　面積：20,230㎡

担 当 者：羽柴直人・杉沢昭太郎・丸山直美・河村美佳

5　室内整理期間・担当者は次のとおりである。

令和元年度－整理期間：令和元年 11 月１日～令和２年３月 31 日

担 当 者：羽柴直人・丸山直美

令和２年度－整理期間：令和２年９月１日～令和３年３月 31 日

担 当 者：羽柴直人・杉沢昭太郎・丸山直美・八木勝枝・北田　勲

6　本報告書の執筆分担は次のとおりである。

Ⅰ：北上市、Ⅱ・Ⅳ・Ⅶ：羽柴直人・杉沢昭太郎・丸山直美、Ⅲ：杉沢昭太郎

Ⅴ：羽柴直人・北田　勲、Ⅵ：パリノ・サーヴェイ株式会社

7　各種委託業務は、次の機関等に依頼した（順不同）。

航空写真撮影　　：東邦航空株式会社、北日本航空株式会社

石器石材鑑定　　：花崗岩研究会

放射性炭素年代測定：パリノ・サーヴェイ株式会社

8　野外調査及び室内整理にあたり、以下の機関等から御協力いただいた（順不同・敬称略）。

誉田慶信（岩手県立大学名誉教授）、竹井英文（東北学院大学准教授）

9　本遺跡の出土遺物及び諸記録類は岩手県立埋蔵文化財センターで保管している。

10　これまでに、調査成果の一部を調査概報等において公表しているが、本書の記載内容を正式なものとする。

目　次

Ⅰ　調査に至る経過 …… 1

Ⅱ　遺跡の立地・環境 …… 3
1　遺跡の位置 …… 3
2　地理的環境 …… 3
3　歴史的環境 …… 4
（1）二子城の縄張り …… 4
（2）周辺の遺跡 …… 9
（3）二子城周辺の中世城館 …… 9

Ⅲ　調査と整理の方法 …… 17
1　調査の経過 …… 17
2　野外調査の方法 …… 17
3　室内整理の方法 …… 18

Ⅳ　検出遺構 …… 26
1　基本層序 …… 26
2　竪穴住居 …… 27
3　掘立柱建物 …… 29
4　土坑 …… 30
5　陥し穴状遺構 …… 32
6　炭窯 …… 38
7　溝・堀 …… 39

Ⅴ　出土遺物 …… 78
1　縄文・弥生土器 …… 78
2　土師器・須恵器 …… 80
3　石器 …… 80
4　陶磁器 …… 80
5　銭貨 …… 81

Ⅵ　分析・鑑定 …… 90
1　岩手県二子城跡の放射性炭素年代測定 …… 90

（1） 試　　料 …… 90
（2） 分 析 方 法 …… 90
（3） 結　　果 …… 91

Ⅶ　まとめと考察 …… 93

1　調査のまとめ …… 93
（1） 縄文時代中期前葉以前 …… 93
（2） 縄文時代中期前葉 …… 93
（3） 縄文時代後期初頭 …… 93
（4） 弥生時代前期 …… 93
（5） 弥生時代後期 …… 94
（6） 奈良時代頃（8世紀頃） …… 94
（7） 平安時代（9世紀頃） …… 94
（8） 中　　世 …… 94
（9） 近 世 ～ 現 代 …… 94

2　二子城に関する史料の整理 …… 95
（1）二子城に関わる地点等の名称について …… 95
（2）各史料の比較から読み取れること …… 101

3　史料にみる二つの一揆と和賀氏・南部氏の動向 …… 106

報告書抄録 …… 159

図版目次

第１図　岩手県図 …… 1
第２図　遺跡位置図 …… 2
第３図　遺跡周辺の治水地形分類図 …… 6
第４図　二子城想定図（１：12,000） …… 7
第５図　二子城想定図（１：8,000） …… 8
第６図　周辺の遺跡分布図 …… 12
第７図　周辺の中世城館分布図（１） …… 15
第８図　周辺の中世城館分布図（２） …… 16
第９図　二子城主要部 …… 19
第10図　地形測量図（１） …… 20
第11図　地形測量図（２） …… 21
第12図　グリッド配置図 …… 22
第13図　遺構配置図（１） …… 23
第14図　遺構配置図（２） …… 24
第15図　遺構配置図（３） …… 25
第16図　基本層序 …… 26
第17図　ＳＩ01 …… 46
第18図　ＳＩ02 …… 47
第19図　ＳＩ03 …… 48
第20図　ＳＢ01 …… 49
第21図　ＳＫ01～05 …… 50
第22図　ＳＫＴ01～04 …… 51
第23図　ＳＫＴ05～08 …… 52
第24図　ＳＫＴ09～12 …… 53
第25図　ＳＫＴ13～16 …… 54
第26図　ＳＫＴ17～19 …… 55
第27図　炭窯01・02 …… 56
第28図　ＳＤ01・02・04全体図 …… 57
第29図　ＳＤ01（１） …… 58
第30図　ＳＤ01（２） …… 59
第31図　ＳＤ01（３） …… 60
第32図　ＳＤ01（４） …… 61
第33図　ＳＤ01（５） …… 62
第34図　ＳＤ01（６）・ＳＤ02（１） …… 63
第35図　ＳＤ02（２） …… 64
第36図　ＳＤ02（３） …… 65
第37図　ＳＤ04（１） …… 66
第38図　ＳＤ04（２） …… 67
第39図　ＳＤ01断面 …… 68
第40図　ＳＤ02・04断面 …… 69
第41図　ＳＤ03全体図 …… 70
第42図　ＳＤ03（１） …… 71
第43図　ＳＤ03（２） …… 72
第44図　ＳＤ03（３） …… 73
第45図　ＳＤ03（４） …… 74
第46図　ＳＤ03（５） …… 75
第47図　ＳＤ03（６） …… 76
第48図　ＳＤ03（７） …… 77
第49図　出土遺物（１） …… 82
第50図　出土遺物（２） …… 83
第51図　出土遺物（３） …… 84
第52図　出土遺物（４） …… 85
第53図　出土遺物（５） …… 86
第54図　出土遺物（６） …… 87
第55図　出土遺物（７） …… 88
第56図　出土遺物（８） …… 89
第57図　和賀・稗貫一揆から奥州再仕置にかけての和賀氏の動向 …… 109
第58図　岩崎一揆における和賀氏・南部氏の動向 …… 110
第59図　飛勢城実測平面図 …… 114
第60図　地籍図地割 …… 115
第61図　地籍図（第一地割字馬場野） …… 116
第62図　地籍図（第四地割字坊舘） …… 117
第63図　地籍図（第五地割字渋谷） …… 118

表 目 次

第１表　二子城関連の郭・地点の調査履歴 …… 9
第２表　周辺の遺跡一覧表 …… 11
第３表　二子城周辺の中世城館 …… 13
第４表　二子城にかかる史料一覧 …… 119

写真図版目次

写真図版１　航空写真（１） …… 123
写真図版２　航空写真（２） …… 124
写真図版３　出土遺物（１） …… 125
写真図版４　出土遺物（２） …… 126
写真図版５　調査前現況、調査区全景 …… 127
写真図版６　ＳＤ01・02現況 …… 128
写真図版７　ＳＤ01・02（１） …… 129
写真図版８　ＳＤ01・02（２）、ＳＤ01断面（１） …… 130
写真図版９　ＳＤ01断面（２） …… 131
写真図版10　ＳＤ01断面（３）、ＳＤ02断面（１） …… 132
写真図版11　ＳＤ02断面（２）、ＳＤ01・02（３）他 …… 133
写真図版12　ＳＤ03（１） …… 134
写真図版13　ＳＤ03（２） …… 135
写真図版14　ＳＤ03（３） …… 136
写真図版15　ＳＤ03（４） …… 137
写真図版16　ＳＤ03（５） …… 138
写真図版17　ＳＤ03（６） …… 139
写真図版18　ＳＤ04、ＳＢ01 …… 140
写真図版19　ＳＩ01（１） …… 141
写真図版20　ＳＩ01（２） …… 142
写真図版21　ＳＩ02（１） …… 143
写真図版22　ＳＩ02（２）、ＳＩ03（１） …… 144
写真図版23　ＳＩ03（２）、ＳＫ01・02 …… 145
写真図版24　ＳＫ03～05、ＳＫＴ01 …… 146
写真図版25　ＳＫＴ02～05 …… 147
写真図版26　ＳＫＴ06～09 …… 148
写真図版27　ＳＫＴ10～13 …… 149
写真図版28　ＳＫＴ14～17 …… 150
写真図版29　ＳＫＴ18・19、炭窯01（１） …… 151
写真図版30　炭窯01（２）、炭窯02（１） …… 152
写真図版31　炭窯02（２） …… 153
写真図版32　出土遺物（１） …… 154
写真図版33　出土遺物（２） …… 155
写真図版34　出土遺物（３） …… 156
写真図版35　出土遺物（４） …… 157
写真図版36　出土遺物（５） …… 158

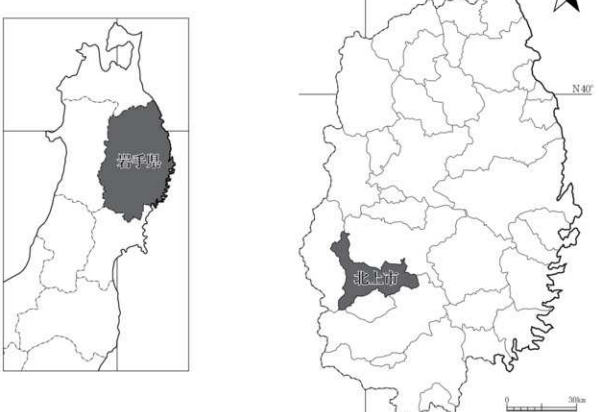
Ⅰ　調査に至る経過

二子城跡遺跡は、北上特定公共下水道事業計画における北上工業団地終末処理場の増設予定区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

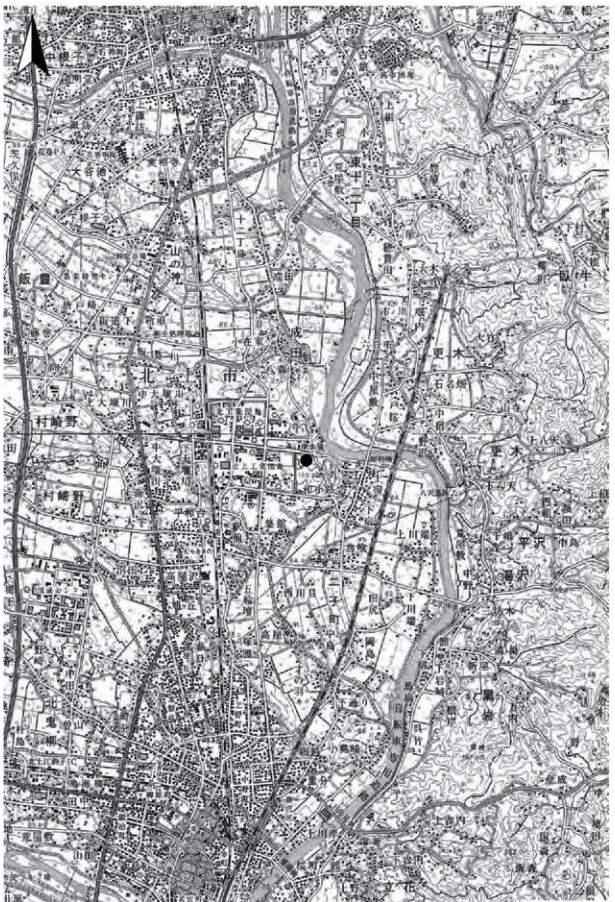
北上工業団地終末処理場は、半導体大手キオクシア㈱及び関連企業の北上進出に伴い、北上工業団地の汚水量の増加が見込まれることから、終末処理場の増設をするものである。

当該遺跡に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成31年1月7日付30北水下第1032号において、岩手県教育委員会宛に埋蔵文化財発掘の通知を行い、岩手県教育委員会及び北上市教育委員会と協議を行った結果、公益財団法人岩手県文化振興事業団と委託契約を締結することとなった。発掘調査は令和元年度から着手しており、本年度は令和2年2月14日付31北水下第1152号により、北上市長から岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課総括課長あてに発掘調査を依頼し、令和2年4月1日付けで同団と委託契約を締結し、発掘調査を実施した。

（北上市役所都市整備部下水道課）



第1図　岩手県図



第２図　遺跡位置図

Ⅱ　遺跡の立地・環境

1　遺跡の位置

二子城跡は岩手県北上市二子町字十文字・渋谷・坊館ほかに所在し、国土地理院発行50,000分の1地形図「花巻」、「北上」の図幅に含まれ、北緯39度20分0秒、東経141度8分6秒に位置する。本遺跡調査区は、中世に和賀郡を広く治めていた和賀氏の本拠「二子城」の一部、「秋葉山」の北裾緩斜面に該当する。

二子城跡（別名：飛勢城）は北上川西岸の独立丘陵および河岸段丘上に築かれた県内最大の中世城館跡で、全体規模は南北約2.3km、東西約1kmを測る。北側を東流する飯豊川により区切られ、東側は南流する北上川による比高差10m超の段丘崖と接する。南側は近世に行われた一大干拓事業（註1）によって景観を様変わりさせているが、かつて二子城時代は北上川の氾濫平野上に形成された大沼（後谷地）が水を満々と湛え、南の防御線として存在した。西側には南流する飯豊川支流と、同支流の旧河道、秋子沢から北方に延びる覚禅坊谷地などによって、一帯にぬかるんだ谷地が形成されていた（第4・5図参照）。このように東西南北を自然の要害によって守られた立地に、二子城が築かれた理由があったと考えられる。（丸山）

参考文献および註釈

註1　鈴木隆太郎　1913「二子村誌」第十八　108頁　城東文庫・及川雅義　昭和31年（1956）『飛勢城物語』33・34頁　北加美社

2　地理的環境

北上川は流路延長249km、流域面積10,150㎢を誇る、東北地方一の大河である。源泉は岩手郡岩手町御堂にあり、奥羽山脈および北上山地に源を発する支流を合わせながら岩手県内を南流し、宮城県の平野部を経て河口に至る。沿岸には平野が広く発達するが、盛岡市北部と一関市南東の2箇所で狭窄部を流れる。この2箇所によって北上川は上・中・下流に分けられる。北上川は中流域において、壮年期の急峻な地形を呈している奥羽山脈と、それとは対照的に老年期に入り緩慢な地形となっている北上高地の間を流れる。北上盆地は北上川とその支流の土砂運搬作用および開析作用によって形成されたものであるが、奥羽山脈に源をもつ支流による流出土砂が北上高地からに比べて圧倒的に多いので、北上川は盆地の東側に偏った流れとなっており、西側には奥羽山脈沿いに複合扇状地と河岸段丘が、東側は準平原である北上高地の残丘の丘陵が発達している。

北上市周辺においても、こうした地形上の特徴は明瞭に見受けられる。北上市周辺の地形は、北上川を境として、西部の扇状地性の台地群と東部の小起伏山地を含む丘陵地帯の二つに区分される。西部の台地群は、奥羽山脈から東流する河川が洪水と流路の変更を繰り返して形成した扇状地や、北上川の旧河床が段丘化したもので、段丘群は高位のものから順に西根段丘・村崎野段丘・金ヶ崎段丘に区分されるが、地域によっては村崎野・金ヶ崎段丘は更に細分される。現在はこれらの台地群を刻んで、和賀川およびその支流の夏油川の両岸に幅1～2kmの谷底平野が見られる。東部では、一部に台地が発達する地域があるものの大部分は標高200～300m内外の丘陵地で、その中に小起伏山地が散在する。北上川沿いでは幅1～4kmの平野が開けており、北上川の流路変遷をうかがうことのできる旧河道と自然堤防地形が残存する。

本遺跡のある二子地区は、北および東は北上川を境とし、西は旧奥州街道、南は江戸時代初期に和賀川から引かれた用水路である新堰川を境界とし、更木地区、飯豊地区、黒沢尻地区と接している。北西部に標高112ｍの一ツ森と、これに次ぐ二子の地名の元となった「八幡山」「秋葉山」の二つの小山がある。これに続いて西部から南端までの境界に沿った幅数百ｍ以内の台地は村崎野段丘に区分される。それ以外の二子地区の大部分は標高約60～70ｍの平坦地で、旧河道と自然堤防、氾濫平野が複雑に入り組んだ地形となっている。（丸山）

3　歴史的環境

（1）二子城の縄張り

城を構成する郭群は、3つの立地に分かれて構築されている。標高100ｍを超える独立丘陵上には、詰めの城である「八幡山」、西の鎮護の「秋葉山」、北の物見台とされる「一ツ森」が立地する。八幡山の頂上からの眺めは良好で、北は花巻（鳥谷ケ崎）方面から遠く東根山・岩手山を眼前におさめ、東から南にかけては更木方面一帯から追手門、大沼のある後谷地方面までを見渡すことができる。南西から西側に向けては「秋葉山」、北西から北側に向けては「一ツ森」からの眺望が開けており、丘陵上に築かれたそれぞれの郭が敵の動向を監視する物見台の役割を相互に果たしたものと想定される。

北上川西岸の河岸段丘上には重臣屋敷群・侍屋敷群・寺院跡などが独立丘陵の裾野を取り巻くように存在している。重臣屋敷については、持ち主の名前が判明しているものはそれほど多くはないが、飯豊川と北上川で区切られた空間の外側に位置し、二子城北端の出城的な役割を担ったと考えられる「成田館」（註1）や二子城家老を務めた筒井内膳・縫殿助父子の屋敷跡と伝わる郭、同じく「斎藤堀」の名の由来となった斎藤九郎衛門の屋敷跡と伝わる地点などが伝承と共に伝わっている。「侍屋敷」については八幡山・秋葉山より南に広がる丘陵裾野からおおむね段丘縁辺までの地点が該当すると推定され、北上川の段丘崖を挟んで上段に「侍屋敷」・「上町侍屋敷」の名が見える（第4・5図参照）。

「坊館」「永明寺跡」は寺院跡に該当する。「坊館」は、和賀氏の祖先が居城を更木から飛勝ケ森に移した時、坊館の場所に「正法寺」を建立し、和賀氏の祈祷所としたものである。しかし「正法寺」は奥州仕置きの兵乱で一切を焼失することとなり、その後現在の「金剛山遍照寺」の場所に寺号を変えて再興されたと伝わる（註2）。第59図の坊館の区画に見える「鶴ヶ池」「亀ケ池」の名称は、関連する記述として天保2年の『二子物語』の中に「鶴ヶ池、亀ヶ池トテ池有也」、大正2年（1913）の『二子村誌』にある監物館の項に「館址に鶴ヶ池・亀ヶ池の二小池あり、今は埋没して僅かに痕跡を止むるのみ。此地和賀の士、監物と称するものの館址にして鶴亀を飼養せるは前述の小池なり」とあり、この資料が元になっていると考えられる。「永明寺跡」は同じく更木から対岸の二子城に居を移した時に飛勝ケ森と秋葉山の間の森合というところに移り、和賀氏代々の保護を受けていたとされる寺院の跡である。現在の梅澤山永明寺については、天文4年に現在地に再興されたものという。

城主居館である「白鳥館（古館・御館）」は、北上川の屈曲点の段丘上に立地する。白鳥館の名称は『二子村誌』の中に見え「今の白鳥館なり、里人御館（おたて）と称す。和賀氏の常の御殿を建てたる処なり」とある。南に隣接する文珠院とともに、周囲150ｍ×250ｍの範囲を二重堀によって区画された唯一の空間で、重要な郭であったことがうかがえる。白鳥館の西側には現在も白鳥大明神が祀られている。和賀氏本家が深く信仰していたとされ、和賀氏発祥の地の宮城県苅田郡から苅田郡白鳥庄（しらとりのしょう）の鎮守を移転したものと伝承されている。白鳥館の中央に位置する「和賀神社」は

昭和10年に宿出身の実業家及川銀太郎氏の篤志で創建されたもので、祭神として和賀一族の祖霊を祀る。現在、県道清水野－村崎野線が通っている地点については平成13年から15年にかけて行われた発掘調査の結果、白鳥館と文珠院の郭間を区切る堀であったことが判明している（註3）。白鳥館の南側には二重堀で囲まれた「文珠院」と呼ばれる郭が連続しているが、この郭については『二子物語』の中で「此西之山ハ和賀時代之時、愛宕堂建給ふ所也。今ニ石塔之跡有なり。和賀没落之後、御堂を建置候得共、嵐に吹落ニて今ハ八幡山ノ東成文珠院屋敷ニ文珠堂ト愛宕堂ト被建置ル也。今ハ愛宕山江秋葉堂建也。此山之西南ニ当て一体和尚之文珠堂被立候跡有、今ハ八幡之東文珠院之所江牽移シなり」の記述がある。一体和尚が建てたとされるお堂の伝承については享保11年頃（1726頃）に書かれた『和賀郷村志』内に「文珠堂荒迹」「五輪壇文珠堂」の記述が見える（註4）。後年の『二子物語』にみえる、「文珠院」の引用の元ということになろうか。

一方、『二子村誌』には文珠院について「古舘の南なり、近年迄愛宕堂ありしが、今は村社の境内に遷し奉れり。此地何人の館なりしか明ならず、或は白鳥館の内かとも思はる、要害の構なり。」とある。この頃には、一体和尚の…という記述は見えず、愛宕堂が近年まであったという事と、要害の構えであることから白鳥館の一部と考えられる、という内容が述べられているのみである。

文珠院の南に隣接する二重堀の外郭には堀が途切れて土橋状を呈する出入口施設がある。これを入るとその奥には「山ノ神神社」が祀られた小規模な空間が存在する。

さらに段丘下の沖積平野には、「上町侍屋敷」からつづく「下町侍屋敷」が立地し、その更に東側には「御蔵坊屋敷」また、城主居館である白鳥館の位置する段丘縁の下は、城主の母親の屋敷「御台方屋敷」があったと伝わる一角が存在する。また、一番東側には街道を取り巻くように「宿」と呼ばれる城下集落が形成されている。（同図参照）。　（丸山）

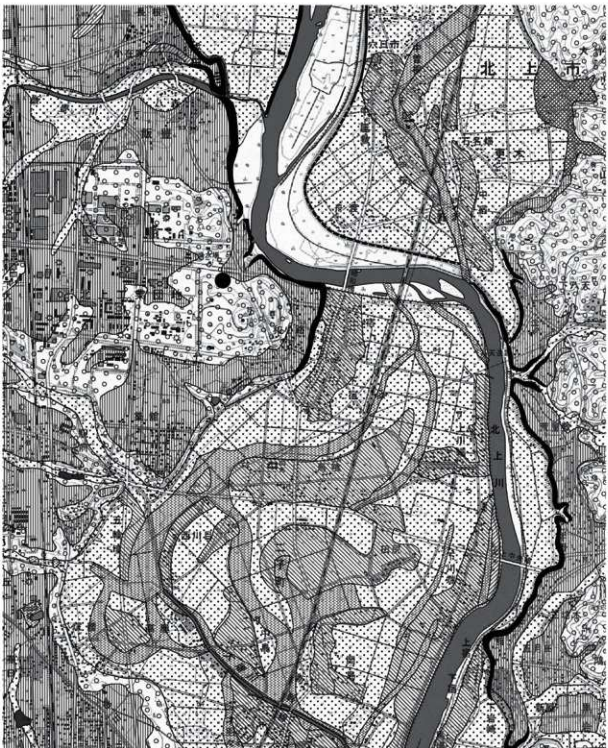
参考文献および註釈

註1　戸部正直　1698「奥羽永慶軍記　巻三十五」　近藤瓶城編　1901『史籍集覧』史ノ第八冊　近藤出版部　所収
「其勢（和賀勢）百八十騎八森ヲ後ニアテ、小川ヲ前ニシテ岩田堂ニ陣ヲ張ル寄手（南部勢）行懸ニ成田藤内カ舘ヲ焼拂ヒ夫ヨリ岩田堂ニ取掛ル」という記述があることから、八森を背にして眼下を流れていたのは飯豊川、成田藤内の館というのは成田館であったのではないかとの推定による。

註2　富岡理翁　天保2年（1831）『二子物語』・及川雅義　昭和31年（1956）『飛勢城物語』34頁　北加美社

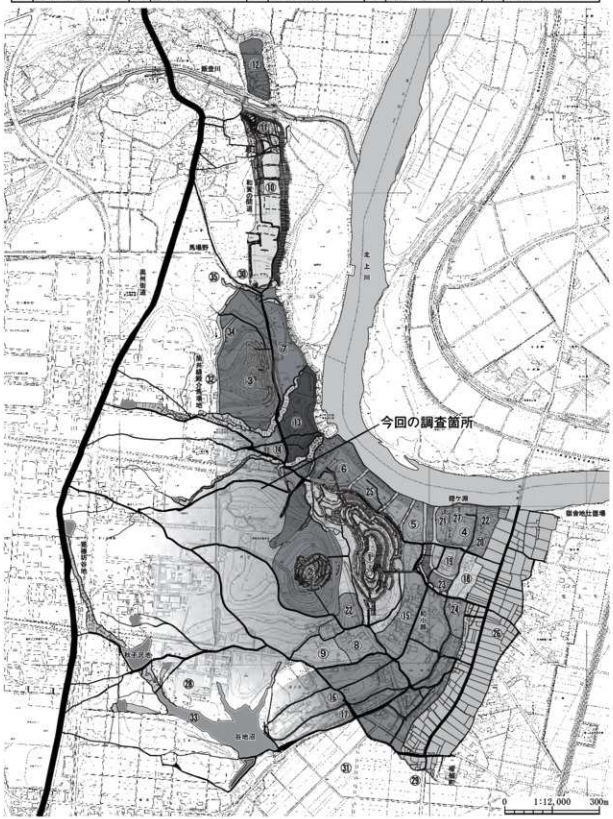
註3　北上市教育委員会　2004『二子城跡』17頁　北上市埋蔵文化財調査報告書第65集

註4　松井道圓　享保11年頃（1726頃）『和賀郷村志』

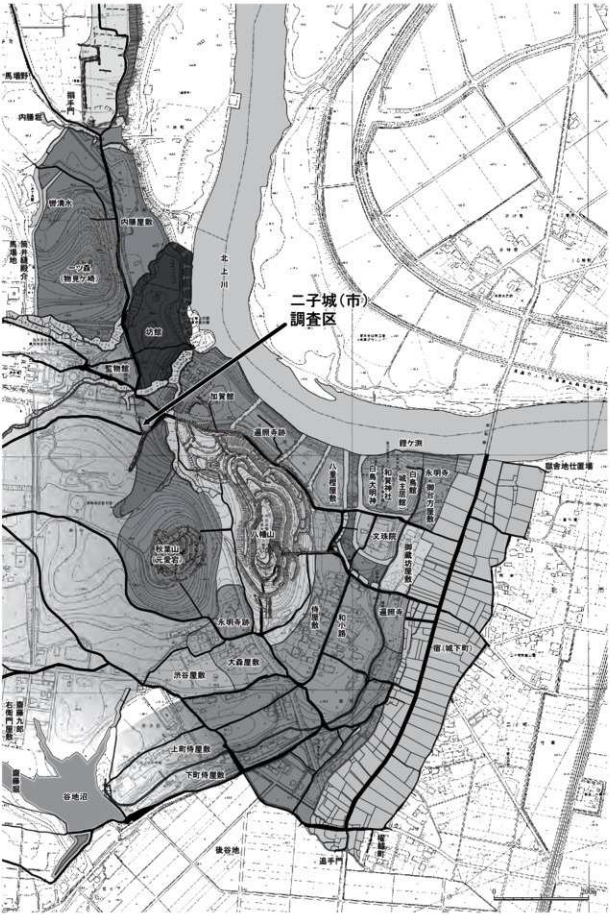


第３図　遺跡周辺の治水地形分類図

1	八幡山（飛勢ケ森）	8	大森屋敷	15	侍屋敷	22	永明寺跡	29	追手門
2	秋葉山（元愛宕）	9	渋谷屋敷	16	上町侍屋敷	23	山ノ神神社	30	搦手門
3	一ツ森（物見ケ崎）	10	成田岩田堂館跡	17	下町侍屋敷	24	退照寺	31	後谷地
4	白鳥館（城主居館）	11	八森館	18	御蔵坊屋敷	25	退照寺跡	32	一夜堀
5	八重樫屋敷	12	成田館	19	文珠院	26	宿（城下町）	33	御屋敷
6	加賀館	13	坊館（正法寺跡）	20	御台方屋敷	27	和賀神社	34	くつわ清水
7	筒井内膳屋敷	14	監物館	21	白鳥大明神	28	斎藤九郎右衛門屋敷	35	内膳堀



第４図　二子城想定図（１：12,000）



第５図　二子城想定図（１：8,000）

（2）周辺の遺跡

岩手県登録台帳によると、平成30年12月31日現在で北上市には登録遺跡が554遺跡確認されている。このうち、二子城を中心とした範囲の94遺跡を掲載した（第6図）。個別の遺跡の内容については第2表を参照されたい。また、二子城の郭やそれに関連する地点の調査が昭和41年から14遺跡、22地点にわたって行われている。これまでの調査履歴をまとめたものが第1表である。　（丸山）

（3）二子城周辺の中世城館

第3表に二子城周辺の中世城館を計52遺跡掲載した（第7・8図）。　（羽柴）

第1表　二子城関連の郭・地点の調査履歴

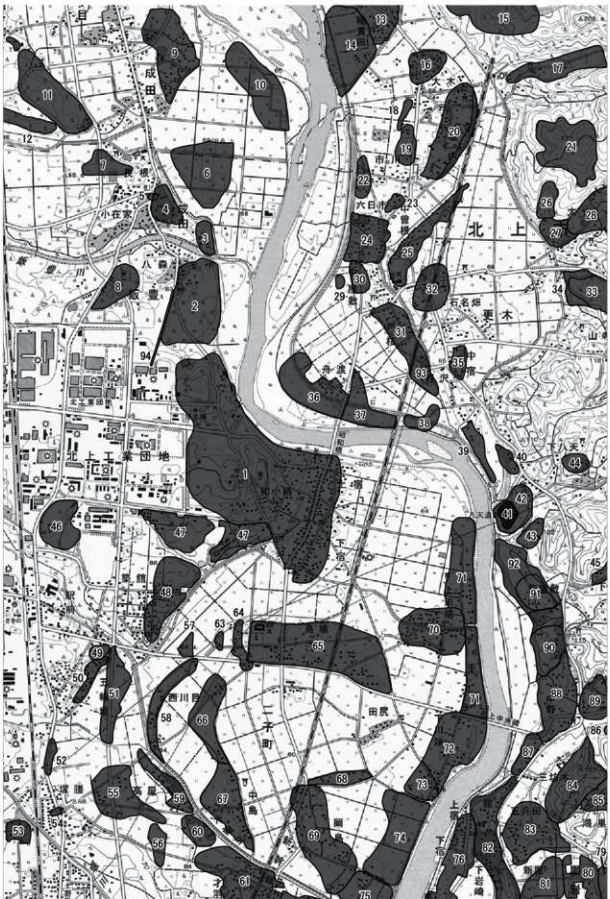
No.	郭・地点	原因	調査期間	面積	遺構	遺物	調査機関	発行年	書名
1	秋子沢（第一次）	北上川堤防築造工事に伴う農地造成	昭和41年7月6日～21日	明記なし	古代の竪穴住居跡9棟	平安時代の土師器・須恵器・緑釉陶器片、石製品、鉄製品・鉄滓、植物種子、縄文土器・石器片	北上市教育委員会	1976	「北上市二子町秋子沢遺跡調査報告」『北上市史第1巻 原始・古代（一）』北上市史刊行会
	秋子沢（第二次）	学術調査（昭和42年度文科省科研費及び北上市）	昭和42年8月20日～31日	明記なし	古代の竪穴住居跡7棟、溝1条	平安時代の土師器・須恵器・緑釉陶器片、鉄製品	北上市教育委員会・早稲田大学	1976	「北上市二子町秋子沢遺跡調査報告」『北上市史第1巻 原始・古代（一）』北上市史刊行会
2	行人塚	セメント工場拡張	昭和49年6月10日～6月14日	200㎡	近世墳墓2基	寛永通宝2枚	北上市教育委員会	1975	本堂寿一「二子行人塚遺跡」『日本考古学年報27』日本考古学協会1974年版
3	加賀館	工業団地汚水終末処理場建設（1977の報告書には北上工業団地特定公共下水道終末処理場建設との記述）	昭和49年9月1日～9月10日	3,000㎡	堀2条、時期不明の小溝2本（1977の報告書には大濠・2条の溝が走る柵列との記述）	縄文後期土器片、打製石斧、かわらけ片（1977の報告書には縄文期の土器片、打製石斧、中世の陶器片との記述）	北上市教育委員会	1975 1977	本沢慎輔「二子城遺跡」『日本考古学年報27』日本考古学協会1974年版 「Ⅲ 調査に至る経緯」『二子城跡坊館遺跡調査報告書』北上市教育委員会文化財調査報告第21集
4	秋葉山	水道給水タンク建設	昭和52年10月1日～11月10日	明記なし	近世墳墓1基、鎌倉時代以降の竪穴状遺構1棟	出土せず	北上市教育委員会	1977	『二子城跡秋葉山遺跡調査概報』北上市教育委員会
5	坊館	工業用水導水管布設路線及び取水場建設	昭和52年4月14日～5月31日	明記なし	縄文期の溝状土坑1ケ所、性格不明の土坑4ケ所	縄文早期の土器片・石器	北上市教育委員会	1977	『二子城跡坊館遺跡調査報告書』北上市教育委員会文化財調査報告第21集
6	加賀館	北上川東岸遺跡詳細分布調査関連	昭和60年	明記なし	中世の溝跡1条、これより新しい炭窯跡1基	縄文土器片、石器・石製品	北上市教育委員会	1986	「加賀館」『北上川東岸遺跡詳細分布調査報告書Ⅲ（口内地区）』北上市教育委員会文化財調査報告第43集
7	くつわ清水	しみず斎園拡張工事	昭和62年3月22日～31日（試掘）、昭和63年4月11日～（本調査）	明記なし	縄文時代の袋（フラスコ）状土坑1基、平安時代の土坑4基（墓に関連か）、中世の堀・土塁、土坑2基	縄文土器片・石器片、平安時代の土師器小片、鉄製品	北上市教育委員会	1989	『くつわ清水遺跡調査報告書』北上市文化財調査報告書第51集
8	坊館	第三北上中部工業用水道施設建設	昭和63年10月4日～11月12日	1,360㎡	縄文時代の竪穴住居2棟、土器埋設炉1基、焼土遺構1基、溝状陥し穴2基、土坑6基、縄文以降近世初頭の建物様土坑55基、柱穴状小土坑19基	縄文土器・土製品・石器・石製品、平安時代の土師器片、瓦器片、陶器片、鉄製品片	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	1989	『坊館跡発掘調査報告書』岩文振埋文調報第145集

No.	郡・地点	原因	調査期間	面積	遺構	遺物	調査機関	発行年	書名
9	物見崎（物見ケ崎）	第三北上中部工業用水道施設建設	平成元年4月7日～6月20日	1,945㎡	縄文時代の竪穴住居18棟、土坑1基、炭窯跡5基、溝跡4条	縄文（前期主体）土器、弥生土器、剥片石器	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	1990	『物見崎遺跡・監物館跡発掘調査報告書』岩文振埋文調報第157集
10	監物館	第三北上中部工業用水道施設建設	平成元年4月7日～6月20日	300㎡	時期不明の溝跡1条	出土せず	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	1990	『物見崎遺跡・監物館跡発掘調査報告書』岩文振埋文調報第157集
11	白鳥館	二子地区遺跡詳細分布調査	平成3年	明記なし	遺構間の重複多い。整地層、掘立柱建物跡、竪穴住居、土坑、溝状遺構らしきプランを確認	縄文土器（早期後半）、平安時代の土師器・須恵器、陶磁器（15～16世紀代・19世紀代）、石製品、古銭、青銅製品、鉄製品	北上市教育委員会	1991	『二子城白鳥館』『二子地区遺跡詳細分布調査報告書』北上市文化財調査報告第65集
12	馬場野	工場用地造成工事	平成3年4月15日～6月24日	約7,000㎡	縄文晩期の土坑7基、焼土1基、溝3条、柱穴状土坑330基	縄文時代晩期の土器片、石器片、陶磁器片（18～19世紀代）	北上市教育委員会	1992	『馬場野遺跡』北上市埋蔵文化財調査報告第2集
13	八幡山（A・B区）	内容確認	平成10年10月7日～12月16日	460㎡	中世の整地痕跡、掘立柱建物跡19棟、柱穴列8列	中国産青磁（14世紀後～15世紀前半）、古瀬戸、在地産甕類（被熱遺物を含む）。国産陶磁器の年代幅は13世紀後～15世紀前で、主体は14世紀後～15世紀前半	北上市教育委員会	2004	『二子城跡』北上市埋蔵文化財調査報告第65集
	八幡山（C～F区）		平成11年10月18日～12月16日	190㎡	中世の整地痕跡、堀跡・土塁、掘立柱建物跡14棟	中国産青磁・陶器（14世紀後～15世紀前半）、古瀬戸、大窯製品、在地産甕類（被熱遺物を含む）。国産陶磁器の年代幅は13世紀後～16世紀中葉で、主体は14世紀後～15世紀前半）	北上市教育委員会	2004	『二子城跡』北上市埋蔵文化財調査報告第65集
	八幡山（H～J区）		平成12年5月9日～7月4日	1079㎡	中世の整地痕跡、掘立柱建物跡17棟、柱穴列3列	中国産染付（15世紀後～16世紀中葉）、古瀬戸、大窯製品、志野焼（被熱遺物を含む）。国産陶磁器の年代幅は13世紀後～17世紀初で、16世紀後～17世紀初のものが主体	北上市教育委員会	2004	『二子城跡』北上市埋蔵文化財調査報告第65集
14	白鳥館（N・L区）	内容確認	平成13年7月3日～25日	25㎡	中世の整地痕跡、堀跡・土塁、掘立柱建物跡10棟、柱穴列3列	中国産青磁・染付（14世紀後～15世紀前、16世紀後～17世紀初）、古瀬戸、大窯製品、在地産甕類。国産陶磁器の年代幅は13世紀後～17世紀初で、14世紀後～17世紀初のものが主体	北上市教育委員会	2004	『二子城跡』北上市埋蔵文化財調査報告第65集
	白鳥館（L・M区）		平成14年3月18日～7月29日	144㎡			北上市教育委員会	2004	『二子城跡』北上市埋蔵文化財調査報告第65集
	白鳥館（O・P区）	公園内トイレ設置	平成15年11月12日～12月15日	50㎡			北上市教育委員会	2004	『二子城跡』北上市埋蔵文化財調査報告第65集
15	五輪壇	内容確認	平成13年10月4日～11月21日	96㎡	中世後半～近世初頭の火葬集団墓、墓に伴う堀跡2条、堀状の落ち込み1箇所、集石5箇所、墓壙5基、火葬骨のまとまり2箇所、土坑4基	永楽通宝・寛永通宝、鉄製品	北上市教育委員会	2004	『五輪壇遺跡』北上市埋蔵文化財調査報告第66集
16	成田岩田堂	緊急地方道路整備事業成田更木地区	平成19年7月2日～11月16日	4,800㎡	縄文時代の陥し穴9基、平安時代の方形周溝1基、中世の堀跡1条、土塁1条、掘立柱建物跡9棟、溝跡2条、時期不明の土坑12基	縄文土器・弥生土器・石器、平安時代の土師器・須恵器・鉄製品	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	2008	『成田岩田堂館遺跡発掘調査報告書』岩文振埋文調報第540集
17	奥州街道	北上工業団地造成	平成30年6月7日～7月下旬	約600㎡	街道の側溝、街道脇の土手、縄文時代の陥し穴1基	明記無し	北上市教育委員会	未刊	

第２表　周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡ｺｰﾄﾞ	遺跡名	種別	時代
1	ME46-2214	二子城	集落跡、城館跡	縄文・中世
2	ME46-1221	成田岩田常館	散布地、城館跡	縄文・弥生・古代・中世
3	ME46-0292	成田館	城館跡	中世
4	ME46-0169	下成田	集落跡	縄文・平安
5	ME46-0167	成田一里塚	一里塚	近世
6	ME46-0242	成田Ⅲ	散布地	平安・縄文・古代
7	ME46-0146	成田長根	集落跡	平安
8	ME46-1126	成田	集落、窯跡	古代・縄文
9	ME36-2260	成田Ⅱ	散布地	古代
10	ME36-2285	成田Ⅰ	散布地	古代
11	ME36-2191	神Ⅱ	集落跡	平安
12	ME46-0110	小中野	散布地	縄文
13	ME36-2313	植貫田	集落跡	古代
14	ME36-2371	駒板	集落跡	縄文・平安
15	ME36-2319	栗藤館	城館跡	中世
16	ME36-2377	大木	散布地	縄文・古代
17	ME37-2076	長志田	散布地	縄文
18	ME46-0315	山口	集落跡	平安
19	ME46-0335	小川屋敷	集落跡	縄文・平安
20	ME46-0318	大木堀ノ内	散布地	平安
21	ME47-0026	大竹堀寺	寺院跡	平安
22	ME46-0343	市の川Ⅰ	散布地	平安
23	ME46-0374	市の川Ⅱ	散布地	平安・近世
24	ME46-0392	六日市	集落跡	弥生・平安・近世
25	ME46-0386	中曽根	集落跡	平安
26	ME47-0065	大森	散布地	平安
27	ME47-0085	大竹Ⅲ	散布地	旧石器・縄文
28	ME47-0077	童子前	散布地	縄文
29	ME46-1321	中の屋敷Ⅱ	散布地	平安
30	ME46-1312	中の屋敷Ⅰ	散布地	平安
31	ME46-1354	戸板	散布地	縄文・弥生・平安・近世
32	ME46-1326	石名畑	散布地	平安
33	ME47-1028	舘山	散布地	縄文
34	ME47-1028	更木館	城館跡	中世
35	ME46-1368	中宿	散布地	縄文
36	ME46-1390	舟渡Ⅰ	散布地・集落跡	縄文・弥生・平安
37	ME46-2314	舟渡Ⅱ	集落跡	平安・近世
38	ME46-2306	野沢Ⅱ	集落跡	縄文・弥生・平安・近世
39	ME47-2051	八天北	集落跡	平安
40	ME47-2032	羽久保館	城館跡	中世
41	ME47-2072	下欠野館	城館跡	中世
42	ME47-2062	八天	集落跡	縄文
43	ME47-2084	牛縄	散布地	縄文
44	ME47-2036	天王館	城館跡	中世
45	ME57-0008	沢目	散布地	縄文
46	ME46-2183	伊勢	散布地	近世

No.	遺跡ｺｰﾄﾞ	遺跡名	種別	時代
47	ME46-2283	伏手沢	集落跡	平安
48	ME56-0220	築館	散布地	平安
49	ME56-0165	五輪塚	墳墓	中世
50	ME56-0184	南田Ⅱ	散布地	縄文
51	ME56-0195	南田Ⅰ	集落跡	縄文・平安
52	ME56-1142	明神Ⅰ	散布地	古代
53	ME56-1099	下春木場	集落跡	縄文
54	ME56-1161	二子一里塚	一里塚	近世
55	ME56-1155	高屋Ⅰ	散布地	古代
56	ME56-1189	高屋Ⅱ	散布地	古代
57	ME56-0251	塚向Ⅰ	散布地	縄文・古代
58	ME56-0189	塚向Ⅱ	集落跡	平安・近世
59	ME56-1138	明神Ⅱ	集落	縄文・平安
60	ME56-1280	野田Ⅱ	散布地	縄文
61	ME56-2213	野田Ⅰ	集落跡	縄文・弥生・平安
62	ME56-2249	中居敷Ⅱ	集落跡	平安
63	ME56-0254	鳥喰Ⅲ	散布地	古代
64	ME56-0254	鳥喰Ⅱ	散布地	古代
65	ME56-0259	鳥喰Ⅰ	集落跡	古代
66	ME56-1101	西川目	集落跡	平安
67	ME56-1263	中島	集落跡	縄文・古代
68	ME56-1340	相野野	散布地	古代
69	ME56-1289	岡島	集落跡	縄文・弥生・古代
70	ME56-0346	上川端Ⅱ	散布地	古代
71	ME56-0349	上川端Ⅰ	散布地	平安
72	ME56-1338	下川端	集落跡	平安
73	ME56-1329	尻引	集落跡	縄文・弥生・平安
74	ME56-1385	中村	集落跡	平安
75	ME56-2343	千苅	集落跡	平安
76	ME56-1388	黒岩前	集落跡	縄文・弥生・平安
77	ME57-2043	片月	散布地	縄文
78	ME57-2047	四十九里Ⅱ	散布地・墳墓	縄文・中世
79	ME57-2029	四十九里Ⅰ	散布地	縄文
80	ME57-2028	四十九里Ⅰ	散布地	縄文・平安
81	ME57-2013	宮田	集落跡	縄文・平安
82	ME57-2011	黒岩城	散布地・城館跡	縄文・平安・中世
83	ME57-1083	白山堰寺	寺院跡	平安
84	ME57-1056	鴻巣Ⅰ	散布地	縄文・平安
85	ME57-1058	鴻巣Ⅱ	散布地	縄文・弥生・古代
86	ME57-1120	神行田	散布地	縄文
87	ME57-1023	三坊木館	城館跡・散布地	中世・縄文
88	ME57-0055	三坊木	集落跡	縄文・平安
89	ME57-0097	湯沢Ⅰ	集落跡	縄文・平安・近世
90	ME57-0065	小田島館	城館跡	中世
91	ME57-0024	平沢堀ノ内	城館跡	中世
92	ME57-0013	烏森	集落跡	縄文・平安
93	ME46-1386	野沢Ⅰ	集落跡	縄文・平安
94	ME46-1159	奥州街道・成田道	街道	近世



1：25,000 土沢・口内

第６図　周辺の遺跡分布図

第３表　二子城周辺の中世城館

所在地のゴシックは 1889 年施行による市町村名　0 ~ 38 は和賀郡　39 ~ 52 は稗貫郡所在

番号	城館名	所在地	城館概要
0	二子城	**二子**　北上市二子町字渋谷他	北上川西岸の丘陵・段丘・河川平野に立地。南北長は最大約 1,500m、東西最大 1,050m。和賀氏の「本城」である。天正 20 年南部氏により「破却」される。
1	飯豊館	**飯豊**　北上市飯豊 17 地割	沖積低地上の微高地。街道の交差点通称「飯豊十文字」を内包する。永享 7・8 年の和賀稗貫大乱の「飯土肥之城」に擬定。
2	飯豊森	**飯豊**　北上市飯豊 9 地割	読みは「えんでもり」。展望の利く独立丘陵。比高約 40m。頂部を囲む 2 段の帯状の郭、南斜面に 4 段の腰郭。飯豊館に付属するか。
3	成田岩田堂館	**飯豊**　北上市成田 1 地割	北上川西岸段丘東縁部を南北に細長く占地する。二子城の北に連続し、二子城に付属する家臣団の屋敷と推測される。2007・2019 年度発掘調査実施。
4	成田館	**飯豊**　北上市成田 5 地割	成田岩田堂館とは「飯豊川を挟んだ位置関係で、二子城の枝城、出丸といった性格が想定される。和賀稗貫一揆、岩崎一揆の際の南部勢の布陣場所と推測される。
5	月館	**飯豊**　北上市飯豊 21 地割	国道四号沿い飯豊川右岸段丘。城館としての範囲不明瞭。明確な城構えが存在しておらず、地名から連想された城館の可能性もある。
6	小鳥崎館	**二子**　北上市小鳥崎 2 地割	北上川縁に突出する丘陵部北東端。東西二郭、南辺、西辺、東西郭を隔てる幅 12m 程の堀あり。西辺は二重堀。西郭縁に部分的に土塁残存。北辺は大堰川へ直接落ちる。
7	市野川原館	**更木**　北上市更木 3 地割	北上川東岸縁の氾濫平野に立地。範囲は不明瞭。『更木村誌』には「西方は北上川の険崖で北方に堀の跡今尚存して居る」と記される。稗貫郡との境界部近くに位置する。
8	更木館	**更木**　北上市更木 31 地割	中央の郭を中心に西、東側に隣接する複数の郭で構成。中央の郭は、3 ~ 4 段の切岸から構成。桑畑造成により破壊著しい。和賀氏当主の初期の居館と伝えられる。
9	梅ヶ沢城	**更木**　北上市更木 32 地割他	和賀氏当主の最初期の居館と伝えられる。位置も諸説あり、実態を確認できない。伝承上の城館である可能性も高い。本稿の位置は埋蔵包蔵地としての遺跡登録範囲。
10	下欠野館	**更木**　北上市更木 34 地割	読みは「しどかけのたて」。東辺は幅約 7m の堀。南辺は切岸と腰郭。西辺は北上川に落ちる急崖。内部の北西部を区画する L 字型の溝がある。
11	羽久保館	**更木**　北上市更木 34 地割	北上川東岸縁河岸段丘上。遺跡登録範囲は南北約 220m、東西約 100m。『県分布調査報告一覧』には「遺構不明」と記され、城館としては実態不明。
12	天王館	**更木**　北上市更木 33 地割	北上川東岸丘陵。主郭の周囲に堀。北辺に土塁が確認される。主郭南西斜面に竪堀。主郭北東側に神社境内を隔てる堀切。主郭外北東には八森神社（牛頭天王社）が鎮座。
13	黒岩城	**立花**　北上市黒岩 13 地割他	南北約 750m、東西幅 100 ~ 200m。堀で区画された凡そ 8 つの郭が南北に並ぶ連郭式。北から 2 番目の郭が主郭。地域支配の拠点の機能を有する中核的な城館。
14	三坊木館	**立花**　北上市黒岩 17 地割	『県分布調査報告一覧』に「中央橋付近だが範囲・遺構ともに不明」と記される。具体的な様相が不明で城館か否かの検討も必要。
15	湯沢館	**立花**　北上市湯沢 7 地割	『県分布調査報告一覧』に「頂部約 150m × 100m で自然面。遺構不明」と記される。城館としての遺構不明であり、城館か否かの検討も必要であろう。
16	小田嶋館	**立花**　北上市平沢 13 地割	北上川東岸丘陵。谷底平野に面する。『県分布調査報告一覧』に「屋号堀ノ内 幅約 2m の堀切あり」と記される。
17	平沢堀ノ内	**立花**　北上市平沢 5 地割	北上川東岸中位段丘に立地。水路、低地で囲まれる南北約 505m、東西約 200m が城館範囲か。範囲南端部の宅付付近を堀ノ内と呼ぶという。
18	安倍館	**立花**　北上市立花 17 地割	残丘の細長い地形上に占地。単郭式。北側後背部に幅約 10m の堀で堀切。南側帯状腰郭。土塁一部残存。北辺の堀の北側の広い平坦部も城域の可能性がある。
19	陣ケ岡	**立花**　北上市立花 14 地割	北上川東岸丘陵部。西辺の断崖を利用。遠望が利く。主郭は西面が断崖、東辺、南辺に幅約 5m の堀が巡る。北辺は堀というより帯郭状になっている。
20	高館	**立花**　北上市立花 21 地割	丘陵の西端部、中位段丘との転換点を占地。東西約 350m、南北約 150m。五郭以上の複郭式。北側幅約 15m の空堀。南側は三段の腰曲輪。桝形虎口あり。
21	立花館	**立花**　北上市立花 3 地割他	諸文献によって位置が異なっているようである。遺跡登録範囲の「立花館」は東西約 320m、南北約 100m。遺跡範囲内では中世城館としての遺構は確認できない。
22	安倍館	**黒沢尻**　北上市川岸三丁目	北上川西縁の自然堤防上。周囲との比高はほとんどない。北上川と旧黒沢川の合流地点。二郭構造と推測される。北郭を囲む堀の幅は約 15m を測る。
23	鹿島館	**鬼柳**　北上市上鬼柳 5 地割	南北約 250m、東西約 470m。北崖の比高約 20m。入沢川をはさんで、九郭からなる多郭構成。規模等から判断して、和賀川南岸における拠点的な城館と想定される。
24	丸子館	**鬼柳**　北上市下鬼柳 17 地割	自然堤防上に立地。三郭構造か。北端の 1 郭が主郭で北半の縁辺に帯郭、南半には幅 10m 以上の空堀が巡る。中世前半期の和賀川南岸における拠点的な城館と想定される。
25	白髯館	**鬼柳**　北上市下鬼柳 7 地割	段丘端部を占地。白髯神社境内の平場と観音堂境内の平場からなる二郭構造か。観音堂と神社の間の切通しは堀切の可能性あり。東辺斜面には複数の腰郭。
26	柳上館	**鬼柳**　北上市下鬼柳 4 地割他	和賀川南岸段丘縁。地形改変が著しく認識できる範囲は南北約 150m、東西約 200m。 東側に谷を利用した堀、南後背に堀切があったとされるが現在不明。
27	五条丸館	**江釣子**　北上市下江釣子 16 地割	和賀川北岸の段丘が突出した位置。氾濫平野に面する。南北二つの郭によって構成。北郭 70m × 55m、南郭 50m × 65m。両郭は堀で画される。北郭の北西には土塁が残存。
28	江釣子館	**江釣子**　北上市下江釣子 16 地割	和賀川北岸段丘端部。段丘崖の比高約 5m。主郭は江釣子神社東隣の貴徳院境内で 95m × 50m。幅 10 ~ 25m の堀で画される。
29	江釣子城	**江釣子**　北上市上江釣子 16 地割	平坦面に占地。三郭以上（五郭の可能性大）の複郭式。主郭は 110 × 80m の方形で幅 10 ~ 25m の堀が巡る。天正 20 年破却の「江釣子平城」とされる。
30	新平館	**江釣子**　北上市新平 2 地割	中位段丘の突出部に占地。単郭式。西と南に幅約 4m の堀跡、北と東に段差。南側に東西の竪堀状地形あり。段丘先端部の南東には、古道とされる「上岩崎道」が通る。
31	鳩岡崎三館	**江釣子**　北上市鳩岡崎 2 地割	低位段丘縁辺に立地。範囲の明瞭な東側の郭の規模は約 75 × 60m。東郭のみではなく、北西側に数郭存在する可能性がある。
32	田代主殿屋敷	**江釣子**　北上市上江釣子 10 地割	平坦面に占地する。堀で囲まれる単郭構造か。2008 年に範囲北側を発掘調査。16 世紀後半から近世まで営まれた屋敷と判断される。「田代主殿屋敷」の呼称の由来は不明。
33	岩崎城	**岩崎**　北上市岩崎 18・25 地割	和賀川南岸段丘～自然堤防上に立地。段丘面には五郭が並ぶ。岩崎一揆で和賀勢が最期に立て籠った城館。和賀郡全域の中でも重要度の高い拠点の城館と位置付けられる。
34	七折館	**岩崎**　北上市和賀町岩崎 15 地割	岩崎一揆での南部利直の陣城。夏油川西岸の段丘縁。約 60m 四方の単郭式。西辺と南辺に幅約 7m の堀。東辺は帯郭状になっている。北辺は浸食されているか。
35	運見館	**藤根**　北上市和賀町藤根 13 地割	微高地に立地。北西から南東に縦列する三郭構造。各郭は一辺約 65m の方形。中央と南東の郭を巡る堀跡が明瞭。北西郭の西側にもう一つ郭がある可能性がある。
36	谷地館	**藤根**　北上市和賀町藤根 11 地割	低位段丘面に立地。遺跡範囲内に「ヤチダテ」の屋号の家あり。具体的な城館としての遺構は不明瞭。

所在地のゴシックは 1889 年施行による市町村名　0～38 は和賀郡　39～52 は稗貫郡所在

番号	城館名	所在地	城館概要
37	笹間館	**笹間**　花巻市北笹間 5 地割他	低位段丘突端部に位置。幅 10m 以上の水堀で区画された六郭からなる平城。1986 年に一ノ郭と二ノ郭のほぼ全面を発掘調査。15c 初～ 16c 末の遺構遺物を検出。
38	轟木館	**笹間**　花巻市轟木 9 地割	低位段丘の平坦地。75 × 130m の範囲を幅約 15 ～ 20m の堀が取り囲む単郭構造。現況では館西側に南北方向に走る土塁と堀の痕跡が残るのみ。
39	花巻城	**花巻**　花巻市城内・花城町・将町	河岸段丘に立地。堀によって三郭に区分される。稗貫氏の本城「鳥谷ヶ崎城」が前身である。天正 19 年、当地が南部氏支配地になった際、改修・改名したとされる。
40	万丁目	**花巻**　花巻市南万丁目	微高地に立地。2018 年に発掘調査。12c ～ 15c 前半に営まれた約 50 × 80m の区画溝で囲まれる居館が検出された。15c 中葉以降も屋敷として遺跡は存続。
41	古館Ⅰ 古館Ⅲ	**根子**　花巻市中根子字古館	根子中館と称される。段丘縁に立地。東西二郭とされているが、周囲には、他にも郭が推測される。東北縦貫道に関わる発掘調査で中世の遺構・遺物が検出されている。
42	下館	**根子** 花巻市中根子字三拾六館	段丘上に立地。堀が部分的に残存するが全体の広がりは不明瞭である。周囲の地形から二郭以上の構造と推測される。
43	不動Ⅱ	**根子**　花巻市不動町一・二丁目	2001 年の発掘調査で幅 4m 以上の堀が検出され、城館の存在が想定。遺跡北側は「八反清水」と称され、岩崎一揆の和賀稗貫勢の撤退に登場する「八反清水」との関係が想定される。
44	上館	**根子**　花巻市桜町四丁目	河岸段丘上に立地。現況では堀に利用されたと解される自然の沢の他、城構は残っていない。2016 年に発掘調査。中世の掘立柱建物、竪穴建物、14c 頃の青磁碗が出土。
45	十二丁目城	**根子**　花巻市十二丁目	北上川西縁の獅子ヶ鼻と呼ばれる段丘上に立地。地形改変が著しく構造は不明瞭。堀で区画される三郭以上の構成と推測される。和賀郡との境界部に位置する。
46	根子館	**太田**　花巻市太田第 27・31 地割	昌歓寺境内付近が城館跡。五郭からなる構造。郭は堀、沢地形で区分される。昌歓寺の南の 1 郭が主郭とされる。稗貫氏重臣根子氏の本拠か。
47	太田中央	**太田**　花巻市太田第 46 地割	根子館の東側に隣接する。土塁等が残存していたとされるが、現況では不明瞭のようである。『ふるさと太田』ではこの周囲が「引館」と伝承されている旨記される。
48	中里館	**太田**　花巻市太田第 47 地割	段丘面に立地する。花巻市教育委員会 1994 では「現況は山林原野となっており堀、土塁が方形に区画されて残っており、かつては大規模なものだったという。」と記される。
49	坂井	**太田**　花巻市太田第 59 地割	低位段丘上に立地する。「東館」とも称されている。明確な城構の遺構は確認できないようであるが、花巻市教育委員会 1994 では「中世城館のひとつとして推量する」と記される。
50	高木古館	**矢沢**　花巻市高木第 20 地割	西側に突出した丘陵先端部に立地。堀切で尾根を分断し東西二郭を造っている。近辺には中館の地名もあるが、城館との関係は不明。
51	薬師館	**矢沢**　花巻市東十二丁目字 19 地割	北上東岸丘陵の西端部に立地平野との比高約 90m。主郭は全体範囲の東寄りにあり、さらに東側には堀で隔てられた「二の郭」がある。主郭の西側には約 8 段の腰郭が連なる。
52	平良木館	**矢沢**　花巻市高松第 24 地割	猿ヶ石川流域の小丘陵の頂上周辺に所在。堀あるいは土塁に区画される平場を有しているが、山林の状況で不明瞭である。和賀郡との境界部に所在。

引用参考文献

岩手県教育委員会 1986『岩手県中世城館跡分布調査報告書』岩手県文化財報告書第 82 集

江釣子村教育委員会 1981『江釣子遺跡群』昭和 55 年度発掘調査報告

大渡賢一 2007「「江釣子城跡」の検討」『北上市立埋蔵文化財センター紀要』第 4 号

北上市教育委員会 1973『北上市丸子館跡調査報告書』文化財調査報告第 12 集

北上市教育委員会 1975『鹿島館遺跡調査報告書 1』文化財調査報告書第 14 集

北上市教育委員会 1983『川岸遺跡』北上市文化財調査報告第 34 集

北上市教育委員会 1983「丸子館遺跡発掘調査略報」『北上市立博物館研究報告』第 4 号　北上市博物館

北上市教育委員会 2002『黒岩城跡』北上市埋蔵文化財調査報告書第 53 集

北上市教育委員会 2004『丸子館跡』北上市埋蔵文化財調査報告第 61 集

北上市教育委員会 2005『鳩岡崎三館』北上市埋蔵文化財調査報告第 70 集

北上市教育委員会 2012『岩崎城跡（2010 年度）』北上市埋蔵文化財調査報告書第 104 集

北上市教育委員会 2014『岩崎城跡（2011 年度）』北上市埋蔵文化財調査報告書第 110 集

北上市教育委員会 2019『黒岩城跡（2014 年度）』北上市埋蔵文化財調査報告書第 135 集

（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2013『平成 24 年度発掘調査報告書』「小鳥崎館跡」第 620 集

（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2020『万丁目遺跡発掘調査報告書』第 717 集

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1988『笹間館跡発掘調査報告書』第 124 集

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2008『成田岩田堂館遺跡発掘調査報告書』第 540 集

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2010『田代遺跡発掘調査報告書』第 566 集

中村良幸 1995「稗貫氏の家臣団と城館跡はどこにあったか」『稗貫氏探訪』稗貫氏八〇〇年記念事業実行委員会

中村萬右衛門編 1930『更木村誌』

花巻市教育委員会 1993『平成 4 年度花巻市内遺跡詳細分布報告書—矢沢地区—』

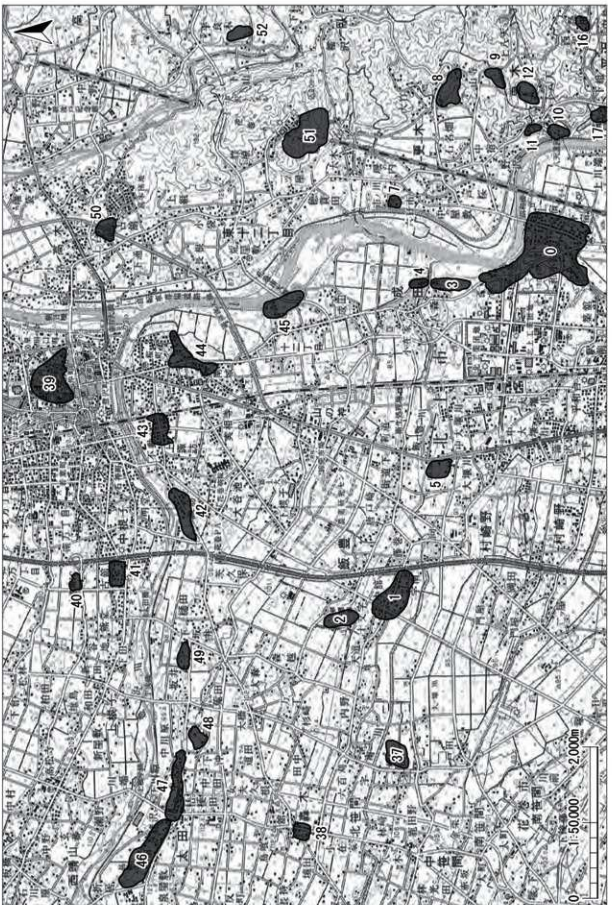
花巻市教育委員会 1994『花巻市内遺跡詳細分布調査報告書—西南地区—』

花巻市教育委員会 1998『花巻市内遺跡発掘調査報告書　平成 9 年度』花巻市埋蔵文化財調査報告書第 19 集

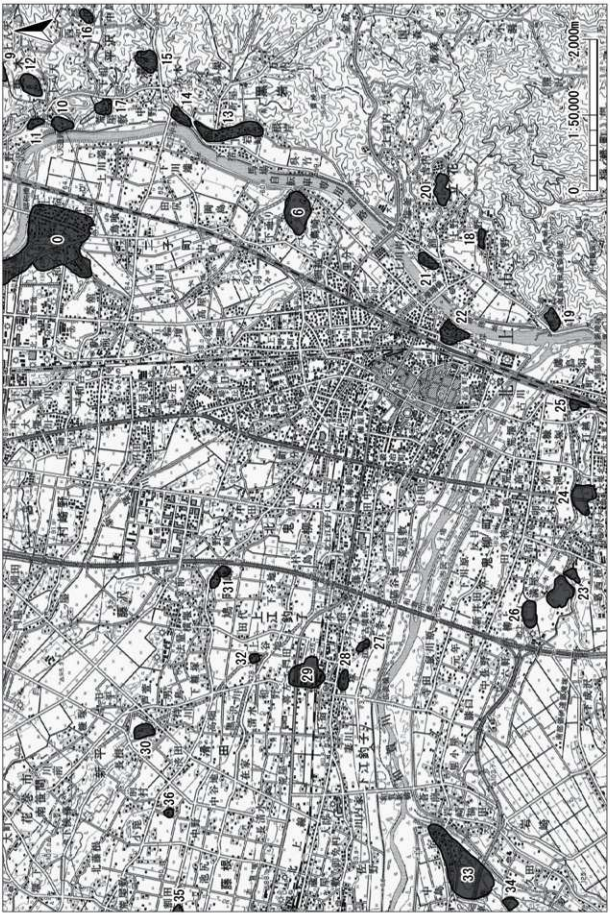
花巻市教育委員会 2002『不動Ⅱ遺跡第 4 次発掘調査報告書』花巻市埋蔵文化財調査報告書第 28 集

花巻市教育委員会 2016『花巻市文化財調査報告書（一般文化財）』花巻市文化財調査報告書第 10 集

花巻市教育委員会 2018『特別老人ホーム別棟建設関連遺跡発掘調査報告書　平成 28 年調査　上館遺跡』花巻市埋文報第 22 集



第７図　周辺の中世城館分布図（１）



第８図　周辺の中世城館分布図（２）

Ⅲ　調査と整理の方法

1　調査の経過

令和元年７月16日より、現地に野外調査器材を搬入、また重機による粗掘りを開始した。調査区は県道252号清水野村崎野線沿線上の二子町十文字交差点の南西側に位置し、現況は原野および旧市道である。はじめに調査範囲を東西方向、南北方向に縦断するトレンチを多数設置して掘削し、遺構・遺物の有無を確認した。その結果、遺構の確認された東側については、表土を除去して面的な発掘調査を行うこととした。

同年８月１日、東側調査区の伐根・遺構検出作業に着手した。８月５日、旧林道に直交するトレンチの検出作業および地表面の観察からSD01の存在を確認、その東側に土塁の存在も確認されたことから埋土掘削を行った。８月７日にはSD02の平面プランを確認、同様にベルトを残して埋土の掘削をおこなった。また、８月22日からは検出を完了した遺構から順次、遺構精査、実測を開始している。10月４日以降に、降り続いた降雨の影響により、周辺からの湧水の流入が止まず、常時水中ポンプを２台稼働しながら埋土の掘削を鋭意継続した。10月29日には県生涯学習文化財課、北上市商工部の立会いで終了確認をいただき、調査区北部（9,000㎡）の調査を終了し、残りは次年度の継続調査となった。そして、10月31日には航空写真撮影を実施し、遺構精査、実測など令和元年度の野外調査を終了した。

令和２年度は４月９日に発掘調査器材を現地に搬入し野外調査を開始した（同日から屋外作業員も勤務）。重機による表土の掘削と排土の運搬、人力による粗掘りから始めている。野外調査は概ね調査区の東側から西側へと進めていった。遺構や遺物が確認された場合を中心に人力による遺構検出、更に遺構精査、遺物の取り上げ、実測と順次作業を進めている。４月27日と７月20日に県生涯学習文化財課、北上市商工部の立会いのもと、部分終了確認を実施した。７月20日には航空写真撮影。７月21日には高所作業車を用いて写真撮影。８月27日に県生涯学習文化財課、北上市商工部の立会いで、最終的な終了確認を行った。遺構精査、実測は８月31日に終了し、調査区域から器材を撤収して二子城跡における野外調査の一切を完了した。

2　野外調査の方法

グリッドの設定

グリッドは平面直角座標のX系（世界測地系2011）に沿って設定している。座標値は第11図に示すとおりである。大グリッドは一辺100ｍとし、東西は西から東に向かってＡ、Ｂ、・・・とアルファベットの大文字を100ｍ毎に付し、南北は南から北に向かってⅠ、Ⅱ、・・・とローマ数字を100ｍ毎に付している。大グリッドの呼称は南北ラインのローマ数字と東西ラインのアルファベットの大文字との組み合わせで「ＩＡ」「ⅡＢ」というように表す。大グリッドはさらに内部を一辺５ｍの小グリッドに細分している。小グリッドは西から東に向かってａ、ｂ、ｃ、ｄ～ｔとアルファベットの小文字で付し、南から北に向かって０、１、２、３～19とアラビア数字を付す。グリッドの呼称は大グリッドと小グリッドの組み合わせで「ＩＡ３ｃ」「ⅡＢ４ｄ」というように示す。各々のグリッドの呼称は、グリッドの南西隅の杭に表示されることとなる。ＩＡ０ａの座標値はＸ＝－74,030ｍ、Ｙ＝25,830ｍ、ＩＢ０ａの座標値はＸ＝－74,030ｍ、Ｙ＝25,930ｍである。

遺構の名称

遺構の略号は、縄文時代・弥生時代の竪穴住居（略号ＳＩ）、縄文時代の陥し穴状遺構（略号ＳＫＴ）、柱穴（略号Ｐ）とこれらにより構成される中世～近世の掘立柱建物（略号ＳＢ）、中世の堀と溝（略号ＳＤ）、各時期の土坑・墓壙（略号ＳＫ）を用いた。そして、この略号の下に遺構種別各々の検出順に算用番号を付した。

粗掘り・遺構検出

雑物撤去後にトレンチを多数設定し、遺物の包含状況、遺構の有無や検出面を把握した。その後、遺構検出面まで重機を用いて表土を除去した。遺構の確認は表土を除去した面をジョレン、両刃鎌で平滑にし、プランを確認するようにした。不明瞭なプランについても遺構精査と同様の手法で掘り下げてから遺構かどうかの判断をした。

遺構の精査

検出した遺構は、土層を観察するベルトを設定して掘り下げることを基本とした。柱穴も半裁し土層を観察しながら掘り下げることを基本とした。

遺物の取り上げ

遺物は遺構ごとに取り上げ、必要と思われる場合、座標とレベルを記録した。また、可能な限り埋土の層位ごとに取り上げるように努めた。遺構外ではグリッド毎の取り上げを基本とした。

実測・写真撮影

平面実測は電子平板(株式会社ＣＵＢＩＣ　遺構実測支援システム)を使用した。また断面実測については、従来通り、レベルを用いて水平を設定し手作業による実測をおこなった。写真撮影はフルサイズデジタル一眼レフカメラと中判カメラ（モノクローム）を主に使用した。撮影は埋土堆積状況や遺物の出土状況、遺構の完掘状況などについて実施した。

3　室内整理の方法

出土遺物は水洗の後、注記をおこない、接合、復元作業を実施した。これらの作業終了後、報告書掲載遺物の選び出しと、登録をして台帳管理した。

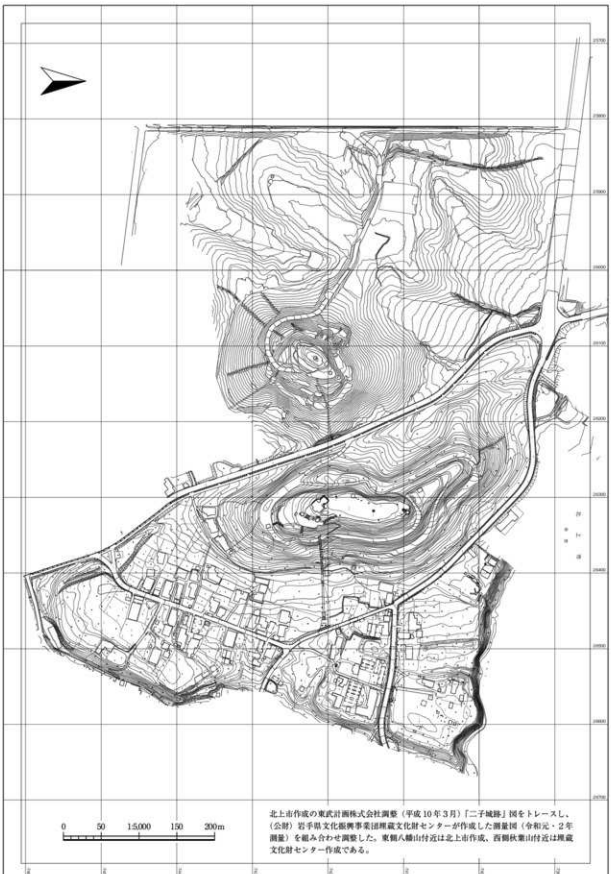
本報告書で掲載した遺構の縮尺は、竪穴住居・掘立柱建物・土坑・陥し穴状遺構・炭窯：1/60、炉：1/30、堀・溝：1/100を基本とした。各図版には縮尺率を表すスケールと方位を付している。なお平面図、断面図に記載した遺物番号は遺物図版、遺物写真図版と同一である。

遺物実測は原則として実寸で行った。また、遺物の縮尺は、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器：1/3・1/6、石器：2/3・1/6、銭貨：1/1である。図版には縮尺率を表すスケールを付している。なお遺物写真図版の掲載番号は遺物図版と同一である。

また、電子平板で実測した地形図、遺構データは点検を行い、等高線の補正、断面図の合成等を経て図版としての体裁を整えた。

野外調査写真及び報告書掲載分の遺物写真は台帳を作成し、データごとにフォルダ整理をおこなった。そして、これらのデジタル写真データから報告書掲載写真を選択し、写真図版版下の作成にあたった。中判カメラで撮影したフィルムは現像し、台帳を作成してアルバムに収めた。これらの作業の終了後、原稿の執筆を行い、報告書を編集した。　（杉沢）

二 子 城 跡

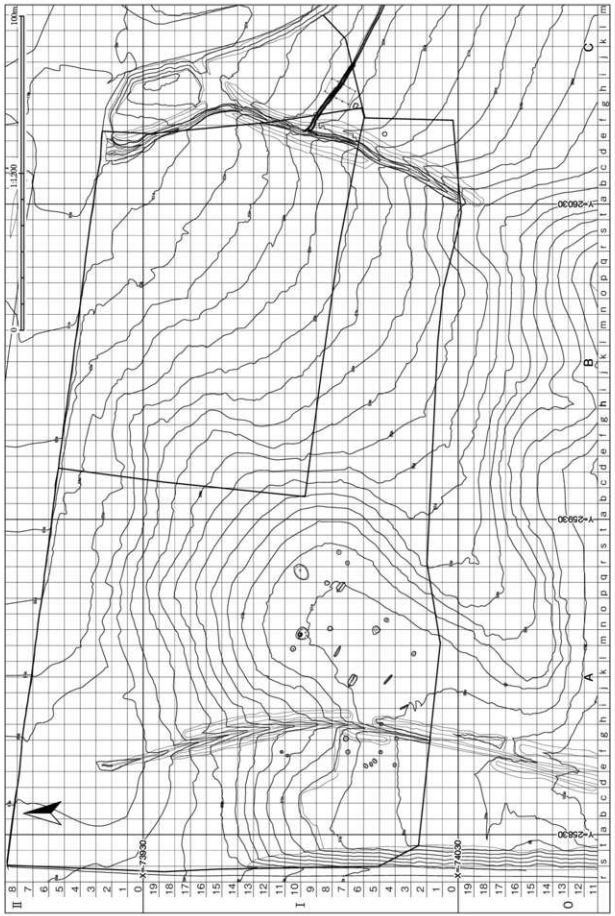


北上市作成の東武計画株式会社調整（平成10年3月）「二子城跡」図をトレースし、（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが作成した測量図（令和元・2年測量）を組み合わせ調整した。東側八幡山付近は北上市作成、西側秋葉山付近は埋蔵文化財センター作成である。

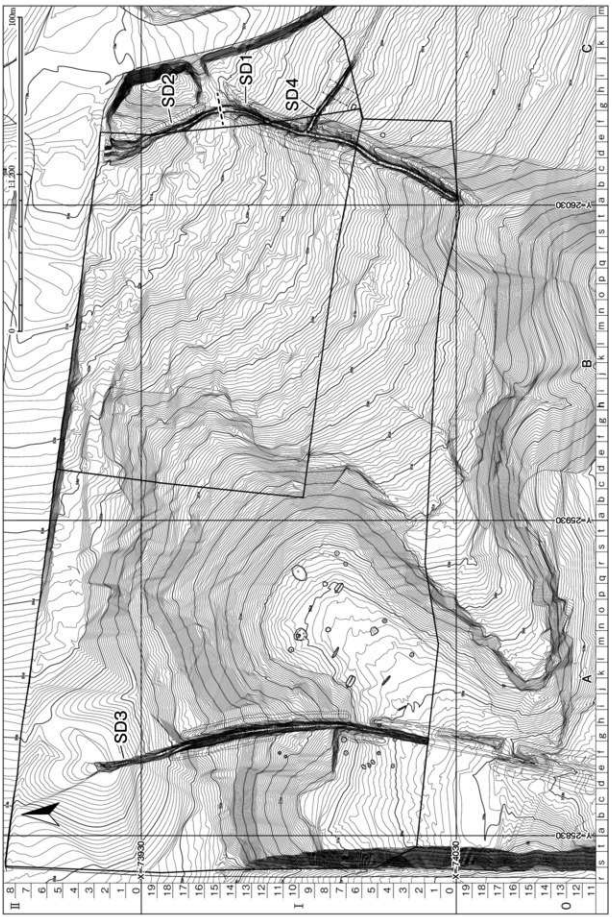
第9図　二子城主要部

第10図　地形測量図（1）

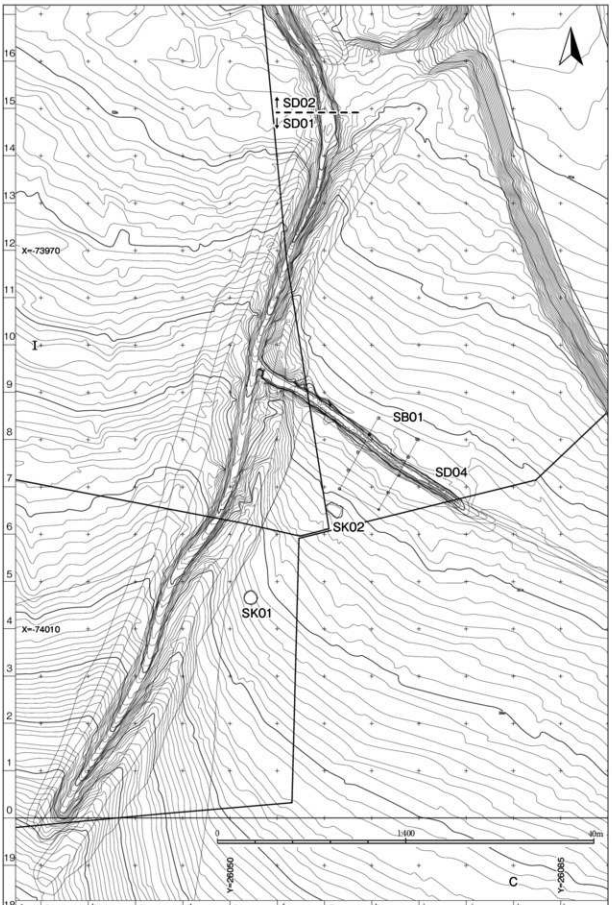
第 11 図　地形測量図（2）



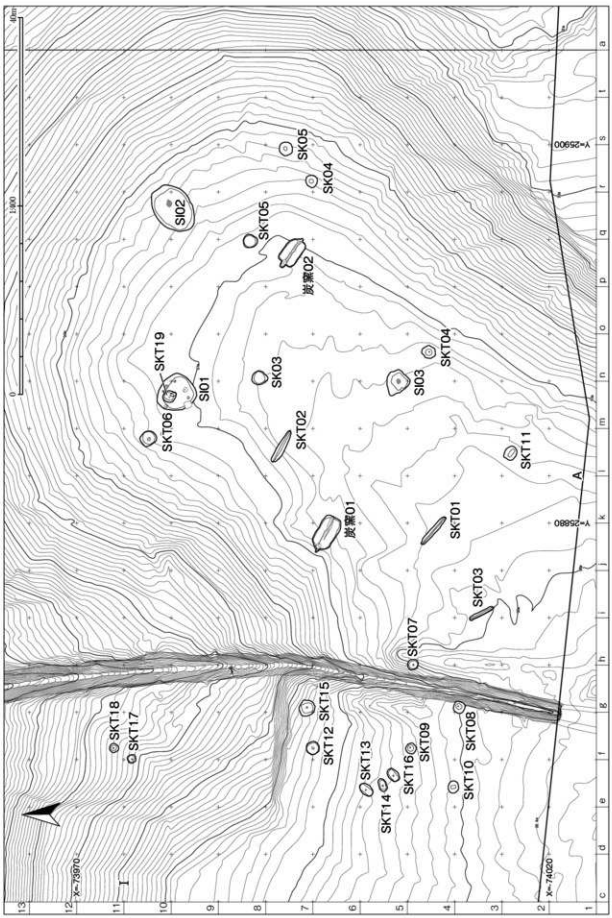
第12図　グリッド配置図



第13図　遺構配置図（1）


SD02
SD01
SB01
SD04
SK02
SK01
X=-73970
X=-74010
I
C
0
1:400
40m
Y=26050
Y=26085
16
15
14
13
12
11
10
9
8
7
6
5
4
3
2
1
0
19
18
t
a
b
c
d
e
f
g
h
i
j
k
l

第 14 図　遺構配置図（2）


SKT01
SKT02
SKT03
SKT04
SKT05
SKT06
SKT07
SKT08
SKT09
SKT10
SKT11
SKT12
SKT13
SKT14
SKT15
SKT16
SKT17
SKT18
SKT19
SI01
SI02
SI03
炭窯01
炭窯02
A
X=73970
X=74020
Y=25900
Y=25880
40m
1:800
0

第 15 図　遺構配置図（3）

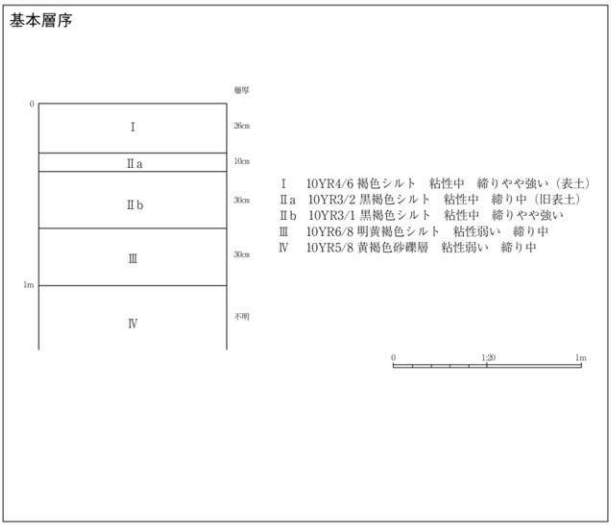
Ⅳ 検 出 遺 構

検出された遺構は、縄文時代・弥生時代の竪穴住居（略号ＳＩ）３棟、掘立柱建物（略号ＳＢ）１棟、土坑（略号ＳＫ）５基、陥し穴（略号ＳＫＴ）19基、炭窯跡２基（略号なし）２基。中世城館に伴う堀・溝（略号ＳＤ）４条である。

１ 基 本 層 序

本遺跡の基本層序はⅠからⅤ層に大別し、Ⅱ層については更にⅡａ・Ⅱｂ層に細分することとした（第16図）。Ⅰ層は現在の表土で腐植土である。草木根を多く含んでいる。Ⅱ層は場所により殆ど見られないところもあれば、厚く堆積しているところもある。本遺跡の遺物包含層である。

遺構の検出は、基本的にⅢ層の上面で行っている。但し、草木根の影響で遺構の有無が分かりにくい時には更に５～10㎝掘削して遺構検出を行った。基盤層で遺物は出土しない。Ⅳ層も基盤層で層厚は不明である。全域でみられるものではないようである。この層の下位に黄褐色軽石層が分布しているが詳細は不明である。（杉沢）



第16図 基本層序

2　竪穴住居

3棟の竪穴住居が検出された。いずれも大グリッドＩＡ区（調査区西側尾根部付近）に位置する。縄文時代中期前半（大木７b式期）の住居が１棟（ＳＩ01）、弥生時代後期の住居が２棟（ＳＩ02・ＳＩ03）である。

ＳＩ01（第17図、写真図版19・20）
［位置］ＩＡ９m、10 m、９n、10 n
［時期］縄文時代中期　大木７b式期
［規模］東西長　378cm　南北長　420cm
［平面形］やや不整な楕円形
［面積］12.0㎡（壁面含）7.7㎡（床面のみ）
［長軸方向］N－21°－W
［埋土］３層に分けられる。自然堆積と推測される。
［重複］陥し穴ＳＫＴ19と重複するが、本住居が新しい。ＳＫＴ19が完全に埋没後した後に、本住居が構築されたと推測される。また南西壁付近が、攪乱穴で損なわれている。攪乱穴は埋土が非常に緩く、ごく近年の穴と想定される。
［床面］概ね平坦である。壁は垂直に立たず、床面と壁面の境界が不明瞭である。貼床は施されていない。検出面からの深さは28cm程である。
［炉］床面中央より南西寄りに石囲炉がある。30cm×50cmの範囲を11個の炉石で取り囲む。炉石は縦長の石材を立てて据えている。炉石で囲まれる内側は焼けており、焼土面が生成されている。また炉石で囲まれる範囲の外部北西側外部（壁寄り）も焼土面が生成されている。炉石は写真図版で示してある（写真図版36・101～111）。101は石材が凝灰岩で重量3,158 g、102は凝灰岩で228 g、103は凝灰岩で1,781 g、104はホルンフェルスで683 g、105はホルンフェルスで934 g、106は凝灰岩で1,673 g、107は安山岩で2,733 g、108はホルンフェルスで2,036 g、109は凝灰岩で1,905 g、110は凝灰岩で3,124 g、111はホルンフェルスで412 gである。
［柱穴・ピット］床と壁の境界部分には６個のピットが検出された。明確な柱痕跡は確認できなかったがいずれも柱穴と推測される。配列上、西壁付近にも柱穴の存在が想定されるが、検出することはできなかった。Ｐ１は底面標高95.981 m、床面からの深さ30.4cm。Ｐ２は底面標高96.030 m、床面からの深さ40.1cm。Ｐ３は底面標高95.987 m、床面からの深さ36.2cm。Ｐ４は底面標高95.926 m、床面からの深さ39.8cm。Ｐ５は底面標高95.868 m、床面からの深さ56.1cm。Ｐ６は底面標高95.986 m、床面からの深さ45.3cmである。
［出土遺物］埋土を中心に縄文土器3,383 gが出土した。この内５個体を図示した（第49・50図１～５）。いずれも深鉢である。掲載した土器の合計重量は2,199 gである。重量での土器掲載率は65％となる。２は炉の外北約60cmで床面から僅かに浮き上がった状態で出土した。１、４、５は埋土下位から出土した。３は炉石の据えるための掘り込みから出土した。また、炉の北西約50cmの地点で、床面からやや浮き上がった状態で使用面を上にして石皿（凝灰岩）が出土した（第50図６）。重さは14,020 g、この他にＰ１とＰ６の間の床面から黒色の礫（安山岩）が出土した（写真図版36・112）。重さは2,229 gを測る。加工痕、使用痕はない。出土遺物の個別の事実記載、属性は「Ⅴ　出土遺物」

で報告する。
[小結] 出土した縄文土器は大木７ｂ式に相当し、縄文時代中期前半の住居と想定される。尾根頂部の平場の北端部に構築された住居であるが、調査範囲内では本住居と同時期の住居は検出されておらず、疎らな住居配置の集落、又は単独のみで営まれた住居と推測される。

ＳＩ02（第18図、写真図版21・22）
[位置] ＩＡ９ｑ、10ｑ、９ｒ、10ｒ
[時期] 弥生時代後期
[規模] 東西長（長軸）540cm　南北長（短軸）395cm
[平面形] 楕円形
[面積] 16.8㎡（壁面含）11.9㎡（床面のみ）
[長軸方向] Ｎ－39°－Ｅ
[埋土] １層からなる。おそらく自然堆積と思われる。
[重複] 本住居プラン南西部に内包される位置に風倒木痕が存在する。本住居構築以前に生成された風倒木痕である。
[床面] 北東から南西に向かうにつれ床面が低くなり傾斜している。北東部の床面標高は約96.34ｍ、南西部の床面標高は95.98ｍである。壁は垂直に立たず床面と壁面の境界が不明瞭である。床面は締まりがなく、風倒木痕の存在も相まって床面の判別が難しかった。貼床は施されていない。検出面からの深さは０～10cm程で、表土の厚さを考慮しても掘り込みは元来浅かったと解釈される。
[炉] プランの長軸中央よりも北東寄に地床炉が存在する。焼土範囲は60cm×70cm程で、断面の熱変化の厚さは13cm程である。
[柱穴・ピット] 柱穴と判別されるピットは検出されなかった。
[出土遺物] 埋土～床面から土器片が1,476ｇ出土した。この内８点を図示した（第51図７～14）。図示した土器の重量合計は741ｇである。重量での土器掲載率は50％となる。７、８は弥生時代後期の甕片で、同一個体の可能性もある。弥生時代後期の土器片と認識できたのはこの２破片のみである。９～14は縄文時代の土器である。９は深鉢で大木７ｂ式であるが、10～14も概ね同時期のものと推測される。また、埋土中から石匙が１点出土した（第51図15）。重量は5.5ｇを測る。石材は頁岩である。確たる根拠はないが縄文時代に属する石器と推測する。
[小結] 出土した土器は縄文時代のものが多いが、弥生時代後期の土器片も出土している。弥生土器は後期前～中葉の「湯舟沢式」に相当し、住居の所属年代は弥生時代後期前～中葉と位置付けられる。壁が垂直に立ち上がらず皿状の形態で、地床炉を有するという構造もこれまでに知られている弥生時代後期の住居形態にあてはまる。尾根平場が斜面に転ずる尾根東端部に構築された住居であり、埋没の過程で縄文時代の遺物が流れ込んだものと解釈される。

ＳＩ03（第19図、写真図版22・23）
[位置] ＩＡ４ｍ、５ｍ、４ｎ、５ｎ
[時期] 弥生時代後期
[規模] 東西長　291cm　南北長　244cm
[平面形] 不整な円形
[面積] 4.6㎡（壁面含）2.1㎡（床面のみ）

[長軸方向] 基軸を見出せない。
[埋土] 1層からなる。おそらく自然堆積と思われる。
[重複] なし
[床面] 概ね平坦であるが、貼床は施されていない。底面は締まりがない。壁は垂直に立たず床面と壁面の境界が不明瞭である。検出面からの深さは10cm以下である。プランの上半部は表土の浸食によって失われたと推測され、元来は検出したプランより広かったと推測される。
[炉] プランの中央に地床炉が存在する。焼土範囲は径約50cmで、断面の熱変化の厚さは5cm程である。
[柱穴・ピット] 柱穴と判別されるピットは検出されなかった。
[出土遺物] 埋土～床面から弥生時代の土器片が903.2 g出土した。この内18点を図示した（第52図16～33）。合計重量は332 gで、重量での土器掲載率37%となる。いずれも弥生時代後期の土器である。16は小型の甕の底部～底辺部破片であるが、17～33は大型の甕の破片で、同一個体の可能性が高いと考えられる。掲載していない土器片の大半も17～33と同一個体のものである可能性が高い。
[年代測定] 出土した土器片2点に付着した炭化物（掲載番号17・試料№1、掲載番21・試料2）について放射性炭素14C年代測定（AMS法）をおこなった。結果は暦年較正年代で掲載番号17・試料1がAD4～AD85（75.5%）、掲載番号21・試料2がAD7～AD130（94.6%）であった（詳細は「Ⅳ　分析・鑑定」参照）。なお17と21は同一個体の可能性が非常に高いものである。
[小結] 出土した弥生土器は後期前～中葉の「湯舟沢式」に相当し、住居の所属年代は弥生時代後期前～中葉と位置付けられる。壁が垂直に立ち上がらず皿状の形態で、地床炉を有するという構造も弥生時代後期の住居形態に矛盾はない。放射性炭素14C年代測定の数値は、弥生時代後期の実年代確定に重要な資料となるものである。（羽柴）

3　掘立柱建物

1棟が検出された。大グリッドIC区（調査区東部）に位置する。この他に掘立柱建物を構成する可能性のある柱穴の検出も皆無であった。

SB01（第20図、写真図版18）
[位置] IC6g、6h、7g、7h、8g、8h
[平面形] 梁、桁凡そ1：2の長方形
[規模] 桁行　860.4cm（28.4尺）、梁間　466.6cm（15.4尺）
[面積] 40.15㎡（12.2坪）
[軸方向] N－29°－E
[柱間寸法] 桁行では215.1cm（7尺1寸）が基準単位である。梁間は466.6cm（15尺4寸）であるが、その二等分の233.3cm（7尺7寸）が基準単位と推測される。
[重複] 溝SD04と本建物の柱穴P4が切り合っており、本建物が新しい。
[柱穴] 10個の柱穴で構成される。P1は底面標高84.007 m、検出面からの深さ39cm。P2は底面標高83.811 m、検出面からの深さ44cm。P3は底面標高83.592 m、検出面からの深さ40cm。P4は

底面標高 83.238 m、検出面からの深さ 48cm。Ｐ５は底面標高 83.073 m、検出面からの深さ 53cm。Ｐ６は底面標高 83.941 m、検出面からの深さ 47cm。Ｐ７は底面標高 83.742 m、検出面からの深さ 51cm。Ｐ８は底面標高 83.782 m、検出面からの深さ 24cm。Ｐ９は底面標高 83.595 m、検出面からの深さ 32cm。Ｐ 10 は底面標高 83.205 m、検出面からの深さ 52cmである。Ｐ１、Ｐ２、Ｐ４、Ｐ５、Ｐ６、Ｐ７で柱痕が明瞭に確認された。いずれの柱痕の径も 18cm程である。幾つかの柱穴で柱痕部が空洞になっていることが確認された。

[小結] 中世の遺構と推測されるＳＤ４より新しく、また、柱痕跡が空洞になっている状態を考慮すると、ごく新しい近代以降の建築と推測される。山仕事等などの都合で建てた臨時的な建物と想像される。　（羽柴）

4　土　　坑

５基検出した。大グリッドＩＣ区（調査区東部）に２基、大グリッドＩＡ区（調査区西部尾根頂部）に３基が位置する。

ＳＫ 01（第 21 図、写真図版 23）

[位置] ＩＣ４ｅ

[面積] 開口部 1.43㎡　底面 1.73㎡

[形態] 平面形は円形。開口部径 142cm、底面径 156cmの「フラスコ型」土坑　検出面からの深さ 28cm。

[埋土] 単層である。自然堆積の可能性が高い。

[重複] なし

[出土遺物] なし

[小結] 出土遺物が無く時期特定の客観的根拠はない。しかし「フラスコ型」であることから縄文時代の貯蔵穴と推測される。

ＳＫ 02（第 21 図、写真図版 23）

[位置] ＩＣ６ｇ

[面積] 開口部 1.98㎡　底面 1.31㎡

[形態] 長軸 192cm、短軸径 120cmの不正な長方形を呈する。底面は平坦ではない。検出面からの深さ５～12cm。

[埋土] 単層である。自然堆積の可能性が高い。断面観察ベルトにかからない検出面北東付近にわずかな量の焼土、炭化物が分布していた。

[重複] なし

[出土遺物] なし

[小結] 出土遺物が無く時期特定は難しい。また、形状からも用途の推定は難しい。掘立柱建物ＳＢ 01 と隣り合った箇所に近似する軸方向で位置しており、ＳＢ 01 に伴う可能性もある。埋土上部に僅かながら焼土と炭化物が散布し、掘立柱建物に付属する火処とも考えられる。ＳＢ 01 に伴うのであれば、本土坑も近代以降のごく新しい時期に構築された可能性がある。

ＳＫ 03（第 21 図、写真図版 24）

［位置］ＩＡ７ｎ、８ｍ、８ｎ

［面積］開口部 1.78㎡　底面 1.11㎡

［形態］開口部は径 146cm×166cmの円形を呈する。壁は概ね垂直に立ち、東側の下場が一部横穴状になっている。底面は概ね平坦である。検出面からの深さ約 68cm。

［埋土］８層に分けられる。人為堆積と推測される。

［重複］なし

［出土遺物］北東部埋土中位から石鏃（第 53 図 35、36）が出土した。35 は頁岩で重量 3.6 ｇ、36 は頁岩で 1.2 ｇである。また、埋土中から石器、スクレイパー（第 53 図 37）が出土した。頁岩で重量 1.2 ｇである。この他、埋土中から弥生時代後期土器の甕の体部片（第 53 図 34）が出土した。重量 8.9 ｇの小破片である。また埋土中から自然礫（写真図版 36・113、114）が出土している。113 は流紋岩で重量 9.206 ｇ、114 は凝灰岩で 1.182 ｇである。

［小結］出土した石鏃、スクレイパーは副葬品と考えられ、土坑の形態からも墓壙の可能性が高いと考えられる。出土した土器片は小破片で副葬品とは考えられないが、弥生時代後期の土器片であり、埋葬された年代を示している。墓壙を埋める際に混入した土器片と考えられる。また出土した自然礫も埋葬に伴うものである可能性がある。

ＳＫ 04（第 21 図、写真図版 24）

［位置］ＩＡ６ｒ、７ｒ

［面積］開口部 1.18㎡　底面 0.13㎡

［形態］開口部は径 118cm×151cmの円形を呈する。壁は斜めに立ち、底面と壁の境界が不明瞭である。検出面からの深さ約 41cm。

［埋土］５層に分けられる。自然堆積と推測される。３層は火山灰に類似する外観で、十和田ａ降下火山灰の可能性が高い。

［重複］なし

［出土遺物］出土遺物はない。最下層の埋土５層中に炭化材細片、焼土粒が含まれている。回収できた炭化材の総重量は 213.1 ｇである。

［小結］本土坑の最下層の埋土５層中に炭化材細片、焼土粒が含まれおり、約７ｍ離れて所在する炭窯 02 との関係が想定される。本土坑は炭窯 02 の構築土、あるいは伏焼の土を得るために掘った穴と推測される。炭窯 02 の出土炭化材２点の炭素年代測定の結果を勘案すると、炭窯 02 は９世紀後半から 10 世紀前半に属する可能性が高い。本土坑の埋没過程に堆積した３層が十和田ａ降下火山灰であれば、炭窯 02 の年代観と整合性がある。

ＳＫ 05（第 21 図、写真図版 24）

［位置］ＩＡ７ｒ、７ｓ

［面積］開口部 1.52㎡　底面 0.10㎡

［形態］開口部は径 136cm×146cmの円形を呈する。壁は斜めに立ち、底面と壁の境界が不明瞭である。検出面からの深さ約 47cm。

［埋土］５層に分けられる。自然堆積と推測される。３層は火山灰に類似する外観で、十和田ａ降下火山灰の可能性が高い。

［重複］なし
［出土遺物］出土遺物はない。最下層の埋土５層中に炭化材細片が顕著に混じる。回収できた炭化材の総重量は270.4ｇである。
［小結］本土坑の最下層の埋土５層中に炭化材細片が含まれおり、約10ｍ離れて所在する炭窯02との関係が想定される。本土坑は炭窯02の構築土、あるいは伏焼の土を得るために掘った穴と推測される。炭窯02の出土炭化材２点の炭素年代測定の結果を勘案すると、炭窯02は９世紀後半から10世紀前半に属する可能性が高い。本土坑の埋没過程に堆積した３層が十和田ａ降下火山灰であれば、炭窯02の年代観と整合性がある。（羽柴）

５　陥し穴状遺構

19基を検出した。遺構略号はＳＫＴとし、土坑ＳＫと区分した。いずれも大グリッドＩＡ区に所在する。

ＳＫＴ01（第22図、写真図版24）
［位置］ＩＡ４ｊ、４ｋ
［面積］開口部1.92㎡　底面0.35㎡
［形態］溝状の平面形である。開口部の長軸は391cm、最大幅は68cmを測る。長軸の軸方向はＮ－50°－Ｗである。底面の幅は約10cmで両端は開口部より外側に延びない。検出面からの深さは106cmである。
［埋土］６層に分けられる。自然堆積と推測される。
［重複］なし
［出土遺物］なし
［小結］遺構の形態的特徴から縄文時代の陥し穴と位置付けられる。

ＳＫＴ02（第22図、写真図版25）
［位置］ＩＡ７ｌ
［面積］開口部2.46㎡　底面0.65㎡
［形態］溝状の平面形である。開口部の長軸は368cm、最大幅は88cmを測る。長軸の軸方向はＮ－61°－Ｗである。底面の幅は約８～24cmで、両端は開口部より外側に延びている。検出面からの深さは116cmである。
［埋土］７層に分けられる。自然堆積と推測される。
［重複］なし
［出土遺物］なし
［小結］遺構の形態的特徴から縄文時代の陥し穴と位置付けられる。

ＳＫＴ03（第22図、写真図版25）
［位置］ＩＡ３ｈ、３ｉ
［面積］開口部1.09㎡　底面0.38㎡
［形態］溝状の平面形である。開口部の長軸は280cm、最大幅は42cmを測る。長軸の軸方向はＮ－25°

－Wである。底面の幅は約10～18cmで、両端は中場より外側に延びている。検出面からの深さは96cmである。
［埋土］６層に分けられる。自然堆積と推測される。
［重複］なし
［出土遺物］なし
［小結］遺構の形態的特徴から縄文時代の陥し穴と位置付けられる。

ＳＫＴ04（第22図、写真図版25）
［位置］ＩＡ４ｎ
［面積］開口部1.44㎡　底面0.36㎡
［形態］平面形は円形基調である。開口部は132cm×144cmの不整な円形であるが、漏斗状にすぼまり中場では径約78cmの円形となる。底面は径約68cmの円形で平坦である。検出面からの深さは105cmである。底面中央やや南東寄りに径約11cm、深さ44.9cmの逆茂木痕がある。
［埋土］９層に分けられる。自然堆積と推測される。断面ラインでは逆茂木痕は外れるが、深さを示すため、断面図中に点線で示した。
［重複］なし
［出土遺物］なし
［小結］遺構の形態的特徴から縄文時代の陥し穴と位置付けられる。共通する形態のＳＫＴ19が、縄文時代中期前半（大木７ｂ式期）の住居跡よりも古く、本陥し穴も縄文時代中期前半以前に属する可能性が高い。

ＳＫＴ05（第23図、写真図版25）
［位置］ＩＡ８ｐ、８ｑ
［面積］開口部1.61㎡　底面1.09㎡
［形態］平面形は円形である。開口部は142cm×151cmの円形で、中場で一旦すぼまり、底面直上でやや広がり、底面でまたややすぼまる断面形を呈する。底面は径約116cmの円形で平坦である。検出面からの深さは123cmである。逆茂木痕は意識して探したが検出されなかった。
［埋土］８層に分けられる。自然堆積と推測される。
［重複］なし
［出土遺物］検出面に弥生時代前期と推測される無文の土器体部片（第61図44）がのっていたが、表土中に包含されていたもので本遺構とは直接関係のないものと認識した。重量43ｇの破片である。埋土中からの出土遺物はなかった。
［小結］逆茂木痕はないが、遺構の形態的特徴から縄文時代の陥し穴と一応想定した。しかしながら絶対的な根拠はないので、貯蔵穴、墓壙などである可能性もあり得る。

ＳＫＴ06（第23図、写真図版26）
［位置］ＩＡ10ｌ
［面積］開口部2.03㎡　底面1.29㎡
［形態］平面形は円形基調である。開口部は148cm×165cmの不整な円形であるが、漏斗状にすぼまり中場では径約138cmの円形となる。底面は径約128cmの円形で平坦である。検出面からの深さは111

cmである。底面中央やや西寄りに径約38cm、深さ28.6cmの逆茂木痕がある。
[埋土]　4層に分けられる。自然堆積と推測される。
[重複]　なし
[出土遺物]　埋土上部（1層か）から縄文土器2点（第53図38、39）が出土した。38は口縁部破片で重量158ｇ、39は底部～底辺部破片で重量340ｇである。型式が判別できる38は大木7ｂ式であり、約4ｍ離れて所在するＳＩ01の出土土器と同型式であり、ＳＩ01に由来する土器片が本遺構の埋没過程で流入したものと推測される。
[小結]　遺構の形態的特徴から縄文時代の陥し穴と位置付けられる。共通する形態のＳＫＴ19が、縄文時代中期前半（大木7ｂ式期）の住居跡ＳＩ01よりも古く、本陥し穴も縄文時代中期前半以前に属する可能性が高い。

ＳＫＴ07（第23図、写真図版26）
[位置]　ＩＡ4ｇ、4ｈ
[面積]　開口部0.92㎡　底面0.58㎡
[形態]　平面形は円形である。開口部は径約108cmである。底面は径約90cmの円形で平坦である。検出面からの深さは94cmである。底面ほぼ中央に径約16cm、深さ46.6cmの逆茂木痕がある。
[埋土]　4層に分けられる。自然堆積と推測される。
[重複]　中世の堀ＳＤ03の土塁の下に位置する。
[出土遺物]　なし
[小結]　遺構の形態的特徴から縄文時代の陥し穴と位置付けられる。共通する形態のＳＫＴ19が、縄文時代中期前半（大木7ｂ式期）の住居跡よりも古く、本陥し穴も縄文時代中期前半以前に属する可能性が高い。

ＳＫＴ08（第23図、写真図版26）
[位置]　ＩＡ3ｆ、3ｇ、4ｇ
[面積]　開口部1.18㎡　底面0.22㎡
[形態]　平面形は円形基調である。開口部は径約118cmの円形である。底面近くでプランがすぼみ、底面は径約60cmの円形で平坦である。検出面からの深さは105cmである。底面中央やや北東寄りに径約12cm、深さ28.5cmの逆茂木痕がある。
[埋土]　4層に分けられる。自然堆積と推測される。断面ラインでは逆茂木痕は外れるが、深さを示すため、断面図中に点線で示した。
[重複]　中世の堀ＳＤ3と重複するが、本遺構が古い。
[出土遺物]　なし
[小結]　遺構の形態的特徴から縄文時代の陥し穴と位置付けられる。共通する形態のＳＫＴ19が、縄文時代中期前半（大木7ｂ式期）の住居跡よりも古く、本陥し穴も縄文時代中期前半以前に属する可能性が高い。

ＳＫＴ09（第24図、写真図版26）
[位置]　ＩＡ4ｆ、5ｆ
[面積]　開口部0.94㎡　底面0.31㎡

［形態］平面形は円形基調である。開口部は径約 114cmの円形である。断面上半でブランがすぼみ、底面は径約 64cmの円形で平坦である。検出面からの深さは 104cmである。底面中央やや北寄りに径約 12cm、深さ 38.7cmの逆茂木痕がある。
［埋土］５層に分けられる。自然堆積と推測される。断面ラインでは逆茂木痕は外れるが、深さを示すため、断面図中に点線で示した。
［重複］なし
［出土遺物］なし
［小結］遺構の形態的特徴から縄文時代の陥し穴と位置付けられる。共通する形態のＳＫＴ 19が、縄文時代中期前半（大木７ｂ式期）の住居跡よりも古く、本陥し穴も縄文時代中期前半以前に属する可能性が高い。

ＳＫＴ 10（第 24 図、写真図版 27）
［位置］ＩＡ３ｅ、４ｅ
［面積］開口部 1.10㎡　底面 0.16㎡
［形態］開口部は 110cm×130cmの楕円形である。底面は 30cm×56cmの隅丸の長方形のブランとなる。検出面からの深さは 165cmである。逆茂木痕は検出されなかった。
［埋土］３層に分けられる。自然堆積と推測される。
［重複］なし
［出土遺物］なし
［小結］遺構の形態的特徴から縄文時代の陥し穴と位置付けられる。

ＳＫＴ 11（第 24 図、写真図版 27）
［位置］ＩＡ２ｌ
［面積］開口部 1.48㎡　底面 0.33㎡
［形態］開口部は長径 148cm、短径 120cmの楕円形である。長径の軸方向はＮ－ 58°－Ｗである・底面は 36cm×94cmの隅丸の長方形のブランとなる。検出面からの深さは 155cmである。逆茂木痕は検出されなかった。
［埋土］４層に分けられる。自然堆積と推測される。
［重複］なし
［出土遺物］なし
［小結］遺構の形態的特徴から縄文時代の陥し穴と位置付けられる。

ＳＫＴ 12（第 24 図、写真図版 27）
［位置］ＩＡ６ｆ、７ｆ
［面積］開口部 1.46㎡　底面 1.04㎡
［形態］平面形は円形である。開口部は径約 140cmである。底面は径約 128cmの円形で平坦である。検出面からの深さは 74cmである。底面ほぼ中央に径約 25cm、深さ 60.3cmの逆茂木痕がある。
［埋土］９層に分けられる。自然堆積と推測される。
［重複］なし
［出土遺物］なし

［小結］遺構の形態的特徴から縄文時代の陥し穴と位置付けられる。共通する形態のＳＫＴ19が、縄文時代中期前半（大木７ｂ式期）の住居跡よりも古く、本陥し穴も縄文時代中期前半以前に属する可能性が高い。

ＳＫＴ13（第25図、写真図版27）
［位置］ＩＡ５ｅ、６ｅ
［面積］開口部1.35㎡　底面0.90㎡
［形態］平面形は楕円形である。開口部は長径162cm、短径108cmである。長径の軸方向はＮ－35°－Ｅである。底面は長径150cm、短径62cmの楕円形で平坦である。検出面からの深さは78cmである。底面ほぼ中央に径約14cm、深さ56.0cmの逆茂木痕がある。
［埋土］５層に分けられる。自然堆積と推測される。
［重複］なし
［出土遺物］なし
［小結］遺構の形態的特徴から縄文時代の陥し穴と位置付けられる。

ＳＫＴ14（第25図、写真図版28）
［位置］ＩＡ５ｅ
［面積］開口部0.91㎡　底面0.49㎡
［形態］平面形は楕円形である。開口部は長径142cm、短径78cmである。長径の軸方向はＮ－66°－Ｅである。底面は長径102cm、短径56cmの楕円形で平坦である。検出面からの深さは80cmである。底面ほぼ中央に逆茂木痕が３箇所ある。北側のものは径約５cm、深さ27.1cm、南西側のものが径約８cm、深さ29.0cm、南東側のものが径約６cm、深さ24.5cmである。
［埋土］３層に分けられる。自然堆積と推測される。
［重複］なし
［出土遺物］なし
［小結］遺構の形態的特徴から縄文時代の陥し穴と位置付けられる。

ＳＫＴ15（第25図、写真図版28）
［位置］ＩＡ６ｇ、７ｆ、７ｇ
［面積］開口部2.17㎡　底面1.05㎡
［形態］平面形は円形基調である。開口部は径約164cmの円形である。底面は長軸122cm、短軸110cmの隅丸方形に近い形状である。検出面からの深さは78cmである。底面ほぼ中央に径約18cm、深さ70.5cmの逆茂木痕がある。
［埋土］７層に分けられる。自然堆積と推測される。断面ラインでは逆茂木痕は外れるが、深さを示すため、断面図中に点線で示した。
［重複］なし
［出土遺物］なし
［小結］遺構の形態的特徴から縄文時代の陥し穴と位置付けられる。共通する形態のＳＫＴ19が、縄文時代中期前半（大木７ｂ式期）の住居跡よりも古く、本陥し穴も縄文時代中期前半以前に属する可能性が高い。

ＳＫＴ 16（第 25 図、写真図版 28）
［位置］ＩＡ５ｅ
［面積］開口部 1.22㎡　底面 0.73㎡
［形態］平面形は楕円形である。開口部は長径 154cm、短径 104cmである。長径の軸方向はＮ－ 46°－Ｅである。底面は長径 128cm、短径 66cmの隅丸方形に近い形状で平坦である。検出面からの深さは 76cmである。底面ほぼ中央に径約 16cm、深さ 58.4cmの逆茂木痕がある。
［埋土］７層に分けられる。自然堆積と推測される。
［重複］なし
［出土遺物］なし
［小結］遺構の形態的特徴から縄文時代の陥し穴と位置付けられる。

ＳＫＴ 17（第 26 図、写真図版 28）
［位置］ＩＡ 10 ｅ、10 ｆ
［面積］開口部 0.61㎡　底面 0.33㎡
［形態］平面形は円形である。開口部は径約 89cmである。底面は径 68cmで平坦である。検出面からの深さは 57cmである。底面中央やや南西寄りに径約 14cm、深さ 33.3cmの逆茂木痕がある。
［埋土］３層に分けられる。自然堆積と推測される。
［重複］なし
［出土遺物］なし
［小結］遺構の形態的特徴から縄文時代の陥し穴と位置付けられる。共通する形態のＳＫＴ 19 が、縄文時代中期前半（大木７ｂ式期）の住居跡よりも古く、本陥し穴も縄文時代中期前半以前に属する可能性が高い。

ＳＫＴ 18（第 26 図、写真図版 29）
［位置］ＩＡ 11 ｆ
［面積］開口部 0.68㎡　底面 0.24㎡
［形態］平面形は円形である。開口部は径約 95cmである。底面は径 60cmで平坦である。検出面からの深さは 60cmである。底面ほぼ中央に径約 16cm、深さ 34.8cmの逆茂木痕がある。
［埋土］４層に分けられる。自然堆積と推測される。
［重複］なし
［出土遺物］なし
［小結］遺構の形態的特徴から縄文時代の陥し穴と位置付けられる。共通する形態のＳＫＴ 19 が、縄文時代中期前半（大木７ｂ式期）の住居跡よりも古く、本陥し穴も縄文時代中期前半以前に属する可能性が高い。

ＳＫＴ 19（第 26 図、写真図版 29）
［位置］ＩＡ９ｍ、10 ｍ
［面積］開口部 1.28㎡　底面 0.63㎡
［形態］平面形は円形基調である。開口部は径約 120cm×140cmである。底面は長径 110cm、短径 90cmで隅丸長方形に近い形状で平坦である。検出面からの深さは 60cmである。底面ほぼ中央に径約 16cm、

深さ41.1cmの逆茂木痕がある。
[埋土]　5～10層の6層に分けられる。自然堆積と推測される。図示した1～4層は重複するＳＩ01の炉の土である。断面ラインでは逆茂木痕は外れるが、深さを示すため、断面図中に点線で示した。
[重複]　ＳＩ01と重複し本遺構が古い。
[出土遺物]　なし
[小結]　遺構の形態的特徴から縄文時代の陥し穴と位置付けられる。縄文時代中期前半（大木７ｂ式期）の住居跡よりも古く、本陥し穴は縄文時代中期前半以前の時期となる。　（羽柴）

6　炭　　窯

２基の炭窯を検出した。どちらも大グリッドＩＡ区の尾根頂部平場に位置する。２基のみの検出であり、遺構略号を用いず、「炭窯01」「炭窯02」と呼称する。

炭窯01（第27図、写真図版29・30）
[位置]　ＩＡ６ｊ、６ｋ、７ｊ
[時期]　９世紀後半頃（炭素14年代測定等による）
[規模]　東西長（長軸）418cm　南北長（短軸）210cm
[平面形]　楕円形で長軸西端が突出
[面積]　7.1㎡（壁面含）5.8㎡（底面のみ）
[長軸方向]　Ｎ－62°－Ｗ
[埋土]　６層に分けられる。木炭回収後は自然堆積と推測される。底面直上中央に木炭片が堆積している。
[重複]　なし
[形態]　底面は概ね平坦で、底面中央に幅約35cmの溝状のプランが長軸方向に貫く。溝状プランの西側先端は上場よりも外側（西側）に突出する。この溝状のプランは掘り込みが浅く、不明瞭な部分も多い。長軸西壁際底面には溝状プランと重なる位置に50×60cmの皿状の掘込がある。この掘込の外側の左右の底～壁面が被熱しており、この掘込が炭窯の焚口と推測される。また、底面中央付近に焼土が散布しているが、概ね二次堆積の焼土と推測された。壁は概ね垂直に立つ。検出面からの深さは15cm程である。
[付属施設]　上述のように、底面の長軸に沿って溝状のプランがある。また、長軸底面西壁際に焚口と推測される掘り込みがある。
[出土遺物]　底面直上に木炭片が多量に散布していた。回収した木炭（乾燥状態）の総重量は4926.8gである。これらの内、放射性炭素14Ｃ年代測定の試料とした２点の木炭（試料№３、試料№４）の樹種は、２点ともコナラであった。また埋土中から縄文土器片３片（重量計18.7ｇ）が出土した。図示はしていない。
[年代測定]　底面直上から出土した木炭片２点（試料№３、試料№４）について放射性炭素14Ｃ年代測定（ＡＭＳ法）をおこなった。結果は暦年較正年代で試料３がＡＤ772～ＡＤ893（93.0%）、試料４がＡＤ820～ＡＤ900（58.8%）であった（詳細は「Ⅳ　分析・鑑定」参照）。
[小結]　伏焼きの炭窯と想定される。２点の試料の放射性炭素年測定値を勘案すると、８世紀末～９世紀末頃の炭窯と推測される。さらに共通する形態の炭窯02の年代もほぼ同時期と仮定し、その出

土試料の放射性炭素年代の測定値も勘案し年代を絞り込むと９世紀末頃の炭窯と推測される。ここではやや幅を持たせ、本炭窯は９世紀後半頃のものと捉えておく。

炭窯 02（第 27 図、写真図版 30・31）
［位置］ＩＡ７ｐ、７ｑ
［時期］９世紀後半頃（炭素 14 年代測定等による）
［規模］東西長（長軸）376cm　南北長（短軸）200cm
［平面形］楕円形で長軸西端と東端が突出
［面積］5.6㎡（壁面含）4.7㎡（底面のみ）
［長軸方向］Ｎ－53°－Ｗ
［埋土］６層に分けられる。木炭回収後は自然堆積と推測される。底面直上中央に木炭片と焼土が堆積している。
［重複］なし
［形態］底面は概ね平坦で、底面中央に幅約 28cmの溝状のプランが長軸方向に貫く。溝状プランの先端は上場よりも外側（西側、東側）に突出する。この溝状のプランは掘り込みが浅く、不明瞭な部分もある。長軸西壁際底面には溝状プランと重なる位置に 50×60cmの皿状の掘込がある。この掘込の外側の左右の底～壁面が被熱しており、この掘込が炭窯の焚口と推測される。また、底面中央付近に焼土が散布しているが、ほとんどが二次堆積の焼土と見て取れた。壁は溝状部分の突出部以外は概ね垂直に立つ。検出面からの深さは 18cm程である。
［付属施設］上述のように、底面の長軸に沿って溝状のプランがある。また、長軸底面西壁際に焚口と推測される掘り込みがある。
［出土遺物］底面直上に木炭片が多量に散布していた。回収した木炭（乾燥状態）の総重量は 3432.4g である。これらの内、放射性炭素 14 Ｃ年代測定の試料とした２点の木炭（試料№５、試料№６）の樹種は、２点ともコナラであった。
［年代測定］底面直上から出土した木炭片２点（試料№５、試料№６）について放射性炭素 14 Ｃ年代測定（ＡＭＳ法）をおこなった。結果は暦年較正年代で試料５がＡＤ 880～ＡＤ 990（93.8％）、試料６がＡＤ 772～ＡＤ 893（95.4％）であった（詳細は「Ⅳ　分析・鑑定」参照）。
［小結］伏焼きの炭窯と想定される。２点の試料の放射性炭素年測定値からは８世紀末～10 世紀末の年代が示される。また、この２点の試料の幅の中で共通する年代を求めると９世紀末頃の年代が想定される。さらに共通する形態の炭窯 01 の年代もほぼ同時期と仮定し、その出土試料の放射性炭素年代の測定値も勘案すると、やはり９世紀末頃の炭窯と推測される。ここではやや幅を持たせ、本炭窯は９世後半頃のものと捉えておく。（羽柴）

７　溝　・　堀

４条を検出した。規模の違いにより３条（ＳＤ 01～03）を「堀」、１条（ＳＤ 04）を「溝」と認識しているが、遺構略号はＳＤで統一している。また、令和元年度の調査時にＳＤ 01、ＳＤ 02 は走向が異なっており、別個の堀と認識し、それぞれに遺構名を附し調査をおこなっていた。ところが令和２年度調査において新規に東側に加えられた調査範囲を調査したところ、ＳＤ 01、ＳＤ 02 が連続する堀であることが明らかになった。しかしながら、元年度の調査区記録の都合と、堀の走行、囲郭

する地形の形状も異なっており両者を区分し、ＳＤ01、ＳＤ02の呼称でそれぞれを報告する。ＳＤ１とＳＤ２の境界はＩＣ15ｇグリッド杭付近とする。

ＳＤ01（第28～34・39図、写真図版６～10）

[位置] ＩＣ０ａ、０ｂ、１ａ、１ｂ、１ｃ、２ａ、２ｂ、２ｃ、２ｄ、３ｂ、３ｃ、３ｄ、４ｂ、４ｃ、４ｄ、５ｃ、５ｄ、５ｅ、６ｃ、６ｄ、６ｅ、７ｃ、７ｄ、７ｅ、７ｆ、８ｃ、８ｄ、８ｅ、８ｆ、９ｄ、９ｅ、９ｆ、10ｄ、10ｅ、10ｆ、11ｄ、11ｅ、11ｆ、12ｅ、12ｆ、12ｇ、13ｆ、13ｇ、13ｈ、14ｆ、14ｇ、14ｈ。南端ＩＣ０ａ付近（堀外、掘削前）の標高は90.6ｍ、北端ＩＣ14ｈ付近（堀外、掘削前）の標高は81.6ｍであり、緩斜面上に等高線と概ね直行する方向に位置する。

[時期] 中世（二子城の存続期間）と推測。

[総長] 86.4ｍを測る。地表面のくぼみの観察で、調査区南端付近が本堀の南端であることが見て取れ、堀のほぼ全体を調査したことになる。本堀と連続するＳＤ02の調査した長さを加えると125.8ｍとなる。

[形態] 堀の両側に土塁が付く形態である。現況では西側の土塁が不明瞭であったが、作成した地形図の等高線から土塁の存在を認識した。

[軸方向] 南端から、北東向かい真直ぐ走っていたプランが、ＩＣ７ｄ付近で走行がやや西側に転じる走向となる。ＩＣ７ｄ付近より北ではＮ－27°－Ｅ。南ではＮ－15°－Ｅ。

[幅] 堀本体の幅は上幅180～300cmを測る。210cm程の部位が多い。土塁上場から測ると410～500cmの幅となる。

[深さ] 堀本体の掘り込みは50～90cm程である。北に向かうにつれ比高は小さくなる傾向がある。残存状況が良好な部分の土塁頂部と堀底面の比高は150cm程である。本堀の南端部の底面標高は89.3ｍ、北端部の底面標高は80.8ｍであり、南から北に向かって標高を減ずる傾斜である。連続するＳＤ02の調査範囲での北端は底面標高78.8ｍであり、水はＳＤ02に向かって流れることになる。

[埋土] 堀本体の埋土は６層程度に分けられる。観察した部分ではいずれも自然堆積である。また、土塁は単層で構成され、版築はなされていない。土塁の構築土が流入して堀本体の最終堆積土になっている。調査前は堀本体が窪んだ状況であり、完全埋没には至っていない。

[重複] ＳＤ02とは連続しており同時存在の遺構である。またＩＣ９ｅ付近で枝分かれする形で東側にＳＤ04が伸びる。ＳＤ04は本堀の西側には突き出ておらず、同時存在の遺構と判断される。また、ＳＤ04が枝分かれする部位の本堀の土塁は、ＳＤ04の形状に沿って割れていたわけではなく、周囲と同じ高さのままであり、ＳＤ04の枝分かれ部分は本堀の土塁で覆われていたと判断される。よって、本堀とＳＤ04の構築は同時の工程によるものと判断される。

[付属施設] 上述のように堀本体の両側に土塁が付く。また枝分かれするプランのＳＤ04も同時の構築であり、本堀の付属施設と位置付けられる。

[出土遺物] 東側土塁が途切れるＩＣ14ｈ付近の土塁下から縄文時代後期初頭～前葉の縄文土器深鉢（第54図40）が出土した。また図示はしていないが、土塁中からも縄文土器深鉢体部片が出土している。本堀が構築されたと推測される中世に属する遺物は出土していない。

[小結] 本堀ＳＤ01は調査区東端ＩＣ区付近から調査区東外に広がる谷地形（以下「谷１」とする）と調査区中央ＩＢ区付近の谷地形（以下「谷２」とする）とを隔てる地形の境界上に位置している。ＳＤ01南端の南側は岬状の尾根地形であり、谷１と谷２は明瞭に隔てられる地形となっているが、ＳＤ01の南端から北側は尾根地形と谷の比高が小さくなり、谷１と谷２の境界が不明瞭になってく

る。ＳＤ01はこの不明瞭になった両谷を隔てる尾根の延長線上に構築されており、その機能は、両谷を隔てることと推測される。これはＳＤ01の両側に土塁が付くことからも裏付けられる。防御用の土塁であれば、侵入を阻む側の内側に構築されるはずであるが、堀の両側に土塁が存在するということは、堀の両側の行き来を妨げる機能と解釈されるからである。実際、谷１からＳＤ01を見ると堀と土塁は谷側よりも高い位置にあり、非常に閉塞感がある状況であり、ＳＤ01側（二子城外側）から谷１側（二子城中心部側）への侵入を阻止する防御機能は読み取れない。谷１への侵入を阻止したいのであれば、尾根地形の西側麓の谷２に堀、土塁を構築すべきである。谷１と谷２を隔て、両者それぞれを閉塞する目的は確定し難いが、城館の防御の機能とは考え難く、馬飼育の牧に関わる施設「牧袋」の機能などが推測される。

昭和43年作成の国土地理院１/5,000国土基本図では、本堀と重なるラインが「徒歩道」として表示されており、近年まで窪んだ状態の本堀が道として使用されていたことが示されている。

ＳＤ02（第34～36・40図、写真図版６～８・10・11）

[位置] ＩＣ15ｆ、15ｇ、16ｅ、16ｆ、17ｅ、17ｆ、18ｅ、18ｆ、19ｄ、19ｅ、ⅡＣ0ｄ、0ｅ、１ｃ、１ｄ、１ｅ、２ｃ、２ｄ、２ｅ。本堀南端ＳＤ01との境界（ＩＣ15ｇ付近、堀外掘削前）の標高は81.6ｍ、北の端ⅡＣ２ｅ付近（堀外、掘削前）の標高は79.8ｍである。本堀の東側は丘陵地形となっており、その西麓に沿った形に位置する。

[時期] 中世（二子城の存続期間）と推測。

[総長] 調査区外の北側にプランが伸びているが、調査した分は39.4ｍを測る。本堀と連続するＳＤ01の総長を加えると125.8ｍとなる。

[形態] 堀の東側に土塁が付く形態である。堀の西側は、地形改変の結果かもしれないが土塁の痕跡を全く見出せなかった。

[軸方向] 概ね真直ぐでＮ－22°－Ｗである。ＳＤ01が東側に傾く軸方向であったが、本堀は西側へ傾く軸方向となり、ＳＤ01とＳＤ02を区分する根拠とした。

[幅] 堀本体の幅は上幅150～850㎝を測る。北に向かうにつれ幅広がる傾向にある。北端部は自然の沢地形と推測される。明治期の地籍図では本堀の延長にあたる区域は帯状の地割で、水田の地目になっている。開田以前は沢地形であったと推測される。

[深さ] 堀本体の掘り込みは50～150㎝程である。残存状況が良好な部分の土塁頂部と堀底面の比高は180㎝程である。本堀の南端部の底面標高は89.3ｍ、北端部の底面標高は78.8ｍであり、南から北に向かって標高を減ずる傾斜で、水は北に向かって流れることになる。

[埋土] 堀本体の埋土は７層程度に分けられる。基本自然堆積であるが、北側付近では最終堆積は人為的に埋め戻した土であった。埋め戻した面に、杉の切株があり、植林の際に、堀のくぼみを埋め戻したものと理解される。土塁は単層で構成され版築はなされていない。

[重複] ＳＤ01とは連続しており同時存在の遺構である。その他の遺構との重複はない。

[付属施設] 上述のように堀の東側に土塁が付く。

[出土遺物] なし。本堀が構築されたと推測される中世に属する遺物も出土していない。

[小結] 本堀ＳＤ02は調査区北東端に所在する丘陵地形の西麓に沿って位置している。丘陵地形は道路改修と終末処理場の建設により改変され、その大部分が旧状を留めておらず、今回の調査区北東部に、地形の南西部分が残っているのみである。幸い、昭和43年測量の国土地理院１:5,000国土基本図や明治期の地籍図、昭和23年頃の米軍撮影の航空写真によって、その概ねの範囲を知ることがで

きる。丘陵は底辺（南北）約80ｍ、高さ（東西）約100ｍの三角形に近い形状で、西辺を本堀とその延長の沢地形で画され、北辺と東辺も沢地形で画される地形である。ＳＤ01の東側の谷１の北辺と境界には沢地形ないし堀がみられないが、丘陵地形の盛り上がりにより区分は明瞭である。この丘陵は、二子城の範囲の中に納まるものであり、二子城を構成する郭の一つであったことは疑いない。しかしながらこの丘陵については郭名の伝承もないため、以下、本報告書では「無名の郭」と呼称する。本堀ＳＤ02は無名の郭の西辺を区画する堀と位置付けられる。ＳＤ01とは連続するプランではあるが、機能が異なっており、ＳＤ01とＳＤ02の区分けは妥当なものと考える。

ＳＤ03（第41～48図、写真図版12～17）

[位置] ＩＡ１ｆ、１ｇ、２ｆ、２ｇ、２ｈ、３ｆ、３ｇ、３ｈ、４ｆ、４ｇ、４ｈ、５ｆ、５ｇ、５ｈ、６ｆ、６ｇ、６ｈ、７ｇ、７ｈ、８ｇ、８ｈ、９ｇ、９ｈ、10ｇ、10ｈ、11ｇ、11ｈ、12ｆ、12ｇ、12ｈ、13ｆ、13ｇ、13ｈ、14ｆ、14ｇ、14ｈ、15ｆ、15ｇ、15ｈ、16ｆ、16ｇ、17ｆ、17ｇ、18ｅ、18ｆ、19ｅ、19ｆ、ⅡＡ０ｅ、０ｆ、１ｅ、２ｅに位置する。南端１Ａ１ｆ付近（堀外、掘削前）の標高は98.3ｍ、北端ⅡＡ２ｃ付近（堀外、造成土除去検出面）の標高は85.5ｍであり、尾根上から尾根麓に至る等高線と概ね直行する方向に位置する。

[時期] 中世（二子城の存続期間）と推測。

[総長] 調査した分では105.4ｍを測る。なお、調査区外南側に本堀のプランが続くことが現地表の観察から明瞭に確認できる。また北側は、以前の工業団地造成の際、大規模に土取されており、これによって、本堀の北側に連続する部分が失われている。今回調査した部位の南端から南側には約390ｍに亘って本堀の連続が確認できる。また今回の調査区よりも北に位置する丘陵地形の物見ヶ崎西麓には、明瞭な堀の痕跡があり、検出した本ＳＤ03と連続が想定される走向を呈する。これを本堀と連続と捉えると、今回検出の北端から、約640ｍの長さが想定される。今回検出した長さと、南側、北側の想定ラインを加えると、本堀は総長1,135.4ｍとなる。南側は近年の開発で著しく改変された地域であり、元来はさらに南側に本堀が延びていたと推測される。

[形態] 検出範囲では堀の両岸に土塁が付く形態である。現況では土塁が認識できない部分もあるが、後世の改変によって失われたと推測され、元来は、堀の両岸の全面に土塁が付いていたと思われる。

[軸方向] 検出範囲では東側が膨らむ弧状のプランである。南部（ＩＡ３ｇ付近）ではＮ－９°－Ｅの東に傾く軸方向が、中程（ＩＡ11ｈ付近）ではＮ－10°－Ｗと西側に傾きを転じ、北部（ＩＡ19ｆ付近）ではＮ－15°－Ｗとさらに西に寄る傾きとなる。

[幅] 堀本体の幅は上幅200～320cmを測る。300cm程の部位が多い。土塁上場から測ると550～650cmの幅となる。

[深さ] 堀本体の掘り込みは60～120cm程である。土塁頂部から堀底面の深さは180～190cmを測る。調査範囲内での堀の南端部の底面標高は97.0ｍ、北端部の底面標高は85.8ｍであり、南から北に向かって標高が下がる。南端部の底面標高と北端部の底面標高の比高は11.2ｍである。

[埋土] 堀本体の埋土は４～６層程度に分けられる。観察した部分ではいずれも自然堆積である。また、土塁の盛土は２～３層に分層できるが版築はなされていない。堀を掘った土を盛り上げたものと見て取れる。調査前は堀本体が窪んだ状況であり、完全埋没には至っていなかった。

[重複] 縄文時代の陥し穴ＳＫＴ07、ＳＫＴ08と重複するが、本堀が新しい。

[付属施設] 上述のように堀本体の両側に土塁が付く。この他に付属施設と解釈されるものはない。

[出土遺物] 南側堀内部の表土から大正10年（1921）の一銭青銅貨（第60図49）が採取された。ま

た、堀の南側（ＩＡ５ｇ～６ｇ付近）の土塁盛土下の旧表土から縄文土器の底辺部（第55図42 321.2ｇ）が出土した。この他、図示はしていないが、堀の埋土中及び、土塁構築土、土塁下から縄文土器片が合計1,253.5ｇ出土している。いずれも細片で摩耗しているものも多く、堀の埋没過程で周囲から流れ込んだものと推測される。

[小結] 二子城の西辺を南北に縦貫する長大な堀である。検出し掘り上げた分の長さは、約105ｍであるが、地表面の痕跡から、この堀は調査区域外の南北それぞれに連続することが読み取れ、確認、想定できる総長は1,135ｍに及ぶ。

本調査区の南側では、埋まり切らない状態の堀と土塁の盛土が残っており、その走向を追うことができる。本調査区の南端から南へたどって記述すると、調査区南端から約80ｍはＮ－９°－Ｅ（北を上にしての軸方向、以下同）の走行を保つ。その後、堀の走行が一旦東側に曲がり14ｍ程延びた後、再び向きを南西側に転じる。軸方向は概ねＮ－９°－Ｅである。この走向で約65ｍ延びた後は西側に新設の南北に走る道路の造成により、堀は一旦失われている。さらに南に下ると再び、Ｎ－50°－Ｗの走行の堀が確認できる。この堀も形態、規模からＳＤ03の一部と理解される。道路で失われた部分の走行を想定すると南西向きの走行であった堀が、道路敷地内で南東側に向きを転じたと理解される。再び確認される堀は約120ｍ南東に延びるのが確認できるが、以後は地表に残された痕跡は不明瞭になる。しかしながら元来はさらに南東側に延びていたと推測される。さらに南で、この堀の走向は東西に走る道路によって分断される。道路よりも南側（北上北中学校方面）については、立ち入っての踏査をおこなっておらず、堀の存在の有無は確認していない。

調査区の北側で本堀は一旦途切れている。これは堀が終息するのではなく、北側が以前の工業団地造成の際に大規模に土取され、それによって、堀のプランが失われているものである。よって元来は、本堀はさらに北に連続していたと理解される。今回検出した堀の北端部から約220ｍ北の地点には、そこからさらに北に延びる明瞭な堀の痕跡が残っている。これは物見ヶ崎と称される丘陵地形の西麓を南北に縦貫しており、現況でも約210ｍを明瞭にたどることができる。この堀は、今回検出した堀ＳＤ03と連続性が見いだせる位置、走行にあり、一体の堀と解釈するのが自然である。物見ヶ崎西麓の堀の南端と、今回検出のＳＤ03の北端の間は造成工事がなされ、旧状が全く損なわれており、堀の痕跡は全く確認できないが、元来は両者が連続していたものと解釈する。また、この空間には明治期の地籍図を重ねると、二筋の沢地形（地目は水田）が東西に走っていたことを読み取れ、堀はこの地形も積り込む形で構築されていたと推測する。

物見ヶ崎西麓の堀を北側にたどると、Ｎ－５°－Ｗの走行であったものが、Ｎ－12°－Ｅ程のやや東に向く走向になり、現在の「しみず斎苑」の敷地に延びる。しみず斎苑の建設の際に発掘調査がおこなわれており、ＳＤ03・物見ヶ崎西麓の堀と連続すると解釈される堀が調査されている。報告書（北上市教育委員会1989『くつわ清水遺跡』北上市文化財調査報告書第51集）に掲載された堀の図面で測ると、堀本体の上幅約300cm、深さ約110cm、土塁頂部からの幅は約700cm、深さ約230cmである。軸方向はＮ－50°－Ｅの走行で、斎苑南側よりもさらに東に傾く。明治期の地籍図では、現しみず斎苑付近で細長い区割りの地割が枝分れした二筋の地割が見て取れる。その南東側の地割（草生地）が「くつわ清水遺跡」の調査で検出された堀と重なる。地籍図では検出された堀と重なる地割は唐突に途切ているが、これは堀が途切れているのか、地籍設定の際に既に改変等によって堀の延長が失われていたものかは定かではない。また、二筋の細長い地割のうち、北西側の地割（水田）にもトレンチ設定し調査が行われている。報告書では、堀としての人為的な成形は見出せないものの「壕として人工的に掘削したものというより、自然の沢を壕がわりに用いたと考えられる」と報じている。

この地割はしみず斎苑付近ではN－25°－Eの走行であったものが。県道を跨ぐ付近でさらに傾きを東側に転じ、北上川に合流する沢地形となっている。この沢地形は「内膳沢」と称される沢で、二子地区と成田地区の境界にもなっている。内膳沢は自然の沢地形であるが、ＳＤ03とは連続性があり「くつわ清水遺跡」の報告の解釈どおり、内膳沢もＳＤ03の一部と解釈するのが妥当と考える。よって、しみず斎苑付近でＳＤ03は二股に分かれ、北西側のラインは自然の沢地形（内膳沢）につながり、走向を東向きに転じ北上川に合流する。南東側のライン（「くつわ清水遺跡」で調査された堀）は県道西側でプランが不明瞭になり、現況ではそれよりも東側に延びるのか否かは不明ということになる。この南東側の堀もそのままの走行を延長すると北上川に合流する直前の内膳沢にぶつかり、もし堀が延長するのであれば、末端は内膳沢に合流していたものと推測される。よって、本堀ＳＤ03全体の北端は内膳沢と北上川の合流地点ということになる。

本堀に相当すると推測されるものが「から堀」として伝承されている。笞見の範囲で最も古い記述は天保二年（1831）に富岡理翁が著した『二子物語』（北上市史刊行会1983『北上市史第九巻近世（7）』所収）である。『二子物語』では「…夫より壱ツ森ト申ハ和賀時代ニ物見ヶ崎ト申也。此森之下西ノ方ニから堀有り、是ハ和賀一揆蜂起之節一夜ニ堀候ト言所なり。其時持人足ハ近郷近在之者、家別ニ拾五歳より六拾余之年迄手足立ツ者ハ不残被召出、勢限りこんかぎりに被為堀候所ト伝承候。勢つきくたびれたる者あれハ、御奉行数人懸廻りあやがり者与被思不物言ニ首を切捨通りけれハ、命ヲ限りなぎさけび堀りける程に、内膳沢より斎藤ケ沢之北迄ニ半塚斗リ場所ヲ只一夜之内ニ堀候ト申伝ル也。」とある。意訳すると「物見ケ崎の西に空堀がある。これは、和賀一揆（1590年の和賀稗貫一揆か）の際に、領民を総動員して掘らせた堀跡がある。内膳沢から斎藤沢の北まで半里（約1,963m）を一夜で掘ったと伝えられる」となる。『二子物語』を引用したと推測される記述は大正２年刊行の『二子村誌』（鈴木隆太郎1913）にも「旧蹟」の項に「空濠」として記されている。記述内容から今回調査した本堀ＳＤ03が『二子物語』の「から堀」に相当することは疑いがない。伝承の内容が史実であるか否かはともかくとしても、幕末に、堀の痕跡が延々と明瞭に残っており、地元地域にこのような伝承がなされていたことは興味深いことである。

現実的な本堀の機能を考察する。中世城館の堀の一般的な機能は、攻め手の侵入を阻止する目的であり、侵入させたくない郭の縁辺部に構築し、堀の郭側に土塁を築くのが通常であろう。しかし今回の調査範囲のＳＤ03の状況をみると、その様な意図は読み取れない。堀の両側に土塁があり、侵入を阻止したい方向が明確ではない。また、堀の構築によって防御を意図する空間もはっきりしない。これは調査区内のみではなく、調査区外のＳＤ03とその周囲の地形の関係をみても同じことである。このようにＳＤ03の構築の意図は一般的な城館の城構えの堀とは考え難い。

二子城の構造を概観すると、東辺の低地に縦貫する道路と短冊形地割からなる「宿」の地区（Ｉ区とする）、そして宿の西の段丘上の平坦面に「白鳥館」等の郭が展開する区域（Ⅱ区）、さらにその西に「一ツ森」「八幡山」「秋葉山」の丘陵地形が位置し、それぞれが、腰郭、堀など城構が施されている地区（Ⅲ区）がある。そしてさらにⅢ区の西には、城構が施されない谷や尾根等の地形が展開する（Ⅳ区）。一ツ森の西半は、腰郭等の城構の造成が見いだせず、Ⅳ区の範囲と考える。

通常の理解であれば、堀、腰郭、平場等の城構が構築されるⅡ、Ⅲ区が城館の中核部であり、Ｉ区も宿場、城下町といった城館を構成する要素と位置付けられるものである。しかし明確な城構の施設が存在しないⅣ区は城館の構成要素としては理解が難しい区域である。しかし、本ＳＤ03はⅣ区の西辺に位置し、Ⅳ区とそのさらに西側の区域を区分する意図を読み取れ、Ⅳ区とそれより西側の外部は明確に区別されている。よって、位置付けが難しいⅣ区も二子城の構成する区域と理解すべきであ

る。

Ⅳ区の機能は想像の域を出ないが、冬季間の馬飼育や、年季ごとの野馬追で馬を囲い込む空間と位置付けられるかもしれない。ＳＤ03の両側に土塁があることは、東西双方の通行を阻害する機能を示し、馬を囲い込む目的とも解釈できる。広大な牧（野馬）が二子城外の西側に存在し、この牧と城館の境界に緩衝地帯としての機能があるのかもしれない。いずれにせよ、本ＳＤ03はⅣ区の西辺を区画するとともに、二子城全体の西辺を画するものである。本ＳＤ03の検出によって、二子城の西辺が明らかになったと評価される。

ＳＤ04（第37・38・40図、写真図版18）

[位置] ＩＣ９ｅ、８ｆ、９ｆ、７ｇ、８ｇ、７ｈ、８ｈ、６ｉ、７ｉ。概ね標高84.5ｍ（溝外、溝検出前の地表高）の等高線ラインに沿って位置している。

[時期] 中世（二子城の存続期間）と推測。

[総長] 検出した長さは24.5ｍを測る。調査区外南東側プランが延びている。地表面には痕跡が残らないが標高84.5ｍの等高線に沿って谷１を横切る形で、谷東辺を区切る沢地形までプランが延びていると推測される。この想定であれば、総長（検出分も含め）は約80ｍとなる。

[形態] 堀ＳＤ01から枝分かれする形状である。土塁等は存在しない。

[軸方向] プランは概ね真直ぐで、軸方向はＮ－58°－Ｗである。

[幅] 上幅90～140㎝を測る。110㎝程の部位が多い。

[深さ] 検出面からの掘り込みは50㎝程である。底面標高は83.58ｍ～83.82ｍである。一定方向への傾斜は読み取れない。

[埋土] 埋土は３層に分けられる。人為堆積か自然堆積か判然としない部分があるが、純粋な自然堆積ではないと思われる。

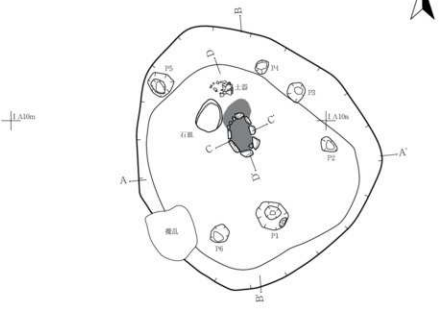
[重複] 掘立柱建物ＳＢ01の柱穴Ｐ４と本溝が切り合っており、本溝が古い。またＩＣ９ｅ付近で堀ＳＤ01から枝分かれする形で東側に本溝（ＳＤ04）が伸びる。ＳＤ04は堀ＳＤ01の西側には突き出ておらず、同時存在の遺構と判断される。また、ＳＤ04が枝分かれする部位の堀ＳＤ01の土塁は、ＳＤ04の形状に沿って割れていたわけではなく、周囲と同じ高さのままであり、ＳＤ04の枝分かれ部分は堀ＳＤ01の土塁で覆われていたと判断される。よって、ＳＤ04とＳＤ01の構築は同時の工程によるものと判断される。

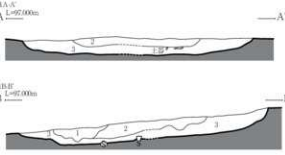
[付属施設] 本溝ＳＤ04は堀ＳＤ01から枝分かれするプランであり、ＳＤ04がＳＤ01の付属施設とも位置付けられる。

[出土遺物] なし

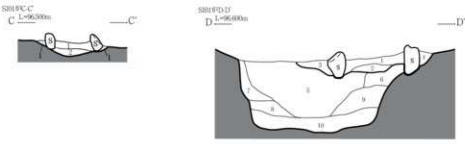
[小結] 本溝ＳＤ04は調査区東端ＩＣ区付近から調査区東外に広がる谷地形「谷１」を横断する形で構築されている。機能としては谷１を南北に分断し遮断する目的が見て取れる。埋土、底面の観察からは裏付ける痕跡を読み取れなかったが、柵、塀を設置するための「掘方」ではないかと想定される。堀ＳＤ01によって谷１の西端は閉塞されているが、さらにＳＤ01から枝分かれするＳＤ04によって谷１を南北に分断する構造も造作されていると理解される。ＳＤ04の機能もＳＤ01の機能と同様に城館の防御の機能とは考え難く、馬飼育の牧に関わる施設「牧袋」の機能などが推測される。牧袋に追い込んだ馬をさらに選別、区分するための遮蔽施設の可能性が高いと考える。　（以上、羽柴）

SI01





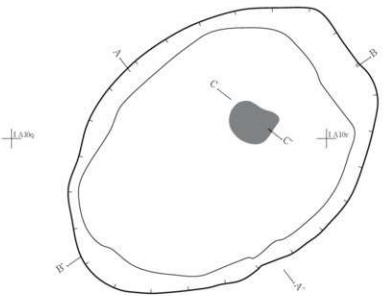
SI01A-A', B-B'
1 10YR2/3 黒褐色シルト 浮石粒3～5％含む 粘性中 締り中
2 10YR5/6 黄褐色シルト 暗褐色シルトを30～40％含む 粘性中 締り中
3 10YR4/6 褐色シルト 炭粒3～5％含む 土器も出土する 粘性中 締り中

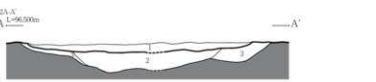


SI01C-C', D-D'
1 10YR4/4 褐色シルト 炭粒2～3％ 焼土粒1～3％含む 粘性中 締り中 SI01の炉
2 10YR3/4 暗褐色シルト 焼土粒20～25％含む 粘性中 締り中 SI01の炉
3 10YR4/4 褐色シルト 焼土粒20～30％含む 粘性中 締り中 SI01の炉
4 10YR7/6 明黄褐色シルト 粘性やや強い 締りやや強い SI01の炉
5 10YR3/3 暗褐色シルト 浮石粒5％含む 粘性 締り中 SKT19の埋土
6 10YR6/8 暗黄褐色シルト 粘性やや強い 締り中 SKT19の埋土
7 10YR5/6 黄褐色シルト 粘性やや強い 締り中 SKT19の埋土
8 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 粘性中 締り中 SKT19の埋土
9 10YR5/6 黄褐色シルト 褐色シルト10％含む 粘性中 締り中 SKT19の埋土
10 10YR4/4 褐色シルト 粘性中 締り中 SKT19の埋土

第17図 ＳＩ01

SI02



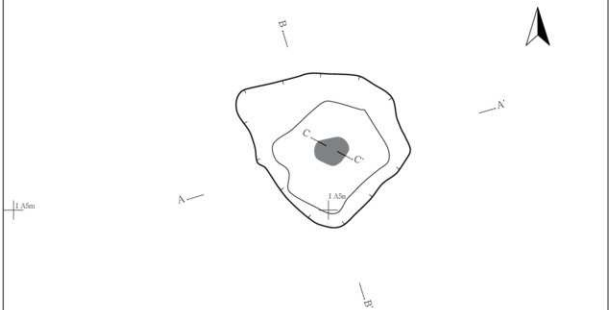


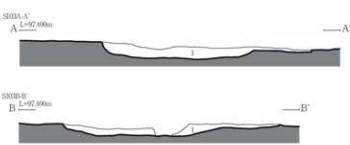
SI02A-A'・B-B'
1　10YR4/4 褐色シルト　炭粒10%含む　粘性中　締りやや弱い　遺物含む
2　10YR2/2 黒褐色シルト　粘性中　締り中　浮石10~20%含む（風倒木）
3　10YR4/6 褐色シルト　粘性中　締り中（風倒木）

SI02を'C-C'
1　5YR5/8 明赤褐色焼土　検出面では炭粒もごく微量含んでいた　粘性弱い　締り中

第18図　ＳＩ02

SI03



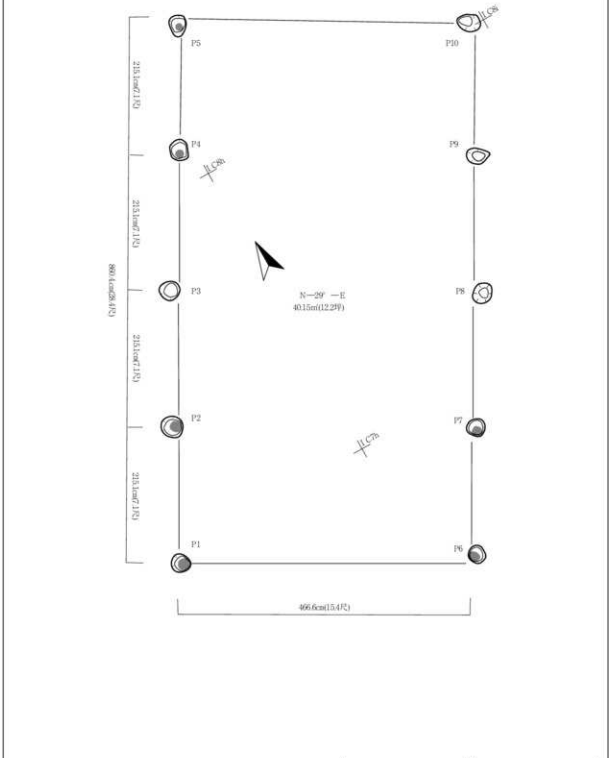


SI03A-A'、B-B'
1　10YR4/4 褐色シルト　炭粒5～10%含む　土器片も少量出土した　粘性中　締り中

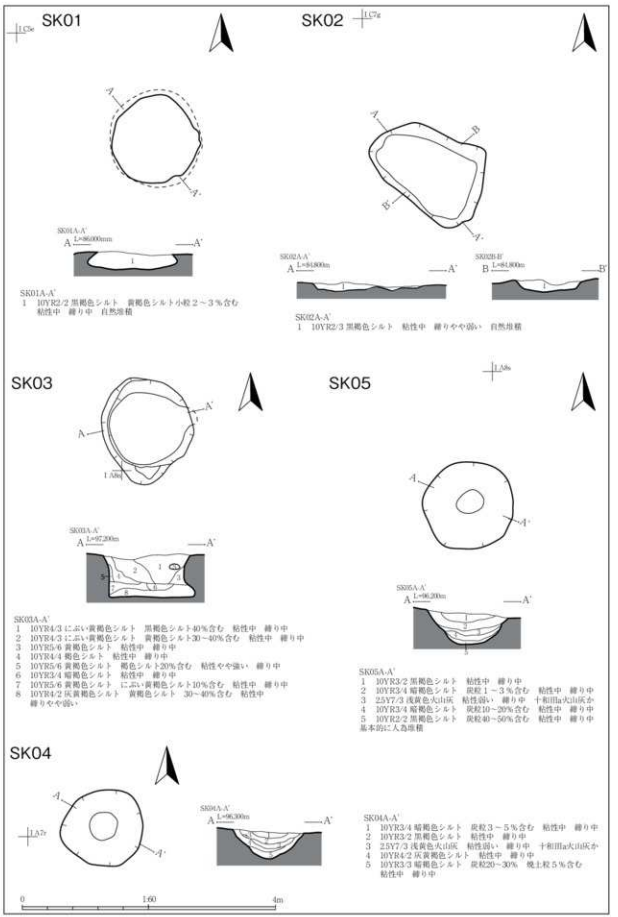
SI03B'C-C'
1　5YR5/8 明赤褐色焼土　粘性やや弱い　締り中

第19図　S I 03

SB01

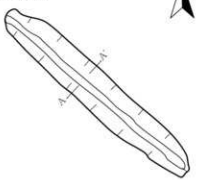


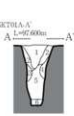
第20図　ＳＢ01


SK01
SK01A-A'
A L=86.000m
A'
1
SK01A-A'
1 10YR2/2 黒褐色シルト 黄褐色シルト小粒2～3％含む
粘性中 締り中 自然堆積
SK02
SK02A-A'
A L=84.800m
A'
SK02B-B'
B L=84.800m
B'
SK02A-A'
1 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性中 締りやや弱い 自然堆積
SK03
SK03A-A'
A L=87.200m
A'
1.50m
SK03A-A'
1 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 黒褐色シルト40％含む 粘性中 締り中
2 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 黄褐色シルト30～40％含む 粘性中 締り中
3 10YR5/6 黄褐色シルト 粘性中 締り中
4 10YR4/4 褐色シルト 粘性中 締り中
5 10YR5/6 黄褐色シルト 褐色シルト20％含む 粘性やや強い 締り中
6 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性中 締り中
7 10YR5/6 黄褐色シルト にぶい黄褐色シルト10％含む 粘性中 締り中
8 10YR4/2 灰黄褐色シルト 黄褐色シルト 30～40％含む 粘性中
締りやや弱い
SK05
SK05A-A'
A L=86.200m
A'
SK05A-A'
1 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性中 締り中
2 10YR3/4 暗褐色シルト 炭粒1～3％含む 粘性中 締り中
3 2.5Y7/3 浅黄色火山灰 粘性弱い 締り中 十和田a火山灰か
4 10YR3/4 暗褐色シルト 炭粒10～20％含む 粘性中 締り中
5 10YR2/2 黒褐色シルト 炭粒40～50％含む 粘性中 締り中
基本的に人為堆積
SK04
SK04A-A'
A L=86.300m
A'
SK04A-A'
1 10YR3/4 暗褐色シルト 炭粒3～5％含む 粘性中 締り中
2 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性中 締り中
3 2.5Y7/3 浅黄色火山灰 粘性弱い 締り中 十和田a火山灰か
4 10YR4/2 灰黄褐色シルト 粘性中 締り中
5 10YR3/3 暗褐色シルト 炭粒20～30％ 焼土粒5％含む
粘性中 締り中
0
1:60
4m

第21図 ＳＫ01～05

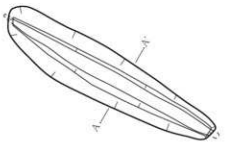
SKT01

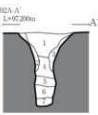




SKT01 A-A'
1　10YR2/3 黒褐色シルト　粘性中　締り中
2　10YR4/4 褐色シルト　粘性やや強い　締りやや強い
3　10YR6/6 明黄褐色シルト　浮石粒20%含む　粘性中　締り中
4　10YR6/6 明黄褐色シルト　粘性やや強い　締り中
5　10YR5/4 にぶい黄褐色シルト　粘性やや強い　締り中
6　10YR3/4 暗褐色シルト　粘性中　締り中

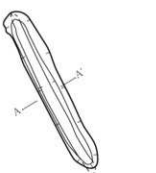
SKT02

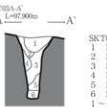




SKT02 A-A'
1　10YR3/3 暗褐色シルト　黒褐色シルト10%含む　粘性中　締り中
2　10YR6/4 にぶい黄橙色シルト　粘性やや強い　締り中
3　10YR7/4 にぶい黄橙色シルト　粘性中　締り中
4　10YR6/3 にぶい黄橙色シルト　灰粒3%含む　粘性中　締り中
5　10YR5/4 にぶい黄褐色シルト　粘性中　締り中
6　10YR6/4 にぶい黄橙色シルト　浮石粒10%含む　粘性中　締り中
7　10YR3/4 暗褐色シルト　粘性中　締り中
1～7：自然堆積

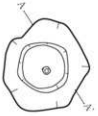
SKT03

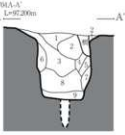




SKT03A-A'
1　10YR2/3 黒褐色シルト　粘性中　締り中
2　10YR4/4 褐色シルト　粘性中　締り中
3　10YR5/2 灰黄褐色シルト　粘性中　締り中
4　10YR6/6 明黄褐色シルト　粘性やや強い　締りやや強い
5　10YR6/8 明黄褐色シルト　粘性やや強い　締りやや強い
6　10YR2/3 黒褐色シルト　粘性中　締り中
1～6：自然堆積

SKT04



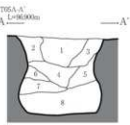


SKT04A-A'
1　10YR4/4 褐色シルト　粘性中　締り中
2　10YR3/3 暗褐色シルト　粘性中　締り中
3　10YR4/2 灰黄褐色シルト　粘性中　締り中
4　10YR6/6 明黄褐色シルト　粘性やや強い　締り中
5　10YR7/6 明黄褐色シルト　粘性やや強い　締りやや強い
6　10YR6/6 明黄褐色シルト　粘性中　締り中
7　10YR6/8 明黄褐色軽石粒　粘性弱い　締りやや強い
8　10YR5/3 にぶい黄褐色シルト　粘性中　締り中
9　10YR4/4 褐色シルト　粘性中　締り中
1～9：自然堆積

0　1/60　4m

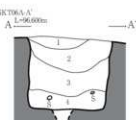
第22図　ＳＫＴ01～04

SKT05



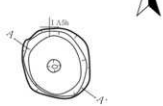
SKT05-A'
1　10YR2/3 黒褐色シルト　褐色シルト30%　浮石粒５％含む　粘性中　締り中
2　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト　粘性中　締り中
3　10YR4/4 褐色シルト　浮石粒５％含む　粘性中　締り中
4　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト　黄褐色シルト10%　浮石粒５％含む
粘性中　締り中
5　10YR5/4 にぶい黄褐色シルト　粘性中　締り中
6　10YR5/6 黄褐色シルト　粘性やや強い　締り中
7　10YR4/6 褐色シルト　粘性中　締り中
8　10YR3/4 暗褐色シルト　褐色シルト10%　黄褐色シルト５～10%　炭粒３％含む
粘性中　締りやや弱い
1～8：自然堆積

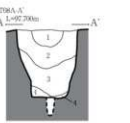
SKT06



SKT06A-A'
1　10YR4/6 褐色シルト　粘性中　締りやや強い
2　10YR3/3 暗褐色シルト　浮石粒５％含む　粘性中　締り中
3　10YR3/4 暗褐色シルト　黄褐色シルト10%含む　粘性中　締り中
4　10YR4/2 灰黄褐色シルト　円礫少量含む　粘性中　締り中

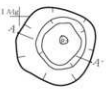
SKT07

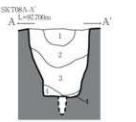




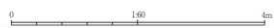
SKT08A-A'
1　10YR2/2 黒褐色シルト　粘性中　締り中
2　10YR3/4 暗褐色シルト　粘性中　締り中
3　10YR4/6 褐色シルト　粘性中　締り中
4　10YR5/6 黄褐色シルト　浮石５％含む　粘性中　締り中

SKT08



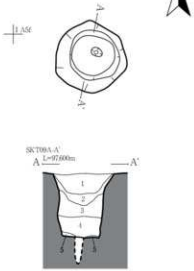


SKT08A-A'
1　10YR2/2 黒褐色シルト　粘性中　締り中
2　10YR3/4 暗褐色シルト　粘性中　締り中
3　10YR4/6 褐色シルト　粘性中　締り中
4　10YR5/6 黄褐色シルト　浮石５％含む　粘性中　締り中



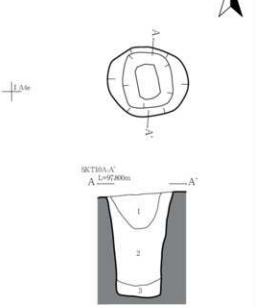
第23図　ＳＫＴ05～08

SKT09



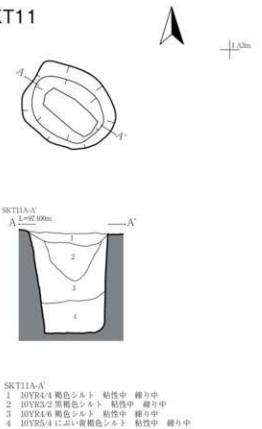
SKT09A-A'
1　10YR2/2 黒褐色シルト　粘性中　締り中
2　10YR3/4 暗褐色シルト　粘性中　締り中
3　10YR4/6 褐色シルト　粘性中　締り中
4　10YR4/2 灰黄褐色シルト　粘性中　締り中
5　10YR2/2 黒褐色シルト　粘性中　締り中

SKT10



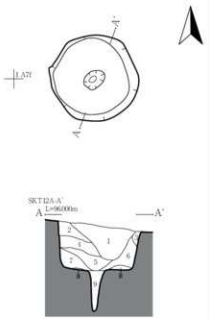
SKT10A-A'
1　10YR2/2 黒褐色シルト　粘性中　締り中
2　10YR4/4 褐色シルト　粘性中　締り中
3　10YR4/2 灰黄褐色シルト　粘性中　締り中

SKT11



SKT11A-A'
1　10YR4/4 褐色シルト　粘性中　締り中
2　10YR3/2 黒褐色シルト　粘性中　締り中
3　10YR4/6 褐色シルト　粘性中　締り中
4　10YR5/4 にぶい黄褐色シルト　粘性中　締り中

SKT12

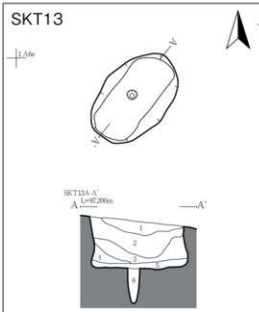


SKT12A-A'
1　10YR2/2 黒褐色シルト　浮石粒10%含む　粘性中　締り中
2　10YR2/3 黒褐色シルト　黄褐色シルト30%含む　粘性中　締り中
3　10YR5/6 黄褐色シルト　粘性やや強い　締り中
4　10YR2/3 黒褐色シルト　黄褐色シルト20～30%含む　粘性中　締り中
5　10YR3/3 暗褐色シルト　黄褐色シルト10～20%含む　粘性中　締り中
6　10YR4/6 褐色シルト　粘性中　締りやや弱い
7　10YR4/6 褐色シルト　浮石粒20～30%含む　粘性やや弱い　締り中
8　10YR2/3 黒褐色シルト　粘性中　締り中
9　注記をしなかった

0　1/60　4m

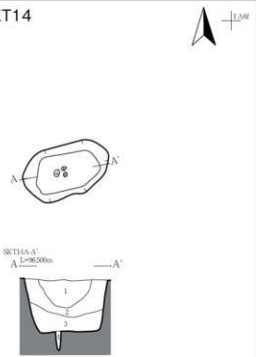
第24図　ＳＫＴ09～12

SKT13



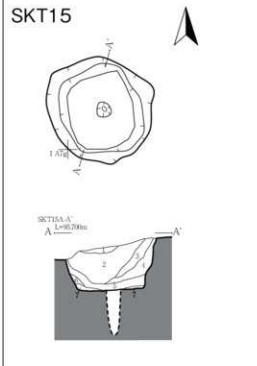
SKT13A-A'
1 10YR4/4 褐色シルト　粘性中　締り中
2 10YR3/2 黒褐色シルト　暗褐色シルト10～20%含む　粘性中　締り中
3 10YR4/2 灰黄褐色シルト　粘性中　締り中
4 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト　粘性やや強い　締り中
5 10YR3/2 黒褐色シルト　粘性中　締り中
6 注記をしなかった

SKT14



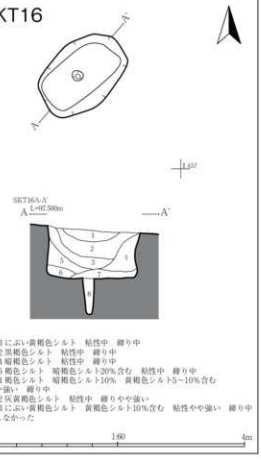
SKT14A-A'
1 10YR3/2 黒褐色シルト　浮石粒10%含む　粘性中　締り中
2 10YR4/2 灰黄褐色シルト　黄褐色シルト10%
暗褐色シルト10～15%含む　粘性中　締り中
3 10YR4/4 褐色シルト　暗褐色シルト10%含む　粘性中　締り中
4 注記をしなかった

SKT15



SKT15A-A'
1 10YR2/2 黒褐色シルト　粘性中　締り中
2 10YR3/3 暗褐色シルト　粘性中　締り中　浮石5～10%含む
3 10YR4/4 褐色シルト　黒褐色シルト10～20%含む　粘性中　締り中
4 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト　粘性中　締り中
5 10YR4/2 灰黄褐色シルト　粘性中　締り中
6 10YR5/6 黄褐色シルト　粘性やや強い　締り中
7 10YR2/2 黒褐色シルト　粘性中　締り中

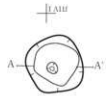
SKT16

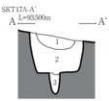


SKT16A-A'
1 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト　粘性中　締り中
2 10YR2/2 黒褐色シルト　粘性中　締り中
3 10YR3/4 暗褐色シルト　粘性中　締り中
4 10YR4/6 褐色シルト　暗褐色シルト20%含む　粘性中　締り中
5 10YR4/4 褐色シルト　暗褐色シルト10%　黄褐色シルト5～10%含む
粘性やや強い　締り中
6 10YR4/2 灰黄褐色シルト　粘性中　締りやや強い
7 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト　黄褐色シルト10%含む　粘性やや強い　締り中
8 注記をしなかった

第25図　ＳＫＴ13～16

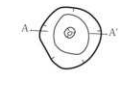
SKT17

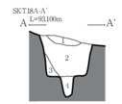




SKT17A-A'
1　10YR2/2 黒褐色シルト　粘性中　締りやや強い
2　10YR3/4 暗褐色シルト　褐色シルト30%　黄褐色シルト10～15%含む
　粘性中　締りやや強い
3　注記をしなかった

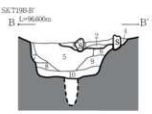
SKT18





SKT18A-A'
1　10YR2/2 黒褐色シルト　粘性中　締りやや弱い
2　10YR3/4 暗褐色シルト　黄褐色シルトや褐色シルトを20～40%含む
　粘性中　しまりやや弱い
3　10YR4/4 褐色シルト　粘性中　締り中
4　10YR4/2 灰黄褐色シルト　粘性　締りやや弱い

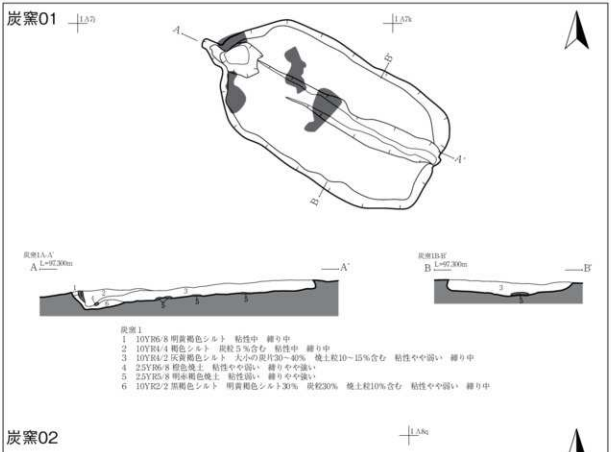
SKT19



SKT19A-A'・B-B'
1　10YR4/4 褐色シルト　炭粒2～3％　焼土粒1～3％含む　粘性中　締り中　SI01のP
2　10YR3/4 暗褐色シルト　焼土粒20～25%含む　粘性中　締り中　SI01のP
3　10YR4/4 褐色シルト　焼土粒20～30%含む　粘性中　締り中　SI01のP
4　10YR7/6 明黄褐色シルト　粘性やや強い　締りやや強い　SI01のP
5　10YR3/3 暗褐色シルト　浮石粒5％含む　粘性　締り中　SKT19の埋土
6　10YR6/8 暗黄褐色シルト　粘性やや強い　締り中　SKT19の埋土
7　10YR5/6 黄褐色シルト　粘性やや強い　締り中　SKT19の埋土
8　10YR5/3 にぶい黄褐色シルト　粘性中　締り中　SKT19の埋土
9　10YR5/6 黄褐色シルト　褐色シルト10%含む　粘性中　締り中　SKT19の埋土
10　10YR4/4 褐色シルト　粘性中　締り中　SKT19の埋土

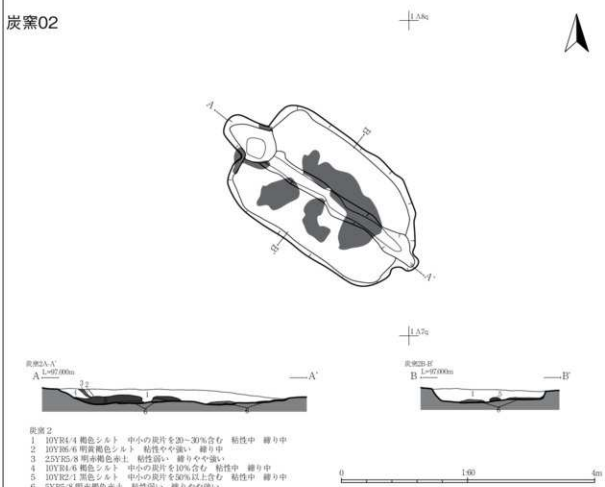
第26図　ＳＫＴ17～19

炭窯01



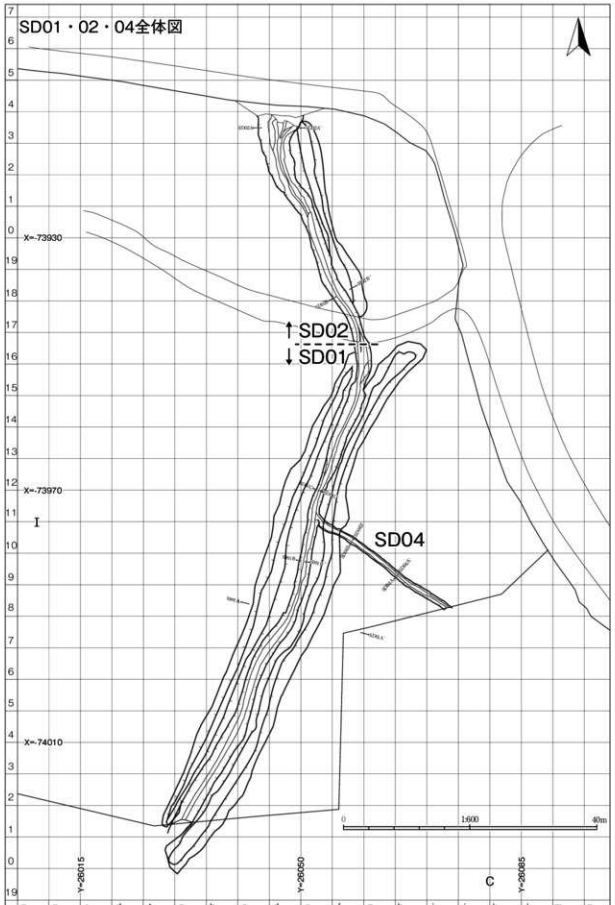
炭窯1
1　10YR6/8 明黄褐色シルト　粘性中　締り中
2　10YR4/4 褐色シルト　炭粒5%含む　粘性中　締り中
3　10YR4/2 灰黄褐色シルト　大小の炭片30~40%　焼土粒10~15%含む　粘性やや弱い　締り中
4　2.5Y6/8 橙色焼土　粘性やや弱い　締りやや強い
5　2.5YR5/8 明赤褐色焼土　粘性弱い　締りやや強い
6　10YR2/2 黒褐色シルト　明黄褐色シルト30%　炭粒30%　焼土粒10%含む　粘性やや弱い　締り中

炭窯02

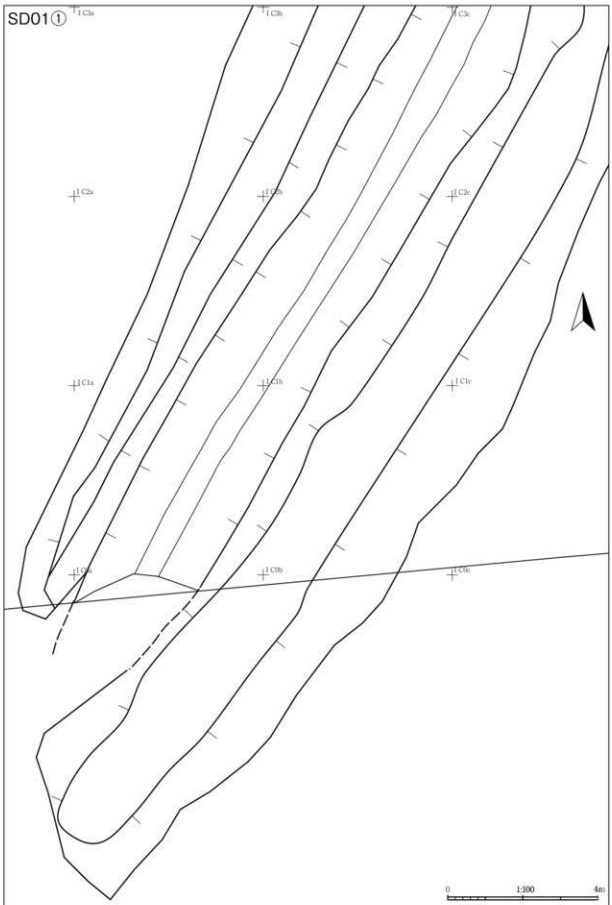


炭窯2
1　10YR4/4 褐色シルト　中小の炭片を20~30%含む　粘性中　締り中
2　10YR6/6 明黄褐色シルト　粘性やや強い　締り中
3　2.5YR5/8 明赤褐色赤土　粘性弱い　締りやや強い
4　10YR4/6 褐色シルト　中小の炭片を10%含む　粘性中　締り中
5　10YR2/1 黒色シルト　中小の炭片を50%以上含む　粘性中　締り中
6　5YR5/8 明赤褐色赤土　粘性弱い　締りやや強い

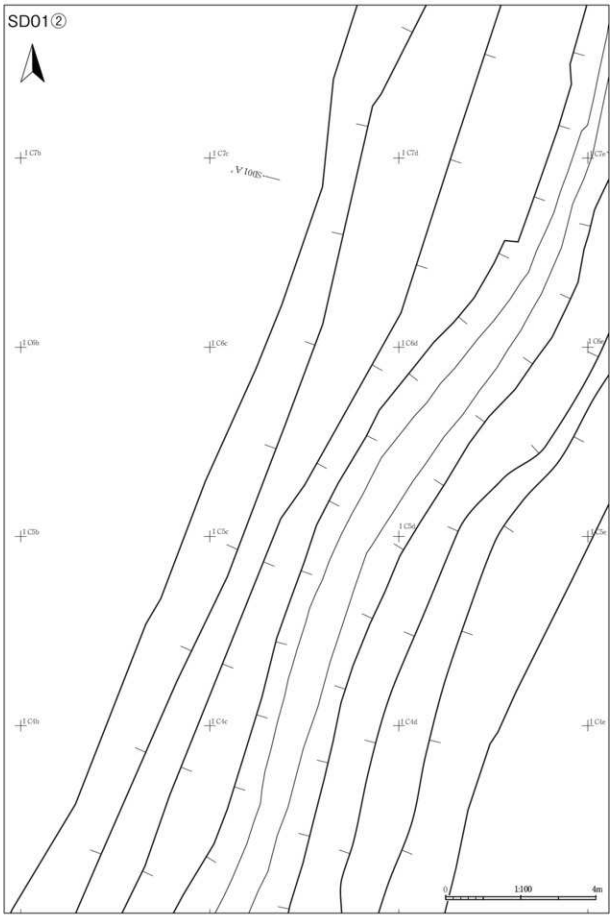
第27図　炭窯01・02



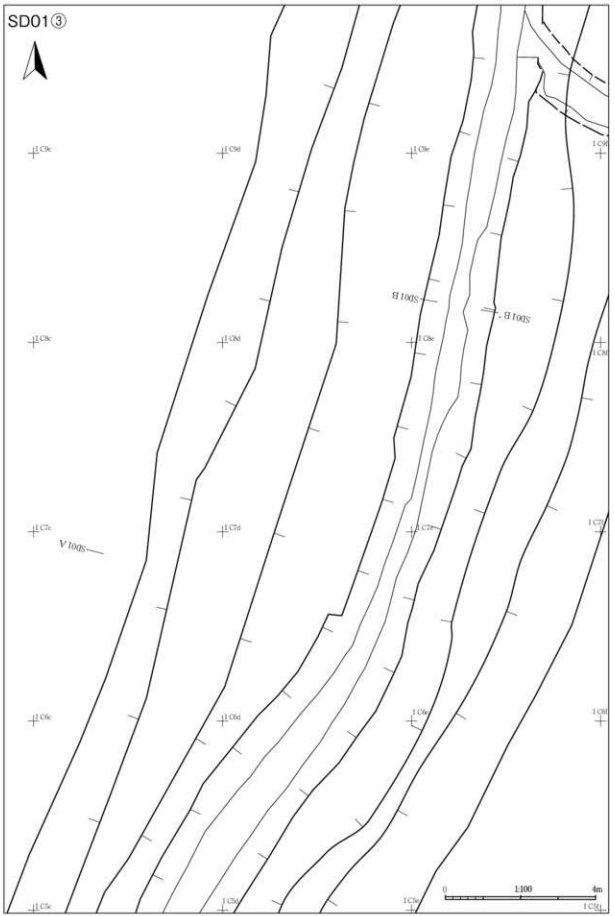
第 28 図　ＳＤ 01・02・04 全体図


SD01①
1 C2a
1 C2b
1 C2c
C2a
C2b
C2c
C1a
C1b
C1c
C0a
C0b
C0c
0
1:300
4m

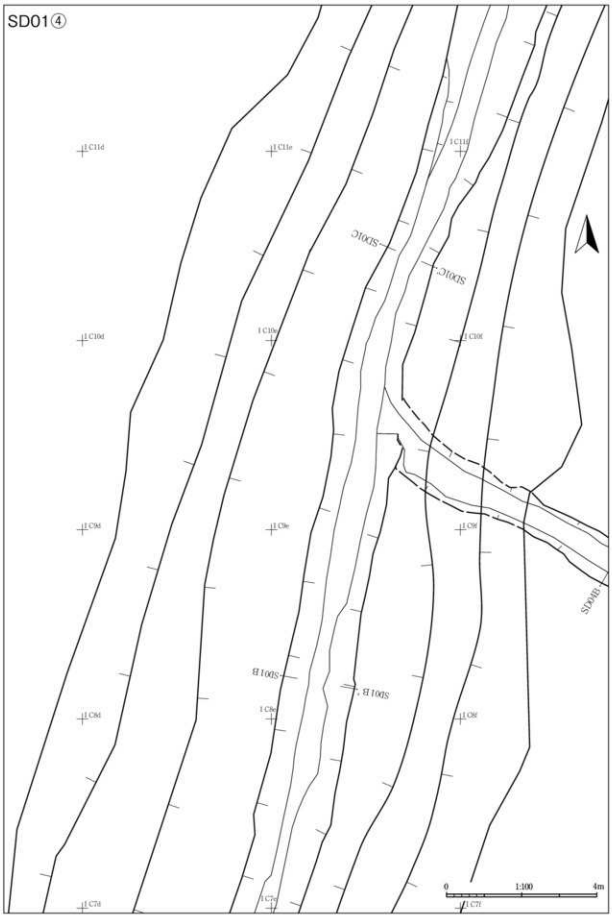
第29図　ＳＤ01（1）


SD01②
1C7b
1C7c
1C7d
1C7e
1C6b
1C6c
1C6d
1C6e
1C5b
1C5c
1C5d
1C5e
1C4b
1C4c
1C4d
1C4e
1:100
4m

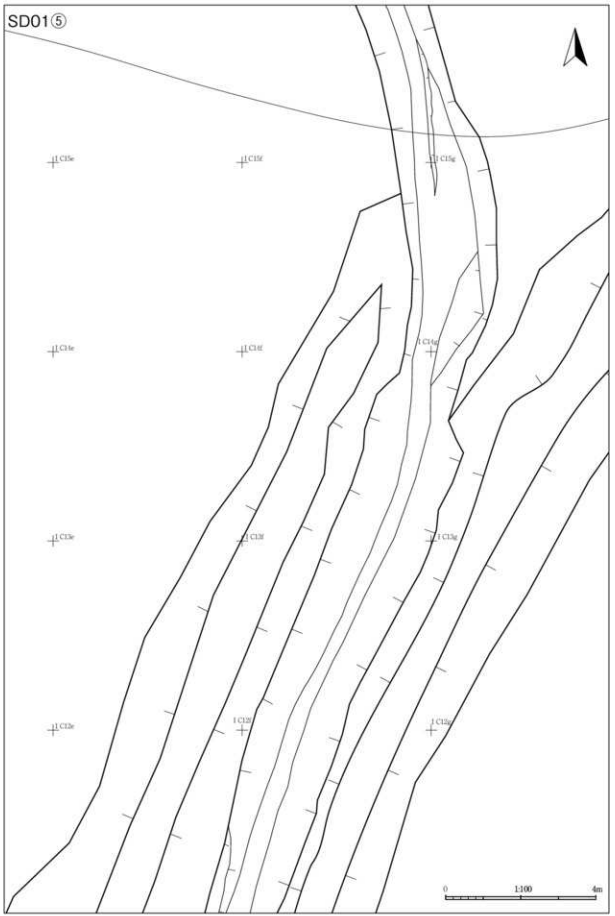
第30図　ＳＤ01（2）



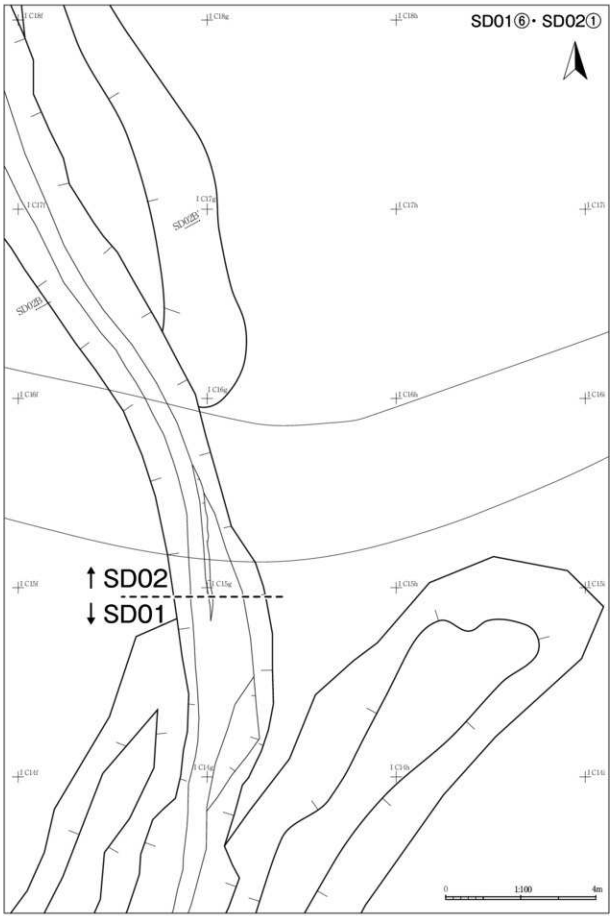
第31図 ＳＤ01（3）


SD01④
C11d
C11e
C11f
SD01C
SD01C
C10d
C10e
C10f
C9d
C9e
C9f
SD04B
SD01B
SD01B
C8d
C8e
C8f
C7d
C7e
C7f
0
1:100
4m

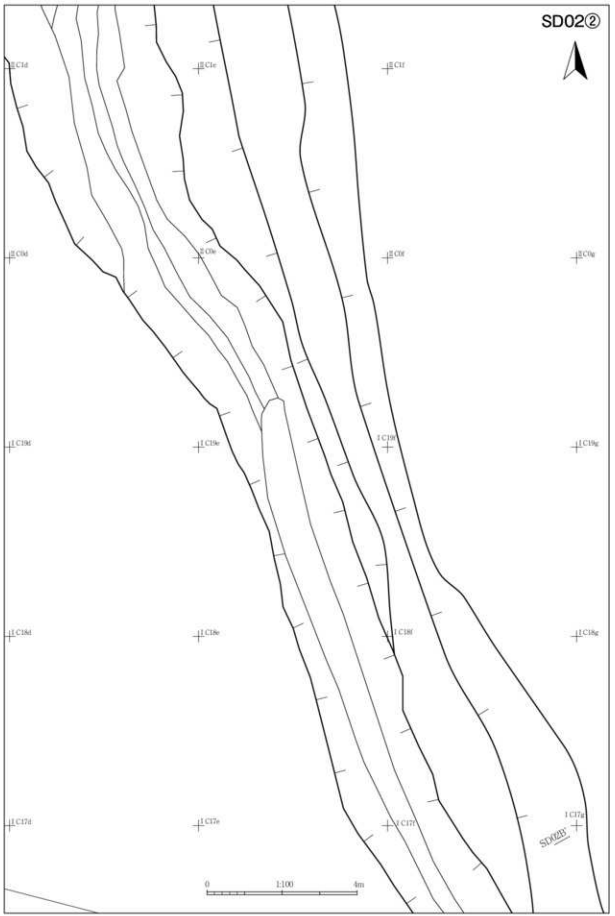
第32図　ＳＤ01（４）


SD01⑤
C15e
C15f
C15g
C16e
C16f
C16g
C13e
C13f
C13g
C12e
C12f
C12g
0
1:100
4m

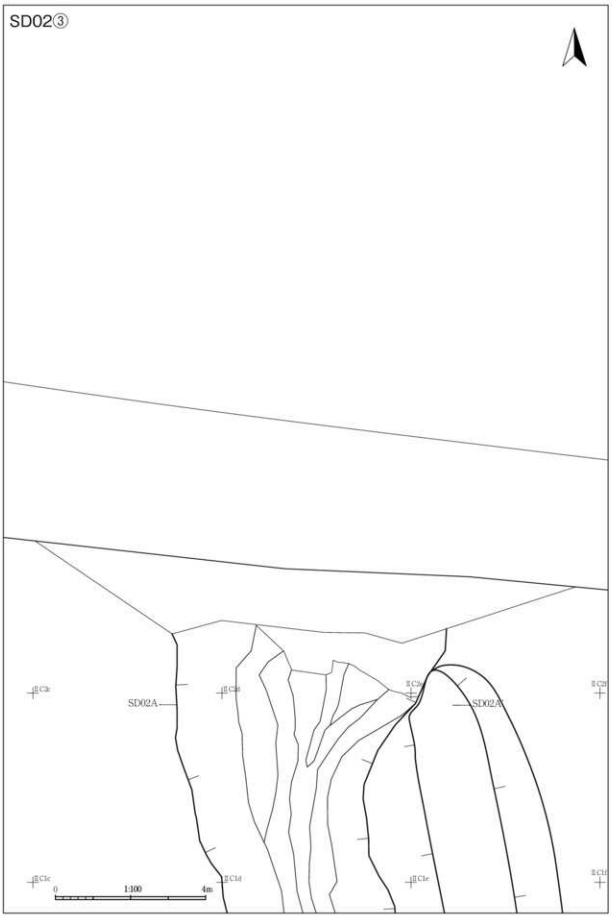
第33図　ＳＤ01（5）



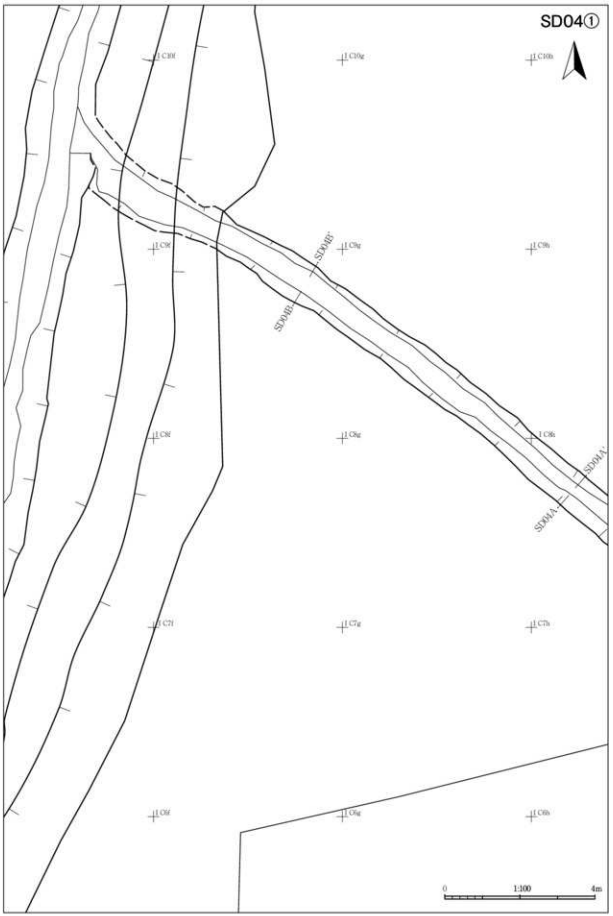
第34図　ＳＤ01（6）・ＳＤ02（1）


SD02②
C1d
C1e
C1f
C0d
C0e
C0f
C0g
C19d
C19e
C19f
C19g
C18d
C18e
C18f
C18g
C17d
C17e
C17f
C17g
SD02①
0
1:100
4m

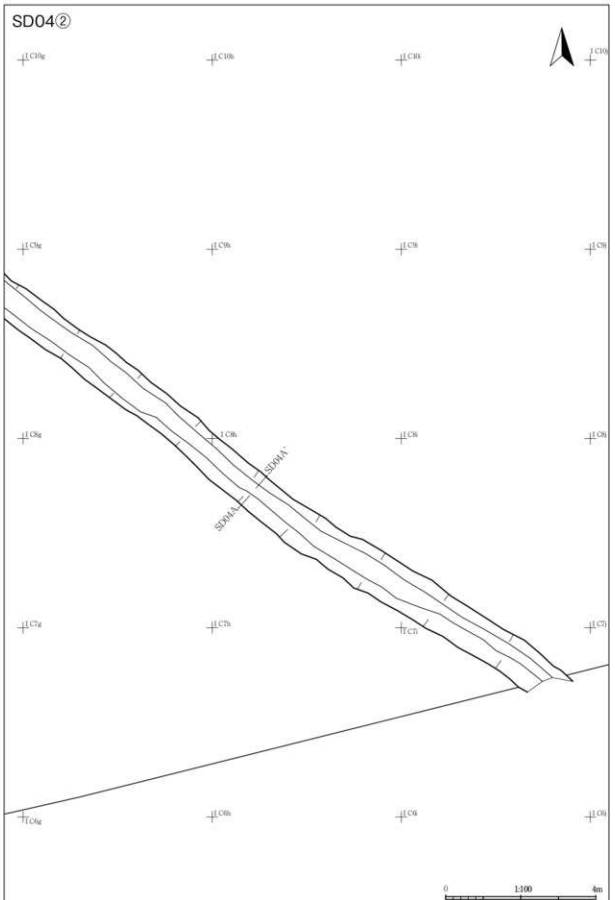
第35図　ＳＤ02（2）



第36図　ＳＤ02（3）

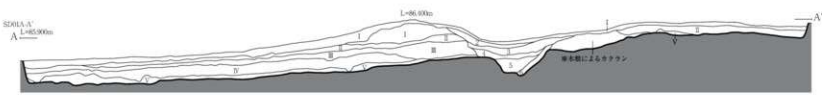


第37図 ＳＤ04（1）


SD04②
C10g
C10h
C10i
C9g
C9h
C9i
C8g
C8h
C8i
SD04A
SD04A'
C7g
C7h
C7i
C6g
C6h
C6i
0
1:100
4m

第38図　ＳＤ04（2）

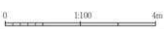
SD01断面



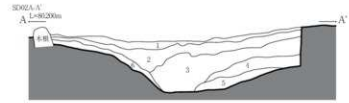
SD01A-A'
※10YR5/8 黄褐色シルトと10YR3/1 黒褐色シルトの混合土（5：5） 粘性中 締り強い。
1 10YR5/6～5/8 黄褐色シルト（地山） と10YR4/2 灰黄褐色シルトの混合土（8：2） 粘性中 締りやや弱い（土坑構築土）
2 10YR4/2 灰黄褐色シルトと10YR5/6 黄褐色シルトの混合土（5：5） 粘性中 締り弱い（土坑崩落土）
3 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性中 締り中 II層崩落土を含む
4 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 粘性中 締りやや弱い III層崩落度を含む
5 中央断面と同じ（但し礫は含まない）
6 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 粘性中 締り中 10YR5/8 黄褐色シルト（地山）少量含む（5％）

基本層序
I 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 粘性弱い 締り弱い（現表土 植物根多）
II 10YR3/1 黒褐色シルト 粘性中 締りやや弱い（旧表土）
III 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 粘性中 締りやや弱い 10YR5/6 黄褐色シルト少量（10%）含む
IV 7.5YR3/1 黒褐色シルト 粘性中 締り中 10YR5/6 黄褐色シルト 少量（5％）含む
V 10YR5/6 黄褐色シルト 粘性やや強い 締り中（地山）

SD01B-B' C-C'
1 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性中 締り中 拳大の礫少量含む
2 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 粘性やや強い 締り中 拳～手の平大の礫少量含む
3 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 粘性強い 締り中 地山小ブロック多量（30%）に含む（土坑崩落土）
4 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性やや強い 締り中



SD02断面



SD02 A-A'
1　10YR4/6 褐色粘土質シルト　粘性やや強い　締り中（表土）
2　10YR8/3 浅黄褐色粘土と10YR6/4 にぶい黄褐色シルトの混合土　粘性やや強い　締り強い（人為堆積）
3　7.5YR5/6 明褐色シルトと10YR7/6 明黄褐色シルトの混合土　粘性強い　締り強い（人為堆積）
　　※本層中に複数の廃棄の単位（かたまり）を認めるが分層は行っていない
4　10YR4/4 褐色砂質シルトと10YR5/6 黄褐色砂質シルクの混合土　粘性やや強い　締り中　こぶし大の礫を少量含む（5％）
　　※土器崩落土か？人為の可能性あり
5　10YR3/1 黒褐色シルト　粘性中　締り中
6　10YR3/2 黒褐色シルト　粘性中　締り中

SD02 B-B'
1　10YR4/4 褐色シルト　草本根多　粘性中　締りやや有　表土相当
2　10YR3/2 黒褐色シルト　西側に明黄褐色シルト10%含む　粘性中　締りやや有
3　10YR4/1 褐灰色シルト　粘性やや強い　締りやや有
4　10YR3/4 暗褐色シルト　粘性中　締りやや有
5　10YR4/2 灰黄褐色シルト　粘性中　締りやや有
6　10YR3/1 黒褐色シルト　明黄褐色粘土質シルト粒（小～極小）を20%含む　粘性やや強い　締りやや強い
7　10YR2/3 黒褐色シルトに明黄褐色シルト粒が40～50%混じる　粘性中　締りやや強い
1～7　自然堆積

0　1:100　4m

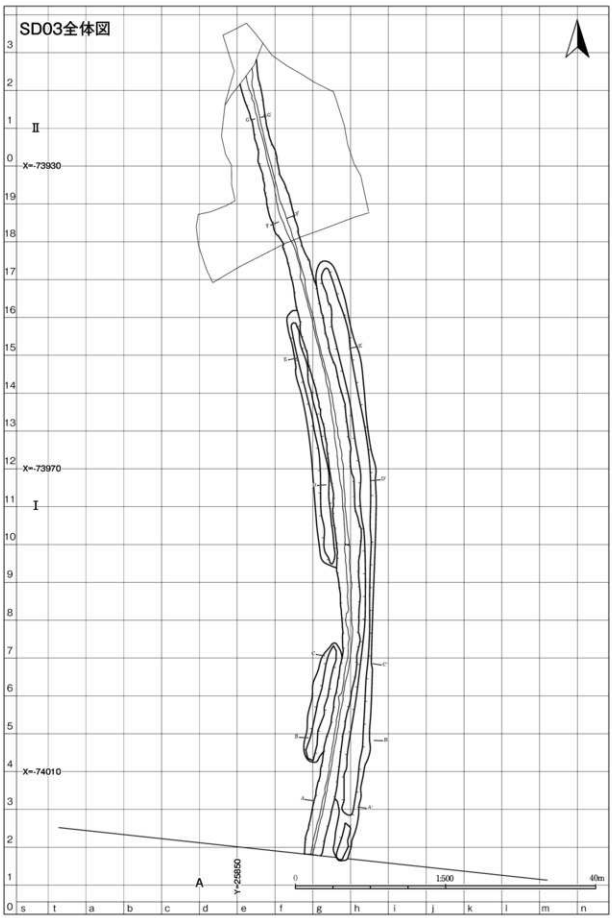
SD04断面

SD04 A-A'
1　10YR3/4 暗褐色シルト　地山ブロック（黄褐色シルト）を大量に含む　粘性中　締り中
2　10YR2/3 黒褐色シルト　粘性中　締り中
3　10YR3/3 暗褐色シルト　黄褐色シルト30%　黒褐色シルト10%含む　粘性中　締り中
2は自然堆積か、1・3は人為堆積か

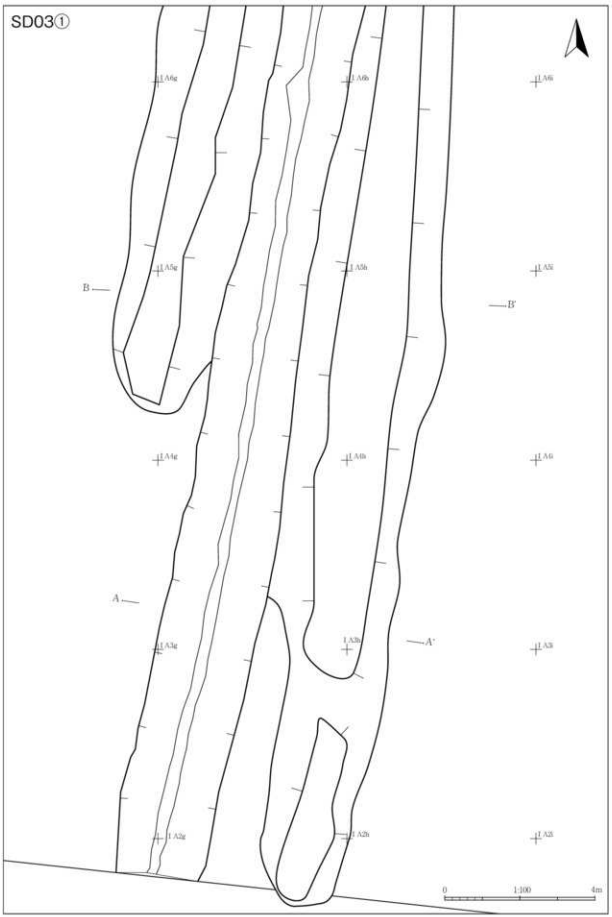
SD04 B-B'
1　10YR3/2 黒褐色シルト　粘性中　締り中
2　10YR4/4 褐色シルト　粘性中　締り中
3　10YR4/4 褐色シルト　黄褐色シルトブロック30%　暗褐色シルトブロック30%
　　黄褐色シルトブロック10%含む　粘性中　締り中
2・3は人為堆積であろう

0　1:100　4m

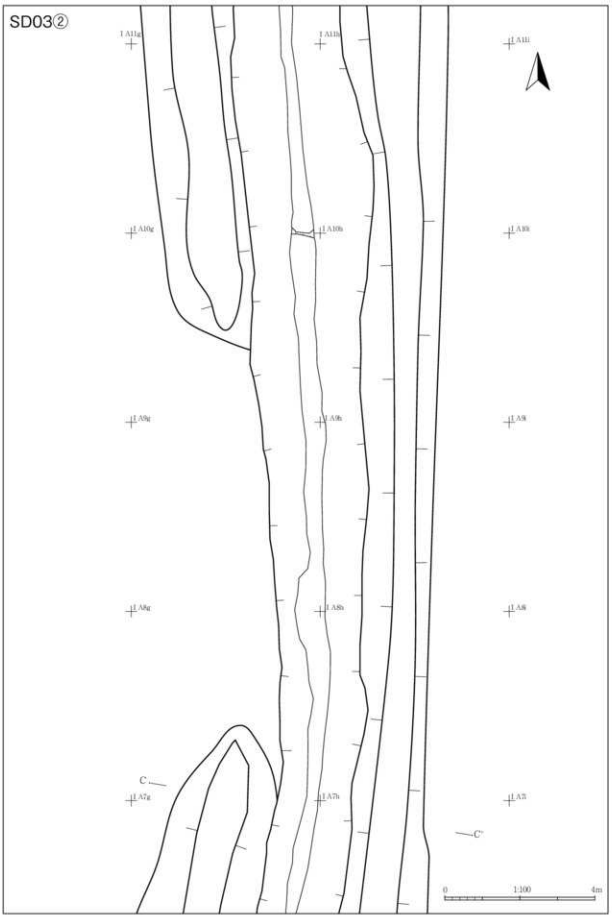
第40図　SD02・04断面



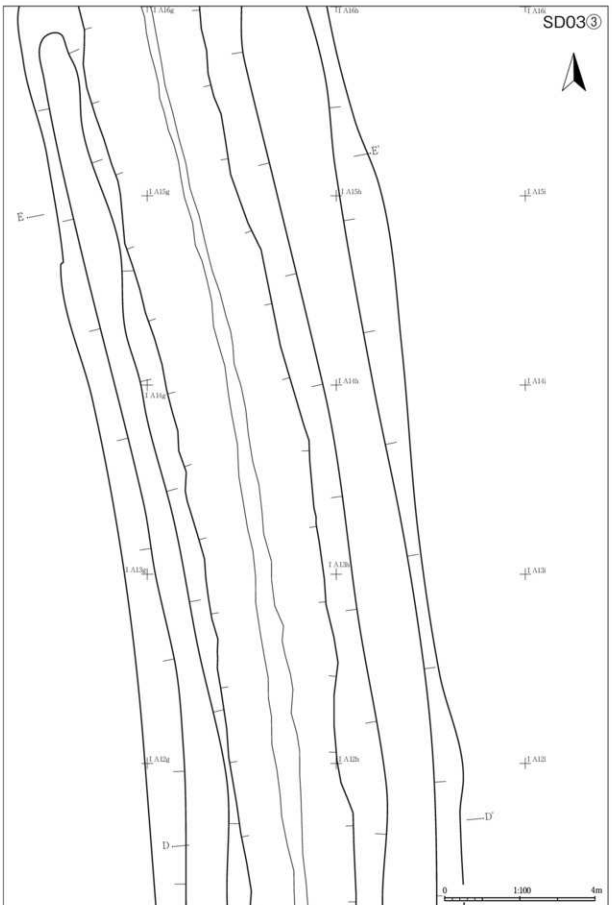
第41図　ＳＤ03全体図


SD03①
A6g
A6h
A6i
A5g
A5h
A5i
B
B'
A4g
A4h
A4i
A
A'
A3g
A3h
A3i
A2g
A2h
A2i
0
1:100
4m

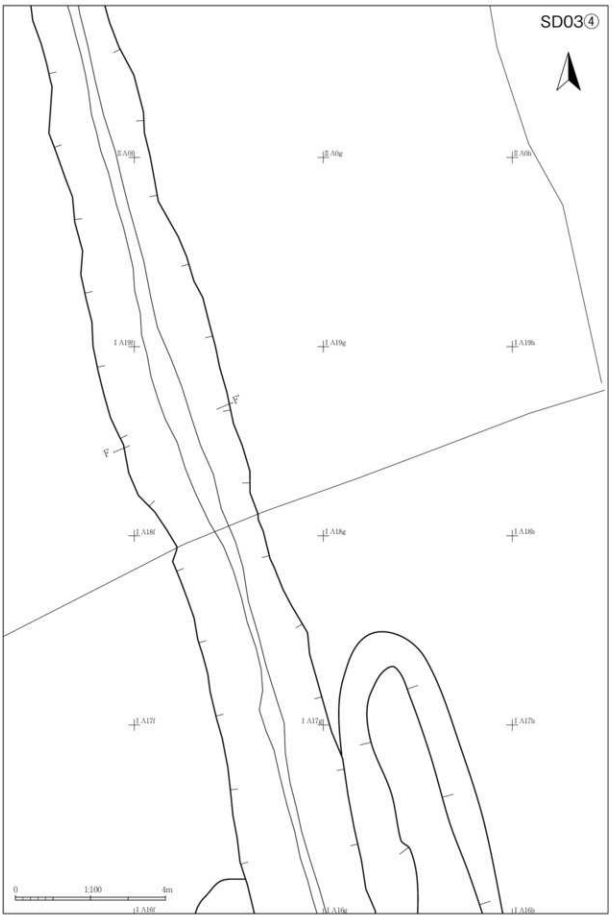
第42図　ＳＤ03（1）



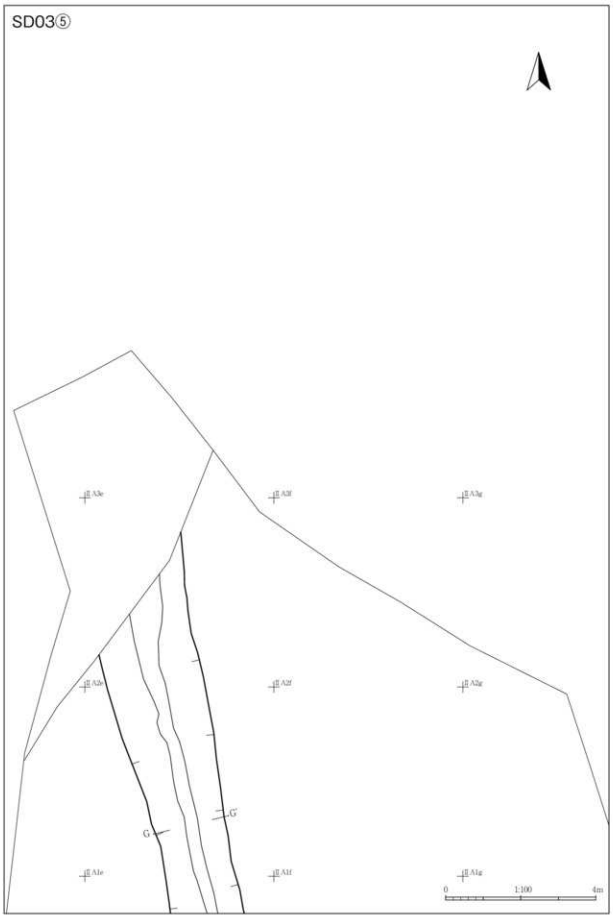
第43図　ＳＤ03（2）



第 44 図　ＳＤ 03（3）

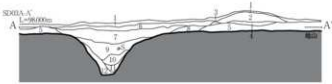


第45図　ＳＤ03（4）

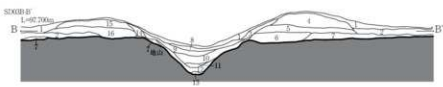


第46図　ＳＤ03（5）

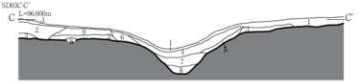
SD03⑥



SD03A-A'
1 10YR4/4 褐色シルト 草木根多 粘性やや弱い 締りやや 現表土
2 10YR6/8 明黄褐色シルト 浮石5％含む 粘性中 締りやや強い
3 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性中 締り中
4 10YR2/2 黒褐色シルト 旧表土 粘性中 締り中
5 10YR4/6 褐色シルト 粘性 締りやや強い
6 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 明黄褐色シルト10～20％含む 粘性中 締り中
7 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性中 締り中
8 10YR4/2 灰黄褐色シルト 粘性中 締り中
9 10YR4/6 褐色シルト 粘性中 締り中
10 10YR3/3 暗褐色シルト 浮石5％含む 粘性中 締り中
11 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 粘性中 締りやや弱い
12 10YR4/6 褐色シルト 浮石30～40％含む 粘性やや弱い 締り中
7～12：自然堆積



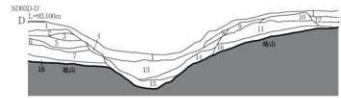
SD03 B-B'
1 10YR3/4 暗褐色シルト 草木根多 現在の表土 粘性弱い 締りやや弱い
2 10YR4/4 褐色シルト 粘性中 締り中
3 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 黄褐色シルト20％含む 粘性中 締り中
4 10YR6/8 明黄褐色シルト 同色の浮石10％含む 酉側は黄褐色に近い 粘性中 締りやや強い
5 10YR3/2 黒褐色シルト 旧表土 粘性中 締り中
6 10YR3/3 暗褐色シルト 黒褐色シルト20～30％含む 風倒木痕 粘性中 締りやや弱い
7 10YR5/6 黄褐色シルト（地山） 粘性やや強い 締りやや強い
8 10YR4/4 褐色シルト 黄褐色シルト30％混じる 粘性やや強い 締りやや強い
9 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性中 締り中
10 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 粘性中 締り中
11 10YR4/6 褐色シルト 粘性やや弱い 締り中
12 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 粘性中 締り中
13 10YR5/6 黄褐色シルト 褐色シルト20％ 浮石10％含む 粘性弱い 締り中
14 10YR4/6 褐色シルト 粘性中 締り中
15 10YR6/6 明黄褐色シルト 暗褐色ブロド5％含む 粘性中 締りやや強い（土壇）
16 10YR3/2 黒褐色シルト 旧表土 粘性中 締り中
8～13：自然堆積



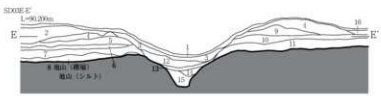
SD03 C-C'
1 10YR3/4 暗褐色シルト 草木根多 現在の表土 粘性弱い 締りやや弱い
2 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 粘性中 締り中
3 10YR2/2 黒褐色シルト 旧表土 粘性中 締り中
4 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性中 締り中
5 10YR3/3 暗褐色シルト 黄褐色シルト5％含む 粘性中 締り中
6 10YR4/6 褐色シルト 粘性中 締り中
7 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 浮石5％含む 粘性中 締り中
8 10YR4/6 褐色シルト 浮石20％含む 粘性弱い 締りやや強い
9 10YR6/6 明黄褐色シルト 暗褐色ブロド5～10％含む 粘性中 締りやや強い（土壇）
4～8：自然堆積

第47図 SD03（6）

SD03⑦

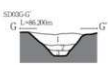


SD03D-D'
1　10YR1/4 褐色シルト　草木根多　粘性やや弱い　締り中　現表土
2　10YR6/8 明黄褐色シルト　浮石20%含む　粘性やや弱い　締り中（土器）
3　10YR3/3 暗褐色シルト　黒褐色シルト10～20%含む　粘性中　締り中
4　10YR4/2 灰黄褐色シルト　粘性中　締り中
5　10YR2/2 黒褐色シルト　旧表土　粘性中　締り中
6　10YR4/4 褐色シルト　黒褐色シルト5～10%含む　粘性中　締り中
7　10YR3/2 黒褐色シルト　旧表土　粘性中　締り中
8　10YR4/2 灰黄褐色シルト　粘性中　締り中
9　10YR3/4 暗褐色シルト　粘性中　締り中（土器）
10　10YR6/8 明黄褐色シルト　小円礫10%含む　粘性やや弱い　締りやや強い（土器）
11　10YR3/2 黒褐色シルト　旧表土　粘性中　締り中
12　10YR4/4 褐色シルト　粘性中　締り中
13　10YR4/4 褐色シルトと暗褐色シルトが中央部では交互に堆積　粘性中　締り中
14　10YR3/4 暗褐色シルト　明黄褐色シルト10%含む　粘性中　締り中
15　10YR3/3 暗褐色シルト　小～極小円礫を5～10%含む　粘性中　締り中
16　地山
4・8・13～15：自然堆積

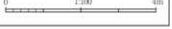


SD03 E-E'
1　10YR3/4 暗褐色シルト　草木根多　粘性やや弱い　締りやや弱い　現表土
2　10YR4/6 褐色シルト　粘性中　締りやや強い（新しい盛土）
3　10YR4/4 褐色シルト　粘性中　締り中
4　10YR6/8 明黄褐色シルト　小～中円礫10%　浮石10～15%含む　粘性中　締り中（土器）
5　10YR3/2 黒褐色シルト　粘性中　締り中（旧表土）
6　10YR4/4 褐色シルト　粘性中　締り中
7　10YR2/3 黒褐色シルト　粘性中　締り中
8　10YR5/6 明黄褐色砂質シルト　小円礫30～40%含む　粘性弱い　締り強い　地山
9　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト　地山ブロック40～50%含む　粘性中　締り中（土器）
10　10YR2/3 黒褐色シルト　粘性中　締り中（旧表土）
11　10YR3/3 暗褐色シルト　粘性中　締り中
12　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト　小円礫5%含む　粘性中　締り中
13　10YR3/3 暗褐色シルト　粘性中　締り中
14　10YR5/8 黄褐色シルト　小～極小礫を30～40%含む　粘性弱い　締り中
15　10YR4/4 褐色シルト　小円礫20～30%含む　粘性弱い　締り中
16　10YR4/6 褐色シルト　粘性中　締り中
3・12～15：自然堆積

SD03 F-F'
1　10YR3/3 暗褐色シルト　褐色シルト20%含む　粘性中　締り中
2　10YR3/2 黒褐色シルト　小円礫5～10%含む　粘性中　締り中
3　10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト　粘性弱い　締りやや強い
4　10YR5/8 黄褐色砂質シルト　小～極小円礫20～25%含む　粘性弱い　締り強い
1～4：自然堆積



SD03 G-G'
1　10YR2/2 黒褐色シルト　粘性やや強い　締りやや強い
2　10YR5/8 黄褐色粘土質シルト　小円礫10%含む　粘性やや強い　締りやや強い
3　10YR5/6 黄褐色シルト　小～極小円礫を40～50%含む　粘性弱い　締りやや強い
1～3：自然堆積



第48図　SD03（7）

V 出土遺物

今回の調査から、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石器、陶磁器、銭貨が大コンテナ5箱分出土した。以下、遺物の種類ごとに記載する（第49～56図）。

1 縄文・弥生土器

Ⅰ群 縄文土器

A類は中期前葉大木7b式中段階に相当する土器群で、14浅鉢以外は深鉢である。1・2・4・5はSI01埋土、3はSI01埋土上位、9～13はSI02埋土、14はSI02検出面、38・39はSKT06埋土、41・42遺構外出土である。1は口縁部から底部まで復元できた資料で、胴央部は残存が少ない。2個一対の波頂部を持つ大波状縁で、正面と対向する裏面が大きく、左右側面が小さく作られている。裏面は二又の波頂部の間に小さな突起を有する。口縁部は平行する縄圧痕LR 2条によって区画されており、無文帯となる。胴央部には文様帯を区画する横位平行沈線によって閉じられており、この間が文様帯となる。波頂部下に縄圧痕LRによる渦巻文を施し、これを挟むように沈線で縦位U字状区画が作られる。波底部下には沈線による渦巻文を伴う長方形区画を配し、両文様区画境界に押引文を充填する。地文は単節LR横位。2は平縁の口縁部～胴部上半片である。口縁部に最大径を持つ器形で、頸部は弱く窄まる。口縁部文様帯は狭く、横走する平行沈線によって区画されている。沈線による2条の重弧線文と渦巻文を配し、余白に縦位の刻目文を充填する。また、頸部との境界に指頭押圧のある粘土貼付を施し、頸部に連弧線文を施文する。地文は単節LR横位で、結節回転Z字状を伴う。3は胴部下半片で、直下が底部とみられる。単節LR斜位を施文し、下から4cm程は無文帯となる。4は口縁部～胴部上半片で、肥厚した口縁部に3条の横位平行沈線文を施し、直下の頸部に連弧線文を配する。地文は単節LR縦位。5は胴部片で、単節LR縦位が施文される。結節回転Z字状が認められるが、隣接して施文される原体との間隔はなくほぼ接している。垂下隆帯などの文様は破片上には残っておらず単体では時期不明だが、伴出土器からは7b式中段階に推定される。9は平縁の口縁部～胴部にかけての破片で、肥厚した口縁部に縄圧痕LR 3条を平行に施文する。頸部には、同じく縄圧痕LRによる連弧線文を配し、波底部から3条おきに2条の縄圧痕LRを垂下させる。地文は単節LR横位である。10はⅠ・Ⅱ文様帯の口縁部片で、指頭による摘まみを有する台形状の頂部を持つ大波状縁で、4単位とみられる。口縁に沿う2条の縄圧痕LRで区画し、内部に単節LR横位・斜位を地文に施文する。11・12は口縁部片で、平縁の口縁形状を持ち、単節LRを斜位に施文する。13は口縁部片で、平縁の口縁形状を持ち、単節LRを斜位～横位に施文する。14は浅鉢の口縁部片で、胴部が外傾しながら直線的に立ち上がり、頸部で屈曲し口縁部が直立気味に立ち上がる形状である。口縁部無文帯で、屈曲する頸部に横位の押引沈線文を施文する。内面は横位ミガキで仕上げられており、頸部に屈曲線はなく平滑である。38はⅠ・Ⅱ文様帯の口縁部片で、2個一対の頂部を持つ大波状縁でおそらく4単位とみられる。波頂部からは隆帯上に指頭痕を有するY字状隆帯を垂下させ、左右に隆線による対弧線文を配する。地文は単節LR横位で、隆帯に縄圧痕文LRを沿わせる。41はⅠ・Ⅱ文様帯の口縁部片で、2個一対の頂部を持つ大波状縁で4単位とみられる。口縁に沿う2条の平行沈線で区画し、波頂部下に渦巻文を施す。地文は単節LR横位。39・42はA類と考えられる深鉢で、39は底部、42は胴部下半～底部でいずれも底面に笹葉の痕跡が残る。42は胴部に単節LR斜

位・結節縦回転が施文される。

B類は後期初頭～前葉の門前式第3段階～後期前葉に相当する。40はSD01土壙の北端部旧表土出土の深鉢である。最大径が胴部上半にあり、口縁部は内傾して窄まりながら弱く直立する器形となる。口縁部無文帯で、明瞭な文様区画は施されない。胴部全体に単軸絡条体第5類Rを施文するが、使用による二次被熱のためか器面は荒れており、不明瞭である。輪積み部分からの横割れが顕著で、粘土紐の幅は2.5～3.0cm程度とみられる。同時期の遺物が他に出土しておらず、詳細な時期の位置付けは難しいが、器形からは該期の土器に推定される。

Ⅱ群　弥生土器

A類は前期青木畑式に相当する。43はT-121・Ⅰ～Ⅱ層、44はSKT05埋土出土である。43は台付浅鉢で、径が最大になる体部上半に文様帯を配し、2個一対の波頂部下に交叉部を有する変形工字文が施される。内面は横位沈線を引き、横方向にミガキ調整が入る。44は甕の体部片で、文様は施文されていない。外面は縦位ナデ、内面は横位ナデで調整される。外面には焼成時の黒斑が認められる。

B類は後期中葉湯舟沢式に相当する一群で、すべて甕と考えられる。7はSI02埋土、8はSI02検出面、16～33はSI03埋土、34はSK03埋土出土である。7はⅠ～Ⅱa文様帯の口縁部片で、折り返されて肥厚している。肥厚した口縁は、原体施文後に指押えの痕跡が認められる。Ⅰ文様帯の口縁部及び口縁部直下にRLを軸にLを2条付加した附加条縄文が施文され、空隙を空けて縄文の横帯を2段重ねて配置しているとみられる。8はⅡ文様帯の頸部片とみられ、空隙を空けてLRを軸にRを2条付加した附加条縄文を施文している。また、原体末端を装飾的に用いて文様帯としている。16はⅢ文様帯の底部片で、体部下半はRLを軸にLを2条付加した附加条縄文を縦位、底部側縁は斜位に施文する。7・8・16は同一個体の可能性がある。17はⅢ文様帯の体部片で、単軸絡条体第1類Lが斜位（左傾）、一部斜位（右傾）に走り、羽状構成となる。条の間隔は4㎜程度。外面にススコゲが少量付着する。17、22～33は同一個体の可能性がある。18はⅠ～Ⅱ文様帯の体部片で、Ⅰ文様帯に重鋸歯文、Ⅱa文様帯を無文とし、Ⅱ文様帯上部にLRを軸にRを2条付加した附加条縄文を施文し、原体末端を装飾的に用いて文様帯としている。19はⅡ文様帯の体部片で、対向重連弧文を施文する。摩滅が著しく不明瞭だが、重畳する可能性もある。18・19は同一個体か。20はⅡ文様帯の体部片で、RLを軸にLを2条付加した羽状構成の附加条縄文を施文する。21はⅢa文様帯の体部片で、RLを軸にLを2条付加した羽状構成の附加縄文を施文する。20・21は同一個体か。22はⅢ文様帯の体部片で、単軸絡条体第1類Lが斜位に走る（左傾）。条の間隔は3.5㎜程度。23はⅢ文様帯の体部片で、単軸絡条体第1類Lを縦走する。条の間隔は3～4㎜程度で、節は小さい。外面ススコゲ微量付着。24はⅢ文様帯の体部片で、単軸絡条体第1類Lを縦走する（やや左傾）。条の間隔は3.5～4㎜。25はⅢ文様帯の体部下半片で、単軸絡条体第1類Lを縦走する（やや左傾）。条の間隔は3.5～4㎜。26はⅢ文様帯の体部片で、外面に単軸絡条体第1類Lが斜位に走る（右傾）。条の間隔は4㎜程度。27はⅢ文様帯の体部片で、単軸絡条体第1類Lを縦走する（やや右傾）。条の間隔は3.5～4㎜。28はⅢ文様帯の体部片で、単軸絡条体第1類Lが斜位（左傾）に走る。条の間隔は4㎜程度。29はⅢ文様帯の体部片で、単軸絡条体第1類Lを縦走する。条の間隔は3.5～4㎜。30はⅢ文様帯の体部片で、単軸絡条体第1類Lが縦走する（やや左傾）。条の間隔は3.5㎜程度。外面ススコゲ微量付着。31はⅢ文様帯の体部片で、単軸絡条体第1類Lを縦走する（やや左傾）。条の間隔は3～4㎜程度。32はⅢ文様帯の体部片で、単軸絡条体第1類Lが縦走する（やや左傾）。条の間隔は3.5㎜程度。外面にススコゲ微量付着。33は底部片で、底面が丸底風にやや外湾する。底部側縁が外

側にやや張り出す形状である。内外面ナデ調整。34はⅢａ文様帯の体部片で、RLを軸にLを２条付加した附加条縄文を施文しており、体部施文との関係から羽状構成となる。（北田）

2　土師器・須恵器

２点を掲載した。いずれも調査区東側表採である。45は、土師器球胴甕の口縁部片である。体部上半に最大径を持ち、口縁部やや外傾しながら直立気味に立ち上がる形状で、肩部に明瞭な段を有する。内外面とも横位ナデ調整で仕上げられる。８世紀の奈良時代に位置付けられる。46は、須恵器長頸瓶かの体部下半片とみられる。無調整で、外面に自然釉が認められる。９世紀代の平安時代前期と考えられる。（北田）

3　石　　器

６点を掲載した。６は、SI01埋土下位出土の石皿である。凝灰岩製で、上面の一辺以外に縁が付けられている。上面には作業による敲打痕と擦痕が認められる。下面にも擦痕が認められるが、作業時や移動時に床面との摩擦によって生じた痕跡と考えられる。15は、SI02埋土出土の石匙である。頁岩製の縦型で、摘まみ部と刃部の幅がほぼ同じで端部が尖頭状を呈する。35は、SK03埋土中位出土の石鏃である。基部の両側縁に抉りを施しており、アメリカ式石鏃と考えられる。頁岩製で、基部の抉り付近までアスファルトとみられる黒色付着物が両面に認められる。先端部がやや丸みを帯びて摩耗していることから、錐として再利用された可能性もある。伴出土器から、弥生時代後期中葉に位置付けられる。36は、SK03埋土中位出土の石鏃である。頁岩製の有茎石鏃で、中柄部分の基部を欠損している。35と同じ遺構から出土していることから、同じく弥生時代後期中葉と考えられる。37は、SK03埋土出土のスクレイパーである。頁岩製の縦長剥片を素材としており、正面に自然面を残している。両側縁と端部の両面に二次加工を施しており、端部は使用によって摩耗している。このことから、掻く作業に用いられたと想定される。35・36と同じ遺構から出土しており、弥生時代後期中葉と考えられる。47は、郭２（調査区東部）表土出土の石鏃である。頁岩製の無茎凹基石鏃で、先端部と両基部の端部分を欠損している。両面にクレーター状の焼けはじけ痕が認められる。縄文時代前期～中期に多い形態であることから、この時期に求められる。（北田）

4　陶　磁　器

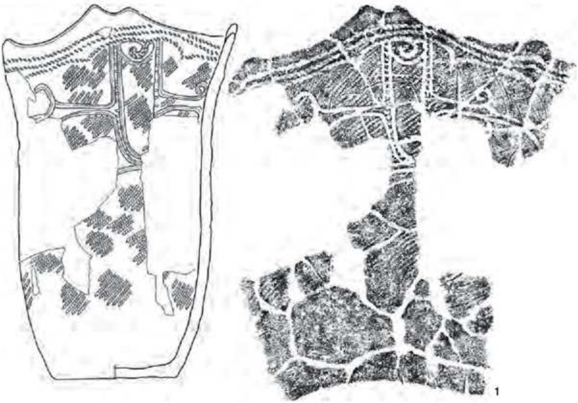
２点を図示した。48は肥前産磁器染付碗である。18世紀末から19世紀前半に製作されたものである。外面には笹の文様などが施される。重量は5.8ｇである。調査区東部で表土中から採集された。49は衛生陶器（便器）である。陶器質の胎土に白化粧を塗り染付を施した「陶胎染付」である。陶胎染付であることと、白化粧、染付の色調から平清水窯（山形県）の製品と想定される。「金かくし」が丸形で「小判型」の大便器である。時期は20世紀第１四半期頃の製作と推測する。ほぼ無傷の完形品で重量は7,400ｇを測る。調査区内外には昭和40年代から現代にかけての不法投棄物が顕著にみられたが、本衛生陶器も近年になって捨てられたものと推測される。（羽柴）

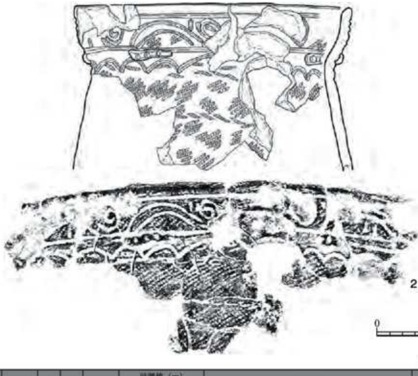
5　銭　　貨

1点を掲載した。49は、一銭青銅貨である。大正5年（1916）から昭和13年（1938）まで発行された青銅貨で、表面に桐紋が入ることから「桐一銭青銅貨」と呼ばれる。表面に「大日本　大正十年（1921）」と桐紋、裏面に「一銭」が認められる。（北田）

参考文献

中野幸大 2008「大木7a～8b式土器」『総覧縄文土器』p352-359（株）アム・プロモーション
岩手県教委 1981『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅸ』岩手県文化財調査報告書第58集
石川日出志 2001「弥生後期湯舟沢式土器の系譜と広がり」『北越考古学』第12号 北越考古学研究会
佐藤由紀男編 2015『弥生土器』考古調査ハンドブック12　ニューサイエンス社

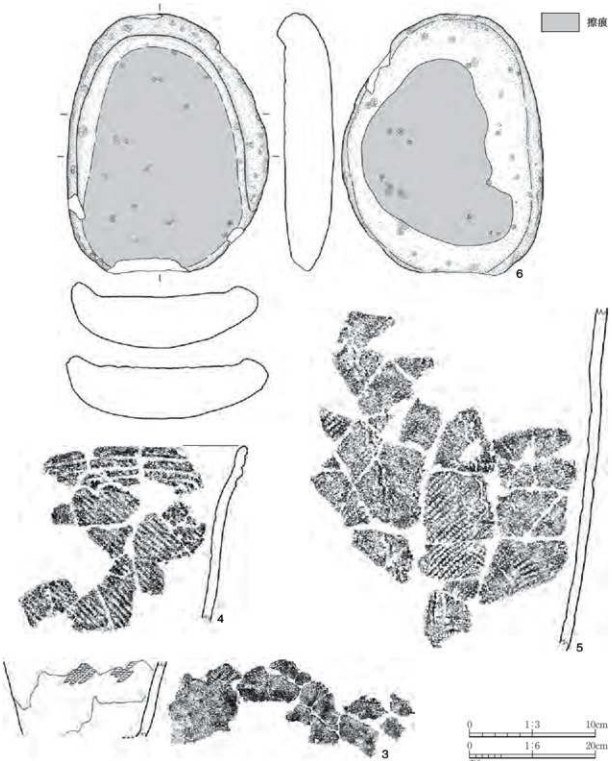

1


2

計測値欄内　（　）：残存値

番号	遺構名・出土層位	種別	分類	器種	残存部位	計測値（cm）			外面調整	内面調整	備考
						口径	底径	器高			
1	SI01・覆土	縄文土器	ⅠA	深鉢	口縁部～底部	18.5	9.7	29.9	2個一対の波頂部を持つ大波状縁、縄圧痕LR2条、縄圧痕LRによる渦巻文、胴央部の横位平行沈線による文様帯区画内の波頂部下に縦位U字状区画、波底部下に渦巻文を伴う長方形区画、押引文充填、単節LR横位、底面ナデ	横位ナデ	縄文時代中期前葉
2	SI01・覆土下位～床面　石皿の隣	縄文土器	ⅠA	深鉢	口縁部～胴部上半	(22.0)	–	(13.2)	平縁、平行沈線によって区画された狭い口縁部文様帯内に沈線による重弧線文と渦巻文、縦位刻目文を施文、指頭押圧のある粘土貼付、頸部に連弧線文、単節LR横位、結節回転Z字状	横位ナデ	縄文時代中期前葉

第49図　出土遺物（1）

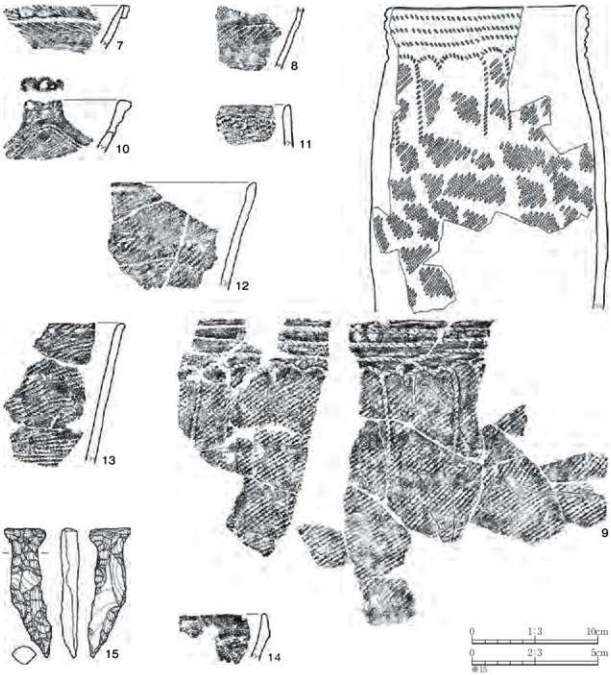


計測値欄内（　）：残存値

番号	遺構名・出土層位	種別	分類	器種	残存部位	計測値（cm） 口径	底径	器高	外面調整	内面調整	備考
3	S101・埋土	縄文土器	1A	深鉢	胴部下半	－	－	(6.1)	単節LR斜位	横位ナデ	縄文時代中期前葉
4	S101・埋土	縄文土器	1A	深鉢	口縁部～胴部上半	－	－	(14.0)	平縄、口縁部に平行する横位沈線3条、頸部に沈線による連弧縄文、単節LR縦位	横位ナデ	縄文時代中期前葉
5	S101・埋土	縄文土器	1A	深鉢	胴部	－	－	(27.1)	単節LR縦位、結節回転文Z字状	横位ナデ	縄文時代中期前葉

番号	遺構名・出土層位	種別	器種	石質	産地	計測値（cm） 長さ	幅	厚さ	重量（g）	備考
6	S101・埋土下位	石器	石皿	凝灰岩	奥羽山脈	(41.60)	32.20	10.50	14,000	縁あり　正裏面擦痕あり

第50図　出土遺物（2）

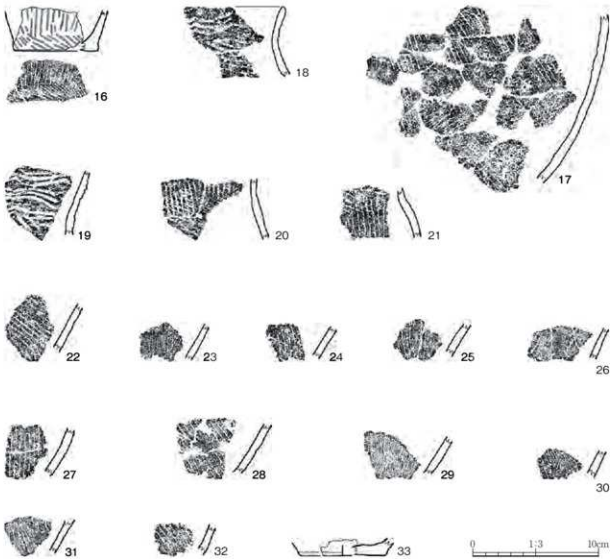


計測値欄内　（　）：残存値・（　）：推定値

番号	遺構名・出土層位	種別	分類	器種	残存部位	計測値（cm）			外面調整	内面調整	備考
						口径	底径	器高			
7	SI02・埋土	弥生土器	ⅡB	甕	口縁部	－	－	(3.5)	附加条RL＋L斜位、折り返し口縁	横位ナデ	弥生時代後期中葉
8	SI02・検出	弥生土器	ⅡB	甕	頭部	－	－	(4.9)	附加条LR＋R斜位	横位ナデ	弥生時代後期中葉
9	SI02・埋土	縄文土器	ⅠA	深鉢	口縁部～胴部	(15.5)	－	(24.4)	平縁、口縁部に平行する縄圧痕LR3条、頭部に圧痕による連弧縄文と波底部から垂下する縦位の圧痕、単節LR横位	横位ナデ後に縦位の細いミガキ	縄文時代中期前葉
10	SI02・埋土	縄文土器	ⅠA	深鉢	口縁部	－	－	(4.2)	大波状縁、平行する縄圧痕LR、単節LR横位・斜位	横位ナデ	縄文時代中期前葉
11	SI02・埋土	縄文土器	ⅠA	深鉢	口縁部	－	－	(3.5)	平縁、単節LR斜位	横位ナデ	縄文時代中期前葉
12	SI02・埋土	縄文土器	ⅠA	深鉢	口縁部	－	－	(8.6)	平縁、単節LR斜位	横位ナデ	縄文時代中期前葉
13	SI02・埋土	縄文土器	ⅠA	深鉢	口縁部～胴部	－	－	(11.3)	平縁、単節LR斜位～横位	横位ナデ	縄文時代中期前葉
14	SI02・検出	縄文土器	ⅠA	浅鉢	口縁部	－	－	(3.8)	平縁、突起か、口縁無文帯、頭部に横位の押引沈線文	横位ミガキ	縄文時代中期前葉

番号	遺構名・出土層位	種別	器種	石質	産地	計測値（cm）			重量（g）	備考
						長さ	幅	厚さ		
15	SI02・埋土	石器	石匙	頁岩	奥羽山脈	5.17	1.68	0.76	5.5	縦型

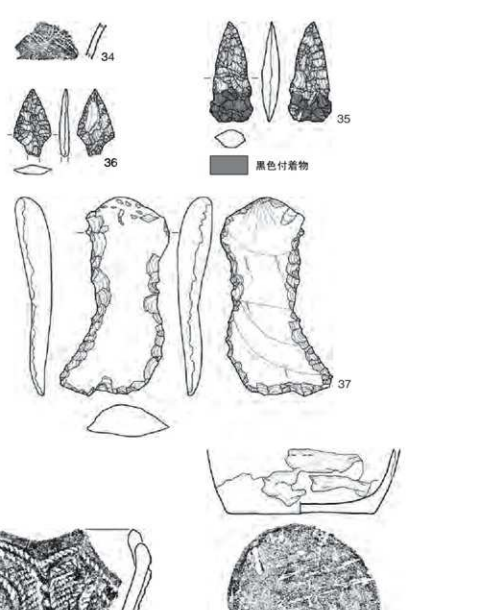
第51図　出土遺物（3）



計測値欄内（　）：残存値・（　）：推定値

番号	遺構名・出土層位	種別	分類	器種	残存部位	計測値（cm）			外面調整	内面調整	備考
						口径	底径	器高			
16	SI03・埋土	弥生土器	ⅡB	甕	底部	－	(6.6)	(3.5)	附加条RL＋L縦位、底部斜縦斜位、底面ナデ	横位ナデ	弥生時代後期中葉
17	SI03・埋土	弥生土器	ⅡB	甕	体部	－	－	(13.4)	単軸絡条体第1類L斜位、一部横位	横位ナデ	外面ススコゲ少量、弥生時代後期中葉
18	SI03・埋土	弥生土器	ⅡB	甕	口縁部～頸部	－	－	(5.6)	重鋸南文、附加条LR＋R斜位	横位ナデ	弥生時代後期中葉
19	SI03・埋土	弥生土器	ⅡB	甕	体部	－	－	(5.2)	対向重連弧文を施文	横位ナデ	外面ススコゲ微量、弥生時代後期中葉
20	SI03・埋土	弥生土器	ⅡB	甕	体部	－	－	(4.9)	羽状構成の附加条RL＋L斜位	横位ナデ	弥生時代後期中葉
21	SI03・埋土	弥生土器	ⅡB	甕	体部	－	－	(3.6)	羽状構成の附加条RL＋L斜位	横位ナデ	内外面ススコゲ微量、弥生時代後期中葉
22	SI03・埋土	弥生土器	ⅡB	甕	体部	－	－	(3.8)	単軸絡条体第1類L斜位	縦位ナデ	弥生時代後期中葉
23	SI03・埋土	弥生土器	ⅡB	甕	体部	－	－	(2.8)	単軸絡条体第1類L縦位	斜位ナデ	外面ススコゲ微量、弥生時代後期中葉
24	SI03・埋土	弥生土器	ⅡB	甕	体部	－	－	(2.5)	単軸絡条体第1類L縦位	縦位ナデ	弥生時代後期中葉
25	SI03・埋土	弥生土器	ⅡB	甕	体部	－	－	(2.7)	単軸絡条体第1類L縦位	縦位ナデ	弥生時代後期中葉
26	SI03・埋土	弥生土器	ⅡB	甕	体部	－	－	(2.4)	単軸絡条体第1類L縦位	縦位ナデ	弥生時代後期中葉
27	SI03・埋土	弥生土器	ⅡB	甕	体部	－	－	(3.7)	単軸絡条体第1類L縦位	横位ナデ	弥生時代後期中葉
28	SI03・埋土	弥生土器	ⅡB	甕	体部	－	－	(4.0)	単軸絡条体第1類L縦位	縦位ナデ	弥生時代後期中葉
29	SI03・埋土	弥生土器	ⅡB	甕	体部	－	－	(3.0)	単軸絡条体第1類L縦位	斜位ナデ	弥生時代後期中葉
30	SI03・埋土	弥生土器	ⅡB	甕	体部	－	－	(2.2)	単軸絡条体第1類L縦位	斜位ナデ	弥生時代後期中葉
31	SI03・埋土	弥生土器	ⅡB	甕	体部	－	－	(2.5)	単軸絡条体第1類L縦位	斜位ナデ	外面ススコゲ微量、弥生時代後期中葉
32	SI03・埋土	弥生土器	ⅡB	甕	体部	－	－	(2.2)	単軸絡条体第1類L縦位	斜位ナデ	外面ススコゲ微量、弥生時代後期中葉
33	SI03・埋土	弥生土器	ⅡB	甕	底部	－	(6.8)	(1.4)	底面ナデ	横位ナデ	弥生時代後期中葉

第52図　出土遺物（4）

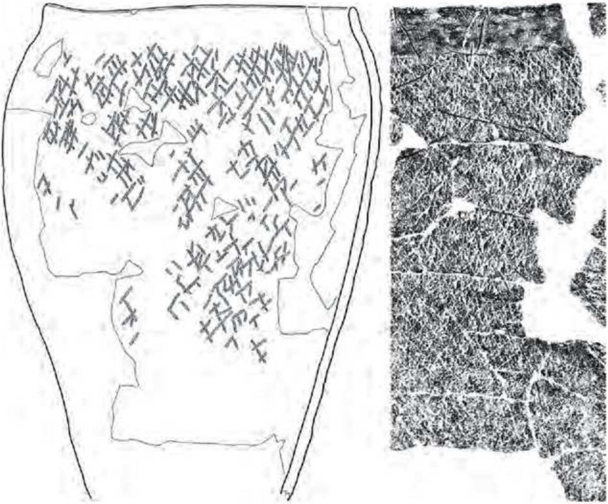


計測値欄内（ ）：残存値

番号	遺構名・出土層位	種別	器種	石質	産地	計測値（cm） 長さ	幅	厚さ	重量（g）	備考
35	SK03・埋土中位	石器	石鏃	頁岩	奥羽山脈	3.94	1.70	0.70	3.6	アメリカ式石鏃　端部両面に黒色付着物あり
36	SK03・埋土中位	石器	石鏃	頁岩	奥羽山脈	(2.67)	1.50	0.43	1.2	有基　基部欠損
37	SK03・埋土	石器	スクレイパー	頁岩	奥羽山脈	7.87	3.31	1.25	30.4	端部に使用による摩耗痕あり

番号	遺構名・出土層位	種別	分類	器種	残存部位	計測値（cm） 口径	底径	器高	外面調整	内面調整	備考
34	SK03・埋土	弥生土器	ⅡB	甕	体部	−	−	(2.9)	羽状構成の附加条LL＋L斜位	横位ナデ	外面スス・コゲ顕著、弥生時代後期中葉
38	SK706・埋土	縄文土器	1A	深鉢	口縁部	−	−	(11.7)	2個一対の頭部を持つ大波状縁、Y字状垂下隆帯、隆線による対弧線文、縄圧痕LR、LR横位	横位ナデ	縄文時代中期前葉
39	SK706単付近・埋土	縄文土器	1A	深鉢	底部	−	11.8	(5.2)	底面は笹葉痕をナデ消している	ナデ、指頭痕	縄文時代中期前葉

第53図　出土遺物（5）



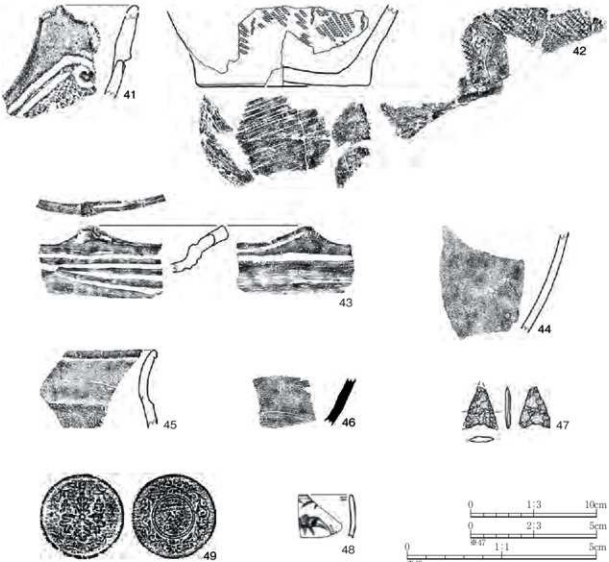
40

0　1:3　10cm

計測値欄内　(　)：残存値

番号	遺構名・出土層位	種別	分類	器種	残存部位	計測値（cm）			外面調整	内面調整	備考
						口径	底径	器高			
40	SD01 土器の北端部（1C14付近）	縄文土器	1B	深鉢	口縁部～胴部下半	24.5	–	(39.4)	平縁，単軸絡条体第5類R縦位	横位ナデ	縄文時代後期初頭～前葉

第54図　出土遺物（6）



計測値欄内 （ ）：残存値・〈 〉：推定値

番号	遺構名・出土層位	種別	分類	器種	残存部位	計測値（cm）			外面調整	内面調整	備考
						口径	底径	器高			
41	1 A8k付近・表採	縄文土器	1 A	深鉢	口縁部	－	－	(7.3)	2個一対の頂部を持つ大波状縁、平行沈線、渦巻文、LR横位	横位ナデ	縄文時代中期前葉
42	SD03（南）の西土層のすから・旧表土	縄文土器	1 A	深鉢	胴部下半～底部	－	(13.5)	(6.5)	胴部は単節LR斜位・結節縦回転、底面は葉葉痕有り	縦位ナデ	縄文時代中期前葉
43	トレンチ121（1 A130）・埋土	弥生土	ⅡA	台付浅鉢	口縁部	－	－	(3.7)	変形工字文	横位沈線、横位ミガキ	弥生時代前期
44	SKT05・検出	弥生土器	ⅡA	甕	体部	－	－	(7.6)	無文（縦位ナデ）	横位ナデ	弥生時代前期

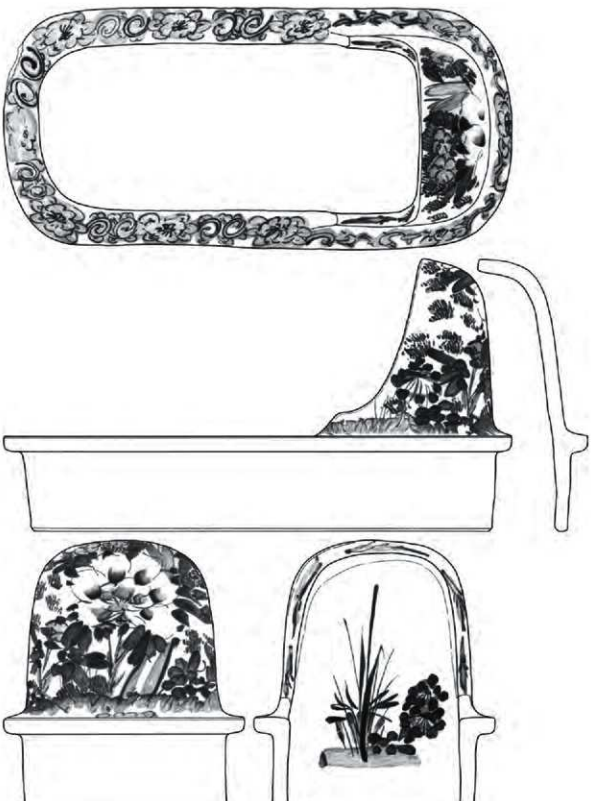
番号	遺構名・出土層位	種別	器種	残存部位	計測値（cm）			外面調整	内面調整	備考
					口径	底径	器高			
45	調査区東側・表採	土師器	球胴甕	口縁部	－	－	(6.2)	横位ナデ	横位ナデ	輪積み整形後にロクロ成形、8世紀代か
46	調査区東側・表採	須恵器	長頸瓶	体部下半	－	－	(3.7)	無調整	無調整	ロクロ成形、9世紀代

番号	遺構名・出土層位	種別	器種	石質	産地	計測値（cm）			重量（g）	備考
						長さ	幅	厚さ		
47	調査区東部・表採	石器	石鏃	頁岩	奥羽山脈	(1.67)	(1.71)	0.23	0.4	無茎凹基　基・端部欠損　焼けはじけあり

番号	遺構名・出土層位	種別	器種	計測値（cm）			外面調整	内面調整	備考
				口径	底径	器高			
48	調査区東側・表採	磁器	碗	－	－	(3.5)	並文・圏線	圏線	肥前産染付　18世紀末～19世紀前半

番号	遺構名・出土層位	種別	種類	初鋳年	計測値（cm）		重量（g）	備考
					外径	厚さ		
49	SD03南側・堀内部表土	銭貨	一銭青銅貨	大正10年（1921）	2.31	0.14	3.4	表面大日本大正十年・桐紋　裏面一銭

第55図　出土遺物（7）



番号	遺構名・出土層位	種別	器種	計測値（cm）			重量（g）	調整	備考
				長さ	幅	高さ			
50	表採	陶磁器	衆生陶器（便器）	53.7	25.4	28.6	7,400	白化粧・染付	平清水窯　陶砂染付　20世紀第1四半期頃

第56図　出土遺物（8）

Ⅵ 分析・鑑定

1 放射性炭素年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本分析調査では、岩手県北上市二子城跡（岩手県北上市二子町字十文字ほか所在）から出土した、弥生時代の土器に付着する炭化物と、中世～近世とされる炭窯から検出された炭化材について、放射性炭素年代測定を実施する。

（1） 試　　料

土器付着試料は、SI03埋土から出土した弥生時代後期と思われる土器（登録番号25）付着炭化物（試料No.1）、土器（登録番号29）付着炭化物（試料No.2）の2点である。試料No.2は分析試料が非常に少ない（5mg程度）。

炭化材試料は、中世～近世とされる炭窯1埋土下部から出土した1-1（試料No.3）、1-2（試料No.4）と、炭窯2埋土下部から出土した2-1（試料No.5）、2-2（試料No.6）の4点である。炭化材試料の樹種はいずれもコナラ亜属コナラ節である。

以上6点について分析を実施する。

（2） 分 析 方 法

土器付着炭化物試料は、実体顕微鏡で観察し、炭化物以外の不純物をできる限り取り除く。木材は、双眼実体顕微鏡で観察しながら、不純物が付着した周囲を削り取り、必要量（50mg）に調整する。試料は塩酸（HCl）や水酸化ナトリウム（NaOH）を用いて、試料内部の汚染物質を化学的に除去する［酸－アルカリ－酸（AAA）処理］。その後超純水で中性になるまで洗浄し、乾燥させる。なお、試料No.1は試料が化学的に脆弱で、炭素の損耗が激しいため、アルカリの濃度を薄くした（AaAと記載）。試料No.2は試料が少なく、化学処理によって測定に必要な炭素が得られなくなる可能性が高いので、前処理を行っていない。他の4点は通常の濃度（塩酸、水酸化ナトリウム共に1mol/L）で処理を行う（AAAと記載）。

上記した処理後の試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化（鉄を触媒とし水素で還元する）はElementar社のvario ISOTOPE cubeとIonplus社のAge3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径1mmの孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置を用いて、^{14}Cの計数、^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C濃度（^{14}C/^{12}C）を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局（NIST）から提供される標準試料（HOX-Ⅱ）、国際原子力機関から提供される標準試料（IAEA-C6等）、バックグラウンド試料（IAEA-C1）の測定も行う。

δ^{13}C は試料炭素の^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma：68%）に相当する年代である。測定

年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う（Stuiver & Polach,1977）。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。

暦年較正は、OxCal4.3（Bronk,2009）を使用し、1年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値および北半球の大気中炭素に由来する較正曲線（Intcal20：Reimer et al, 2020）を用いる。暦年較正結果は1σ・2σ（1σは統計的に真の値が68.2%の確率で存在する範囲、2σは真の値が95.4%の確率で存在する範囲）の値を示す。

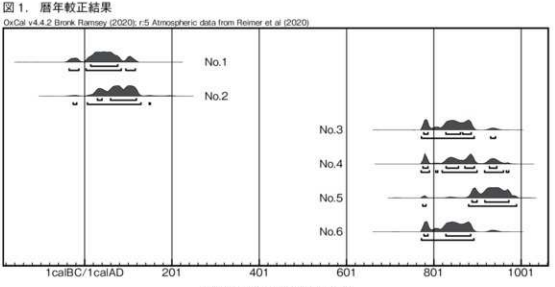
（3）結　　果

結果を表1、図1に示す。同位体補正を行った結果は、SI03 25（試料No.1）が1,975 ± 20BP、SI03 29（試料No.2）が1,950 ± 20BP、炭窯1-1-1（試料No.3）が1,180 ± 20BP、炭窯1-1-2（試料No.4）が1,165 ± 20BP、炭窯2-2-1（試料No.5）が1,135 ± 20BP、炭窯2-2-2（試料No.6）が1,185 ± 20BPである。

暦年較正は、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5730 ± 40年）を較正することによって、暦年代に近づける手法である。測定誤差2σの暦年代は、試料No.1がcalBC36 ～ AD117、試料No.2がcalBC27 ～ AD151、試料No.3がcalAD772 ～ 942、試料No.4がcalAD772 ～ 972、試料No.5がcalAD775 ～ 990、試料No.6がcalAD772 ～ 893である。

土器付着炭化物は推定年代に近い弥生時代の値が得られている。炭窯については推定年代よりも古く、いずれの試料も9 ～ 10世紀の年代値を示し、平安時代の年代観を示す。

図1．暦年較正結果



引用文献

Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon,51,337-360.

Reimer P., Austin W., Bard E., Bayliss A., Blackwell P., Bronk Ramsey, C., Butzin M., Cheng H., Edwards R., Friedrich M., Grootes P., Guilderson T., Hajdas I., Heaton T., Hogg A., Hughen K., Kromer B., Manning S., Muscheler R., Palmer J., Pearson C., van der Plicht J., Reimer R., Richards D., Scott E., Southon, J. Turney, C. Wacker, L. Adolphi, F. Buentgen U., Capano M., Fahrni S., Fogtmann-Schulz A., Friedrich R., Koehler P., Kudsk S., Miyake F., Olsen J., Reinig F., Sakamoto M., Sookdeo A., & Talamo S.,2020, The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP) . Radiocarbon, 62,1-33.

Stuiver, M., and Polach, H. A.,1977,Discussion Reporting of ^{14}C Data. Radiocarbon ,19, 355-363.

表 1 . 放射性炭素年代測定結果

試料No.	試料名など	方法	補正年代（暦年較正用）BP	δ13C（‰）	暦年較正年代					CodeNo.	
						年代値			確率%		
1	SI03 25 土器付着炭化物	AaA (0.1M)	1975 ± 20 (1975 ± 20)	-24.00 ± 0.38	σ	cal AD 15 – cal AD 77	1936 – 1874 calBP	68.3	YU-12530	pal-13096	
						cal BC 36 – cal BC 14	1985 – 1963 calBP	9.2			
					2σ	cal AD 4 – cal AD 85	1946 – 1866 calBP	75.5			
						cal AD 95 – cal AD 117	1855 – 1834 calBP	10.8			
2	SI03 29 土器付着炭化物	無処理	1950 ± 20 (1948 ± 22)	-21.02 ± 0.46	σ	cal AD 30 – cal AD 41	1920 – 1910 calBP	9.1	YU-12531	pal-13097	
						cal AD 60 – cal AD 119	1890 – 1831 calBP	59.2			
					2σ	cal BC 27 – cal BC 19	1976 – 1968 calBP	0.6			
						cal AD 7 – cal AD 130	1943 – 1821 calBP	94.6			
						cal AD 149 – cal AD 151	1802 – 1799 calBP	0.2			
3	炭窯1 1-1 コナラ節	AAA (1M)	1180 ± 20 (1182 ± 20)	-29.08 ± 0.35	σ	cal AD 778 – cal AD 787	1173 – 1163 calBP	11.2	YU-12532	pal-13098	
						cal AD 828 – cal AD 862	1122 – 1089 calBP	36.4			
						cal AD 867 – cal AD 886	1084 – 1064 calBP	20.7			
					2σ	cal AD 772 – cal AD 893	1178 – 1057 calBP	93.0			
						cal AD 931 – cal AD 942	1020 – 1009 calBP	2.4			
4	炭窯1 1-2 コナラ節	AAA (1M)	1165 ± 20 (1166 ± 21)	-30.48 ± 0.34	σ	cal AD 776 – cal AD 787	1175 – 1163 calBP	11.7	YU-12533	pal-13099	
						cal AD 829 – cal AD 857	1122 – 1093 calBP	22.7			
						cal AD 872 – cal AD 894	1079 – 1057 calBP	22.3			
						cal AD 928 – cal AD 945	1022 – 1006 calBP	11.6			
					2σ	cal AD 772 – cal AD 791	1179 – 1160 calBP	14.5			
						cal AD 805 – cal AD 810	1145 – 1141 calBP	0.6			
						cal AD 820 – cal AD 900	1131 – 1051 calBP	58.8			
						cal AD 917 – cal AD 960	1033 – 990 calBP	20.7			
						cal AD 967 – cal AD 972	984 – 978 calBP	0.9			
5	炭窯2 2-1 コナラ節	AAA (1M)	1135 ± 20 (1134 ± 20)	-27.37 ± 0.36	σ	cal AD 888 – cal AD 900	1062 – 1051 calBP	11.8	YU-12534	pal-13100	
						cal AD 918 – cal AD 973	1033 – 978 calBP	56.5			
					2σ	cal AD 775 – cal AD 783	1175 – 1168 calBP	1.6			
						cal AD 880 – cal AD 990	1070 – 960 calBP	93.8			
6	炭窯2 2-2 コナラ節	AAA (1M)	1185 ± 20 (1184 ± 20)	-28.36 ± 0.35	σ	cal AD 778 – cal AD 787	1172 – 1163 calBP	10.3	YU-12535	pal-13101	
						cal AD 828 – cal AD 885	1122 – 1065 calBP	58.0			
					2σ	cal AD 772 – cal AD 893	1178 – 1058 calBP	95.4			

1）年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用。
2）BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。
3）付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の 68.2%が入る範囲）を年代値に換算した値。
4）AAA は、酸 - アルカリ - 酸処理を示す。AaA は試料が脆弱なため、アルカリの濃度を薄くして処理したことを示す。
5）暦年の計算には、Oxcalv4.4 を使用。
6）暦年の計算には 1 桁目まで示した年代値を使用。
7）較正データーセットは、Intcal20 を使用。
8）較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1 桁目を丸めていない。
9）統計的に真の値が入る確率は、σが 68.2%、2 σが 95.4%である。

Ⅶ まとめと考察

1 調査のまとめ

（1）縄文時代中期前葉以前

逆茂木痕を有する円形の陥し穴状遺構（タイプ①とする）をこの時期に属する遺構と位置付ける。その根拠は、大木７ｂ式期に属する竪穴住居ＳＩ01に、当タイプのＳＫＴ19が切られていることである。該当する陥し穴状遺構はＳＫＴ04、ＳＫＴ06、ＳＫＴ07、ＳＫＴ08、ＳＫＴ09、ＳＫＴ15、ＳＫＴ16、ＳＫＴ17、ＳＫＴ18、ＳＫＴ19がある。

その他、今回検出の陥し穴状土坑には、②溝状のタイプ（ＳＫＴ01、ＳＫＴ02、ＳＫＴ03）。③プランが楕円形で逆茂木痕を有するタイプ（ＳＫＴ13、ＳＫＴ14、ＳＫＴ16）。④開口部のプランが円形で底面のプランが長方形のタイプ（ＳＫＴ10、ＳＫＴ11）。⑤プランが円形で逆茂木痕が無いタイプ（ＳＫＴ05）がある。これらそれぞれの所属時期は明確ではないが、構築場所の共通性から③と④は①と近い時期の陥し穴と推測する。また溝状タイプの②は、これまでの陥し穴状遺構研究の知見から縄文時代中期以降に属する可能性が高いと推測する。そして⑤のタイプは陥し穴であるか、他の用途の土坑であるかの検討も必要である。今回検出の陥し穴状遺構は全てＩＡ区での検出で、尾根頂部からその西北辺に集中して構築されている。尾根西北辺は、傾斜の緩い谷地形の谷頭であり、谷を下って麓の水場へ向かう動物の通路入口に構築された陥し穴群と理解される。

（2） 縄文時代中期前葉

竪穴住居ＳＩ01がこの時期に該当する。出土した縄文土器は大木７ｂ式に相当し、縄文時代中期前半の住居と想定される。尾根頂部の平場の北端部に構築された住居であるが、調査範囲内では本住居と同時期の住居は検出されておらず、疎らな住居配置の集落、又は単体のみで営まれた住居と推測される。ＳＩ01からは土器の他、石皿が出土しており、所属時期の明らかな遺物として良好な資料となる。また、周辺からは大木７ｂ式の土器が出土しているが、その多くはＳＩ01の営みに由来すると推測される。

（3） 縄文時代後期初頭

調査区東側のＩＣ14ｈ付近で、門前式に相当する深鉢型土器（掲載番号40）が出土している。この土器は底部を欠くが他の部位は概ね残存しており、横倒しの状態で中世の堀ＳＤ01の土塁の下から出土した。部位の揃った土器であり、何らかの遺構に伴う可能性が考えられたが、確認することはできなかった。

（4） 弥生時代前期

調査区西側のＩＡ13ｆで、弥生時代前期の台付浅鉢片（掲載番号43）が出土している。変形工字文が施される口縁部片である。関連する遺構は検出されなかった。また掲載番号44は無文の土器片であるがこの時期の甕体部片と考えられる。

（5）　弥生時代後期

ＩＡ区の尾根頂部で、弥生時代後期の集落が検出されている。集落を構成する遺構は竪穴住居２棟（ＳＩ02、ＳＩ03）と墓壙と想定される土坑ＳＫ03である。これらの遺構に伴う弥生土器は「湯舟沢式」に相当し、弥生時代後期前～中葉の集落と位置付けられる。ＳＩ02、ＳＩ03は壁が垂直に立ち上がらない皿状で地床炉を有するという構造で、これまでに知られている弥生時代後期の住居形態にあてはまる。墓壙と想定されるＳＫ03からは石鏃２点とスクレイパー１点が出土しており副葬品と解釈される。墓壙の形態と副葬品の在り方は、同時期の北海道の墓壙と共通する。ＳＩ03出土の土器片２点（掲載番号17・掲載番号21）に付着した炭化物について放射性炭素14Ｃ年代測定（ＡＭＳ法）をおこなった。結果は暦年較正年代で掲載番号17がＡＤ４～ＡＤ85（75.5％）、掲載番号21がＡＤ７～ＡＤ130（94.6％）であった。この測定結果は、本遺跡の弥生時代後期集落の年代のみならず、東北地方北部の弥生時代後期の実年代確定に重要な資料となるものである。

（6）　奈良時代頃（８世紀頃）

調査区東側で、８世紀代と推測される土師器甕片（掲載番号45）が一片表採された。小破片で判然としないが、長胴甕ではなく球胴甕と推測される。何らかの要因で周辺地域から混入したものと推測される。

（7）　平安時代（９世紀頃）

調査区西側の大グリッドＩＡ区の尾根頂部で２基の炭窯が検出された。出土した炭化材の放射性炭素年代測定で８世紀末から９世紀末に属するものと位置付けられる。炭窯01と炭窯02の形態、規模は近似しており、いずれも伏焼きの炭窯と想定される。出土した炭化材はいずれもコナラと鑑定されている。また、炭窯02に近接するＳＫ04、ＳＫ05から炭化材、火山灰？が出土しており、炭窯２との関連が考えられる。どちらも炭窯の構築土、あるいは伏焼の土を得るために掘った穴と推測される。また、火山灰？が十和田ａ降下火山灰であれば、炭窯02の年代観と整合性がある。

（8）　中　　世

中世城館二子城を構成すると考えられる遺構である。堀ＳＤ01、ＳＤ02、ＳＤ03と溝ＳＤ04が該当する。堀ＳＤ03は二子城全体の西側を画する堀と推測される。今回の調査区では南北に百数十ｍの長さを調査したが、調査区外へも連続することが現地表面の痕跡から見て取れる。

また、堀ＳＤ01、ＳＤ02は二子城西辺を画するＳＤ03よりも城館本体寄りの東側に位置するが、通常の郭を画する堀とは解釈できず、城館の中核部とは一線を画する城館の外縁部を分割する目的の堀と推測される。また溝ＳＤ04は堀ＳＤ01で閉塞される空間をさらに分断する柵、塀の痕跡と推測される。また今回の調査で、中世城館の時期に属する遺物は出土しなかった。

（9）　近世～現代

掲載番号48は18世紀後半から19世紀初頭に属する肥前産の染付碗である。近世に属する遺物はこの１点のみである。また、掲載番号49の大正10年の一銭青銅貨は堀ＳＤ03の堀内部の表土から出土しており、大正十年頃にも堀が窪んだ状態であったことを示す。また調査区全域には昭和50年代から現代の廃棄物が多量にあった。これらは埋蔵文化財としては取り扱わなかったが、掲載番号

50の衛生陶器のみは、窯業史の一端を語る資料と考え掲載した。製品は20世紀初め頃の平清水窯産と想定されるが投棄されたのはごく近年と思われる。　（以上、羽柴）

2　二子城に関する史料の整理

（1）二子城に関わる地点等の名称について

二子城内の施設に関わる記述が多く出てくる史料は『和賀稗貫郷村誌』が初めてであるが、それ以降の史料中に出てくる地名や地点は一様ではなく、施設の立地を考える上で一部に混乱を生じさせている。ここではそれぞれの地名について、各史料の表記をまとめ、その変遷を辿るとともに、位置の解釈について再検討を加えてみたい。使用した史料は『南部根元記』、『奥羽永慶軍記』、『和賀稗貫郷村志』、『邦内郷村志』、『二子物語』、『二子村誌』、『和賀郡誌』、『飛勢城物語』等である。史料の年代、編著者、内容等については第4表 二子城にかかる史料一覧に示した。

ア.「二子城」に関する記述

名称	地点についての記述	出典
和加	江戸中期・寛保年間（1741～44）伊藤祐清・円子記『宝輪類聚』に記載。「和加」は二子城を指すか。	「南部信直書状写」『宝輪類聚』所収
和賀	『盛岡南部家文書』二子関係に登場する「和賀」は二子城を指すか。	「浅野長吉書状」『盛岡南部家文書』所収
和賀	『伊達家文書』二子関係に登場する「和賀」は二子城を指すか。	「遠生氏郷書状」『伊達家文書』所収
二子	「二子　平城破　南部主馬持分」	「南部大膳大夫分国之内諸城破却書上之事」『門老遺事』所収
二子城	「江刺之面々二子城警固ヲ致ス」	「稗貫状」『門老遺事』所収
二子城	「和賀家ノ次第：…建久二年(1191)下向二子城ニ住ス…」	『奥南落穂集』
本所	「一揆の輩何も本所へ御立帰りて暫く安堵の思をなし居たり。」	『南部根元記』
二子ノ城	「浅野最上ハ引分レ相去鬼柳ヨリ打入テ二子ノ城ヲソ巻ニケル」	『奥羽永慶軍記』
二子城	「…其後復二子城ヲ築キ移ル是亦年月ヲ記サズ」	『和賀稗貫郷村志』
二子城	「…其後復二子城墨居住。」	『邦内郷村志』
二子城	「二子城亡落ハ天正十八庚寅年也。」	『二子物語』
二子城	「天正十八年十月急に二子城を襲ふ。守将後藤半七支へずして鳥谷ケ崎に走る」	『二子村誌』
二子城	「面して二子城は一時長政の臣後藤半七之を預りしが…」	『和賀郡誌』

イ．「二子森・飛驒森」に関する記述

名称	地点についての記述	出典
二子森・飛驒森	「二子森（飛驒森）「古之ヲ飛驒森ト謂　昔領主和賀蔭摩守旧舘東森ノ下ニ在」	『和賀稗貫郷村志』
二子森・飛驒森	「二子森（飛驒森）「古飛驒森謂　昔領主和賀蔭摩守旧舘東森下在」	『邦内郷村志』
飛勢城	「此八幡山ト申ハ和賀之古城飛勢城ト申テ天守建候跡有。」（※八幡山＝飛勢城天守跡）	『二子物語』
二子山・二子森・飛勢森（飛瀬・飛驒・飛長谷などとも書く）	「村の北辺に馬耳をなせる丘陵先づ二子山・二子森等の名称を起し、やがて村名となれるものなるべし。」「多田忠明更木より移り二子東ノ森に築きて居城とせり。今村社を祀れる飛勢森は其城址なり。」	『和賀郡誌』
飛勢森・二子森	「里人は八幡山と云うが、此の八幡のある高台は即ち飛勢森であり、二子森と呼ぶ場合はこれが東の森で、西裏に聳える秋葉山が即ち西の森である。」（※八幡山＝飛勢森）	『飛勢城物語』

ウ．「八幡山」に関する記述

名称	地点についての記述	出典
東森	「古之ヲ飛驒森ト謂　昔領主和賀蔭摩守旧舘東森ノ下ニ在」（※立地環境から東森が現在の八幡山に当たると考えられる）	『和賀稗貫郷村志』
東森	「古飛驒森謂　昔領主和賀蔭摩守旧舘東森下在」（※同上）	『邦内郷村志』
東之山・八幡山	「東之山ニハ八幡宮城内ニて和賀氏氏神也」「此八幡山ト申ハ和賀之古城飛勢城ト申テ天守建候跡有」	『二子物語』
二子東の森・飛驒ケ森・八幡山	（二子東の森）「飛驒ケ森と云ふ、今は八幡山の名治し、和賀家の本城、飛驒ケ城の跡なり。」	『二子村誌』
二子東ノ森	「村の北辺に馬耳をなせる丘陵先づ二子山・二子森等の名称を起し、やがて村名となれるものなるべし。」「多田忠明更木より移り二子東ノ森に築きて居城とせり。今村社を祀れる飛勢森は其城址なり。」	『和賀郡誌』
八幡山・飛勢森	「里人は八幡山と云うが、此の八幡のある高台は即ち飛勢森であり、二子森と呼ぶ場合はこれが東の森で、西裏に聳える秋葉山が即ち西の森である。」	『飛勢城物語』

エ．「秋葉山」に関する記述

名称	地点についての記述	出典
二子ノ西森	永明寺跡の説明に、「二子ノ西森ノ東南下」とある。（※立地環境から西森が現在の秋葉山に当たると考えられる）	『和賀稗貫郷村志』
二子西森	永明寺跡の説明に、「二子西森東南下」とある。（※同上）	『邦内郷村志』
西之山・愛宕山	「西之山ハ和賀時代之時愛宕堂建給ふ所也。今は愛宕山江秋葉堂建也。」	『二子物語』
二子西の森・秋葉山	（二子西の森）今秋葉山といふ、和賀時代には二子城鎮守として、愛宕堂建立の地なりと	『二子村誌』
秋葉山・西の森	「里人は八幡山と云うが、此の八幡のある高台は即ち飛勢森であり、二子森と呼ぶ場合はこれが東の森で、西裏に聳える秋葉山が即ち西の森である。」「八幡山の後にそば立つ秋葉山は和賀氏在城の折愛宕堂のあった処であるが、和賀氏没落後、これを他にうつし、今は鎮守の神として秋葉神社をまつって居る。」	『飛勢城物語』

オ．「一ノ森・壱ツ森・一つ森」に関する記述

名称	地点についての記述	出典
馬場野ノ南ナル高キ森	「主馬介二子ノ城ニ着ニケリ寄手ハ馬場野ノ南ナル高キ森ニ勢ヲ引上タリ」（※立地環境から一ノ森に当たると考えられる）	『奥羽永慶軍記』
一ノ森	「一ノ森ト云其北梺ニ小沢有　之ヲ内膳沢ト云」	『和賀稗貫郷村志』
一森	「一森其北梺小沢有　之内膳沢云」	『邦内郷村志』
壱ツ森	「壱ツ森ト申ハ和賀時代に物見ケ崎ト申也」	『二子物語』
一つ森・物見ケ崎	（一つ森）「和賀時代には、物見ケ崎と称せり（二子物語に拠る）」	『二子村誌』
一つ森・物見ケ崎	「藍物館の北にある森が一つ森である。此処は今金刀比羅宮がまつられているので、里人はこんぴら山と呼んでいるが、飛騨城時代は、物見ケ崎と呼んだ。」「八幡の天守台を物見ケ崎と呼ぶ人があるが、これは二子村誌の著者のいうように誤で、やはり二子物語のいう一つ森を物見ケ崎と呼ぶほうがよかろう。」	『飛勢城物語』

カ．「筒井内膳屋敷」に関する記述

名称	地点についての記述	出典
	「筒井内膳カ一子縫殿助カ家アレハ彼カ館ニ入」（※内膳屋敷のことか？）	『奥羽永慶軍記』
筒井内膳やしき	「内膳沢といふ有其上に屋敷の跡有、是其昔和賀の執権筒井内膳やしきの迹なり」	『吾妻むかし物語』
筒井内膳宅	「一ノ森ト云其北梺ニ小沢有　之ヲ内膳沢ト云　沢ノ上北方大屋敷ノ跡有　是往昔筒井内膳宅也ト云」	『和賀稗貫郷村志』
筒井内膳宅地	「一森其北梺小沢有　之内膳沢云　澤上北方大屋敷跡有　是往昔筒井内膳宅地也。」	『邦内郷村志』
筒井内膳之屋舗跡	「内膳沢申ハ、其昔和賀之家臣筒井内膳之屋舗跡有」	『二子物語』
筒井氏の屋敷跡	「和賀家の家臣筒井氏の屋敷跡にして、内膳沢と北上川とを繞らす、村の西北端にて今成田に編入さる、内膳・縫殿・共に和賀家の忠臣たりしなり。主馬忠親の花巻を攻むるに当りては、此屋敷に於いて、幕兵其他の準備をなせりと。」	『二子村誌』
内膳屋敷址	「一つ森と往還をへだてて内膳屋敷址がある。内膳とは、和賀家の家臣筒井内膳のことをいい、慶長五年秋、和賀の一族が花巻城を攻撃する際の準備にあたった場所だと伝えられて居る。」	『飛勢城物語』

キ．「成田藤内」に関する記述

名称	地点についての記述	出典
成田藤内カ館	「近郷ノ地下人馳集テ三百八十餘人袖印合詞ヲソ定メケル右の人数ハ成田藤内カ館ニ在テ其刻限ヲ待居タリ…（中略）…櫻ヨリ九月十三日黄昏ニ打立豊澤川ヲ打越ケリ」	『奥羽永慶軍記』
成田藤内カ館	「八森ヲ後ニアテテ小川ヲ前ニシテ岩田堂ニ陣ヲ張ル寄手行懸ニ成田藤内カ館ヲ焼拂ヒ夫ヨリ岩田堂ニ取掛ル」	『奥羽永慶軍記』
馬場野	「和賀家家臣成田藤内とて八百石取の者の馬場跡なり。藤内は主馬の叔母聟なりしと、慶長の一揆には花巻勢と戦ひし地なり。」	『二子村誌』
岩渡堂館	「内膳堀の北側に成田馬場野がある。その北に成田岩渡堂の八幡の森があり、和賀家家臣で小原姓に属する成田藤内の岩渡堂館がある。」	『飛勢城物語』

ク.「から堀」に関する記述

名称	地点についての記述	出典
から堀	「夫より壱ツ森と申ハ和賀持（時）代に物見ケ崎と申也（物見ケ崎の初現か）。此森之下西ノ方ニから堀有り、是ハ和賀一揆蜂起之節一夜ニ堀候ト言所なり。其時持人足ハ近郷在住之者、家別に拾五歳より六拾余之年迄手足立ツ者ハ不残被召出、勢限りこんかぎりに被為堀候所ト伝承候。勢つきくたびれたる者あれハ、御奉行数人懸廻りあやがり者与被思不物言ニ首を切捨通りけれハ、命を限りなぎさけび掘りける程に、内膳沢より斎藤ケ沢之北迄ニ半塚斗り場所ヲ只一夜之内に堀候と申伝ル也。」	『二子物語』
空濠（からほり）	（空濠）「…此森の西にあり、和賀一揆の時、一夜に掘りしものと云ふ、其時の人夫は、近郷在住の者、家毎に十五才以上六十才以下の手足立つもの悉く召集され、息つぐ暇もなく堀りたり、疲労して怠るものあれば、奉行之を認めて、容赦なく斬首せしかば、悲鳴の声、夜陰に凄く、地獄の様を目のあたり見る心地して、魂も身にそはず、内膳沢より斎藤ケ沢に至る半里内外の地を、只一夜に堀たるなりといふ。」	『二子村誌』
外濠	「天正十九年辛卯三月十三日夜九戸左近将監政實南部家に反す。…南部信直急遽秀吉の救いを乞ふ。秀吉は蒲生氏郷、浅野長政に命じて兵三萬を奥州に進発せしむ。此の大軍を迎撃せんとして和賀義忠は秀吉と一大決戦を覚悟し、之に備ふる為、飛騨城の大修築を行ふ。（註）義忠の修築は特に外濠と塹壕とに於て厳重を極めたるものの如し。外濠は内膳澤（筒井内膳）より齋藤ケ澤（齋藤九郎右衛門）に至る里余に亘るものなり。塹壕は一ツ森、二子ノ森に於て工築せしめ現在も尚其址歴然たり。」	『源姓和賀家家系圖と其考證要録』

ケ.「白鳥館」に関する記述

名称	地点についての記述	出典
旧館・故館	「薩摩守旧館東森ノ下ニ在　是和賀代々ノ居城也云」「故館ノ南涸濠隔テ東通之路有」	『和賀稗貫郷村志』
舊館	（舊館）「是和賀代々居城也」	『邦内郷村志』
古館	「此山（八幡山）の麓ハ古館ト申て和賀殿常々御殿被建玉ふ跡有。」	『二子物語』
古館・白鳥館・御館	（古館）「其東方にあり、今の白鳥館なり、里人御館と称す、和賀氏の常の御殿を建てたる処なり。」	『二子村誌』
古館・御館・白鳥館	「八幡の高台から昭和橋に至る中間、北上川を背にして、古館がある。此処は常御殿の跡といわれるが、要するに平時の本丸というべき箇所である。御館或は白鳥館とも呼ぶ。」	『飛勢城物語』

コ.「文殊堂」・「文珠堂」に関する記述

名称	地点についての記述	出典
文殊堂荒迹	（文殊堂荒迹）「西ノ森ノ南山之先ニ在相伝紫野純蔵主一休和尚之ヲ建其側に暫栖止スト焉」	『和賀稗貫郷村志』
五輪壇文殊堂	「五輪壇文殊堂南今街道の東側に在　昔誰ヲ為テ之を建ト云コト知ラズ　俗伝一休和尚道師ト為リテ之ヲ建　知是和賀領主之ヲ建ルコトヲ又是ヨリ西ノ広野ノ紫野ト云モ亦（また）一休ニ於イテ起哉ト　時俗之疑フ」	『和賀稗貫郷村志』
文珠堂	（文珠堂）「荒迹西ノ森ノ南山之先在相伝紫野純蔵主一休和尚之建其側暫栖止焉」	『邦内郷村志』
文珠院屋敷	「此西之山ハ和賀時代之時、愛宕堂建給ふ所也。今ニ石塔之跡有なり。和賀没落之後、御堂を建置候得共、嵐に吹落ニて今ハ八幡山ノ東成文珠院屋敷ニ文珠堂ト愛宕堂ト被建置ル也。今ハ愛宕山江秋葉堂建也。此山之西南ニ当て一休和尚之文珠堂被立候跡有、今ハ八幡之東文珠院之所江奉移シなり。」	『二子物語』
文珠院址	（文珠院址）「古館の南なり、近年迄愛宕堂ありしが、今は村社の境内に遷し奉れり。此地何人の館なりしか明ならず、或は白鳥館の内かとも思はる、要害の構なり。」	『二子村誌』
文珠堂址	「一休和尚の文珠堂建立の跡、この五輪壇と沢を隔てて、北の高地にありと云へど、其址定かならず、又云ふ文珠堂址は、秋葉山の麓近くにありと。」	『二子村誌』

サ．「御大方屋敷」に関する記述

名称	地点についての記述	出典
御大方屋敷	永明寺の項「山号梅沢山曹洞宗鬼柳正覚寺末寺也寺地ハ御大方屋敷ノ北ニ在」	『和賀稗貫郡村志』
御大方屋敷	永明寺の項「梅沢山曹洞宗鬼柳正覚寺末寺也。寺地御大方屋敷北在」	『邦内郡村志』
御大法坂	「此寺（永明寺）昔シハ更木村梅沢より二子村之森之下タニ移し、今ハ御大法坂の下ニ移テ、去ル故ニ梅沢山永明寺トハ申なり。」	『二子物語』
御台方屋敷（御台所屋敷）・お台方坂	「御台方屋敷は、奥方屋敷なり、後、御蔵場となりし時もあり、此寺徳川氏の中世以後にいたりて祝融の災にあふ。為めに旧時をうかがふに由なし。」「御台所屋敷址なり、白鳥館の東麓にあり、坂路あり、お台方坂といふ、永明寺によせて、お大法と書するは非也。」	『二子村誌』
御台方屋敷	永明寺の項「此のあたりは飛勢城時代の御蔵方屋敷のあった附近で、御台方屋敷に接している。御台方とは奥方をさしているのであろう。」	『飛勢城物語』

シ．「永明寺」に関する記述

名称	地点についての記述	出典
永明寺・旧ノ寺地	「山号梅沢山曹洞宗鬼柳正覚寺末寺也寺地ハ御大方屋敷ノ北ニ在」「其昔永明寺ハ和賀家ノ菩提所而旧ノ寺地ハ二子ノ西森ノ東南下有ト云」	『和賀稗貫郡村志』
永明寺・舊寺地	「梅沢山曹洞宗鬼柳正覚寺末寺也。寺地御大方屋敷北在」「其昔永明寺和賀家菩提所。而舊寺地二子ノ西森東南下有云」	『邦内郡村志』
永明寺古屋敷	「石山之南ニ門前ト言所有、是ハ和賀殿菩提所永明寺古屋敷ト言也。」	『二子物語』
永明寺址	（永明寺址）「八幡・秋葉両丘の間、森合と云う処にあり。其寺門のありし辺、今に門前と称す。」	『二子村誌』
永明寺	（永明寺）「梅沢山と号す、曹洞宗にして、鬼柳正覚寺の末寺なり、（もと天台宗なりしと伝昔、和賀氏の菩提寺にして、初め更木梅の沢にあり、それより二子森の間に移し、今は御台方坂の北に移れるなり。」	『二子村誌』
永明寺	「古盤の東、昭和橋の手前に梅沢山曹洞宗の永明寺がある。永明寺は和賀氏の菩提所で、はじめ更木の梅ケ沢にあった。江戸期に火災に会い、往時をさぐるすべがない。もとは天台宗で、更木から二子森の間の森合に移り、後に現在の場所に移ったと伝える。」	『飛勢城物語』

ス．「遍照寺」に関する記述

名称	地点についての記述	出典
遍照寺	（遍照寺）「山号金剛山真言新規派東森下ニ在　旧城南也　寺ノ上ト小路ト云有　是其昔士家之町也」	『和賀稗貫郡村志』
遍照寺	（遍照寺）「金剛山真言新規流。東森下在旧城南也。寺上ト小路云有。是其昔士家之町也」	『邦内郡村志』
遍照寺之屋鋪跡	「此山（石山）之北に坊館ト申所有、遍照寺之屋鋪跡也。」	『二子物語』
金剛山遍照寺	「夫（文珠院）より又黒岩海道之右之方ニ真言宗金剛山遍照寺、昔し和賀主馬守御祈持寺ニて高野山末寺ト言。今ハ花巻八幡寺末山也。此寺之重物ニハ大取玉、水取玉、たいぞふかへ、こんごふかへのまんだら、七条の袈裟、是ハしまくこふのにしぎなりト言。国光の刀、あかまか石、伽羅木これハ和賀殿奉納ニ而寺之宝物成ル卜言。今ハ焼失へ成ル哉。又時之住寺盗失江成ル哉。今あかまか石ニ伽羅木トにせ刀斗有ト申也。」	『二子物語』
遍照寺屋敷址	（遍照寺屋敷址）「加賀館の北にあり、北上河岸に近し、共に坊館の中にあり。」	『二子村誌』
遍照寺	（遍照寺）「真言新規派に属し、山号は金剛山なり、和賀氏在城の頃は、祈祷寺にて、坊舘にありしといふ、今は花巻八幡寺の末寺なり、此寺には、火取玉・水取玉・胎蔵界金剛界の曼荼羅・七条の袈裟・国光の刀・あかまが石・伽羅木等和賀家奉納の寺宝ありし由なれど今は大抵紛失して惜らず、僅にあかまが石・伽羅木を存するのみ。」	『二子村誌』
遍照寺	「遍照寺は、はじめ新山寺と号して更木村の中宿道場清水の辺にあったが、和賀氏の二子移城にともない、飛勢城内の坊舘に移って正法寺と号した。近世になって寛永年間中興され、遍照寺と号し現在の場所に移った。」	『飛勢城物語』

セ．「宿」に関する記述

名称	地点についての記述	出典
旧宿	（旧宿）「故館ノ東路南北ニ通ニ　其長三町ばかり北ノ方上宿ト号ス」	『和賀稗貫郡村志』
舊宿	（舊宿）「故舘東。路南北通。其長三町可。北方上宿號。」	『邦内郡村志』
宿	「南方から県道を進んで二子の宿にはいるあたりに、県南バスの停留所である大門と云う処がある。此の付近に、飛勢城の大手門があったと云う。」	『飛勢城物語』

ソ．江戸時代後期『二子物語』（1831）以降に現れる呼称

名称	地点についての記述	出典
・坊舘 ・行人塚 ・加賀坂 ・監物坂 ・鶴ケ池 ・亀ケ池 ・八重桜屋敷之跡 ・明楽院（今妙泉院） ・更木村渡船場 ・延妙寺屋敷之跡 ・背谷地 ・五輪塔 ・あみだんぢ ・羽々通 ・斎藤九右衛門屋敷跡 ・斎藤ケ沢 ・渋谷氏の住所成ル所 ・大門	内容は割愛。	『二子物語』
・坊舘 ・力清水 ・行人塚 ・監物舘 ・加賀舘 ・大堤又は庄田堤 ・八重桜屋敷 ・鐘ケ淵 ・妙泉院跡 ・和小路 ・円明寺址 ・上町 ・渋谷、大森 ・築舘 ・内の町 ・大門 ・塚越町 ・背谷地 ・小野寺屋敷 ・薦打場 ・五輪塔 ・御蔵場跡 ・白鳥宮	内容は割愛。	『二子村誌』
・大門址 ・塚越町址 ・背谷地 ・白鳥神社 ・和賀神社 ・あぶみが淵 ・薦打場 ・和小路 ・八幡宮天守台 ・坊舘 ・監物舘 ・庄田堤 ・くつわ清水 ・築舘 ・五輪塔	飛勢城址略図掲載。内容は割愛。	『飛勢城物語』

（2）各史料の比較から読み取れること

上記の表から読み取れることを、以下にまとめる。

ア.「二子城」に関する記述

二子城の名称は『門老遺事』「稗貫状」の中の「江刺之面々二子城警固ヲ致ス」の一文で、初めて確認される。それ以前は和加「南部信直書状写」、和賀「浅野長吉書状」「蒲生氏郷書状」、二子「南部大膳大夫分国之内諸城破却書上之事」『門老遺事』などと表現されている。

イ.「二子森（飛馳森）」に関する記述

18世紀代の『和賀稗貫郷村志』の頃は八幡山を「東森」、秋葉山を「西森」、二つの山を合わせて「二子森」（飛馳森）と呼び慣わしていたことがわかる。飛勢城という別称は19世紀前半代の『二子物語』に初めて現れ、元々は二つの森を指して言った飛馳森が、城の名称である飛勢城に転じ、字体も変化している。20世紀初頭の『和賀郡誌』には「二子山」・「二子森」・「飛勢森」（飛瀬・飛馳・飛長谷などとも書く）という名称が見え、この頃になると多様な別称が存在している。

ウ.「八幡山」に関する記述

18世紀代の『和賀稗貫郷村志』の頃は二子森（飛馳森）の東森と表現されている。19世紀前半の『二子物語』の頃には、「東之山」・「八幡山」と表現されるようになり、「此八幡山ト申ハ和賀之古城飛勢城ト申テ天守建候跡」と認識されている。20世紀初頭の『二子村誌』の二子東の森・八幡山の表現は、基本的には二子物語の踏襲である。昭和31年の『飛勢城物語』に至り、八幡山のある高台だけを「飛勢森」と呼ぶという解釈が加わっている。

エ.「秋葉山」に関する記述

18世紀代の『和賀稗貫郷村志』には二子森（飛馳森）の二子ノ西森と表現されている。19世紀前半の『二子物語』になると、「西之山」もしくは「愛宕山」（和賀時代に愛宕堂が建っていた場所で、今は愛宕山に秋葉堂が建っている所）と表現されるようになり、20世紀初頭の『二子村誌』になると、「二子西の森（今秋葉山）」と、「秋葉山」が初めて確認できる。このことから秋葉山は、二子物語以降に現れた呼称と理解できる。

オ.「一ノ森・壱ツ森・一つ森」に関する記述

17世紀末の史料『奥羽永慶軍記』「巻三十五：和賀主馬介敗軍事」には「齋藤九郎右衛門須々孫惣助馬場野ニテ踏止り先ニ進ム兵二三騎突テ落シ大勢ヲ引受粉骨ノ合戦目ヲ驚カス計ナリ其間ニ主馬介二子ノ城ニ着ニケリ寄手ハ馬場野ノ南ナル高キ森ニ勢ヲ引上タリ（中略）…北内蔵下知シテ二子ノ城ヲ破却シ鳥屋ケ崎ニソ帰陣ス」という一節がある。

岩崎一揆にかかる馬場野の合戦の後、南部勢が一時兵を引き上げたという「馬場野ノ南ナル高キ森」は地理的に見れば一ノ森以外になく、史料の記述内容から郭の地点が推定できる数少ない事例と言える。一方、馬場野ノ南ナル高キ森についての具体的な郭名称については、18世紀代の『和賀稗貫郷村志』に「一ノ森」と見えるのが初現である。19世紀前半の『二子物語』になると「壱ツ森と申すは和賀時代に物見ケ崎と申すなり」と表され、「壱ツ森」・「物見ケ崎」の二つがあり、後者のほ

うがより古い呼称として書かれている。20 世紀初頭の『二子村誌』・『飛勢城物語』においても「一つ森」（和賀時代には物見ケ崎）という呼称が引き継がれている。

カ．「筒井内膳屋敷」に関する記述

17 世紀末葉の『奥羽永慶軍記』「巻三十五：和賀主馬介依勸所々一揆蜂起事」によれば、「和賀主馬介ハ大林ニ在テ遠所ニ在ケル一族郎従ヲ密ニ使ヲ以テ招キ相去ノ里谷地小屋ニ移リ夫ヨリ本所二子ノ城ニ楯籠ラント先ツ人ヲ使ケレハ…（中略）筒井内膳カ一子縫殿助カ家アレハ彼カ館ニ入一門譜代ノ郎等共…（中略）盲亀ノ浮木ニ逢ヘルカ如ク悦フ事限リナシ」とあり、岩崎一揆の契機となった鳥屋ケ崎城夜討ちの計画を立てる場面で「縫殿助カ家」に集まったことが書かれている。筒井縫殿助は筒井内膳の子息であることから、縫殿助カ家とは筒井内膳屋敷のことを指すとも考えられる。

一方、18 世紀初頭の史料『吾妻むかし物語』にも「…慶長五年の冬の初和賀一揆の刻此小川の邊にて北湯口主膳てがらの働有しなどかたる。夫より南にむかへば内膳沢といふ有其上に屋敷の跡有、是其昔和賀の執権筒井内膳やしきの迹なりと云」と、内膳屋敷の地点について書かれた一節がある。

おなじく松井道圓による著になる『和賀稗貫郷村志』にも、内膳屋敷の項で、「同内膳沢　二子森北隔二三町有　一ノ森ト云其北辈ニ小沢有　之ヲ内膳沢ト云　沢ノ上北方大屋敷ノ跡有　是往昔筒井内膳宅也ト云　東限北上川ヲ西野原に接ス　北岩渡堂八幡之界に接　南二子森也」と、『吾妻むかし物語』と同じ表現がある。

このことから『吾妻むかし物語』、『和賀稗貫郷村志』共に、内膳沢の上（北方）に大屋敷の跡があり、そこが筒井内膳の屋敷の跡であると書かれていることがわかる。この書き方は、その後の『邦内郷村志』『二子村誌』においても踏襲される。また、やや時代が下った『二子村誌』・『飛勢城物語』においては上記に加え、岩崎一揆の募兵その他の準備をしたところとしても書かれており、縫殿助の家と筒井内膳屋敷が同一であるという解釈（『奥羽永慶軍記』に基づく）が加わっている。

なお、この大屋敷跡は令和元年度に当センターが調査を行った成田岩田堂遺跡調査区に該当する可能性が高い（第 4 図二子城想定図）。

※上記の内膳屋敷の記述は、昭和 12 年刊行の『源姓和賀家系図と其考証要録』内の飛驒城実測平面図に示された内膳屋敷とは地点が異なっている。同書後の昭和 31 年に刊行された『飛勢城物語』では、内膳屋敷の地点についての表現がこれまでの二子村誌までのものとは微妙に変化し、「一つ森と往還をへだてて内膳屋敷址がある。」と、ほかした書き方になっている。『源姓和賀家系図と其考証要録』の影響を受けたことによるズレが生じた可能性がある。

キ．「成田藤内の館」に関する記述

17 世紀末葉の『奥羽永慶軍記』「巻三十五：鳥屋ケ崎夜討事」には、成田藤内に関する記述として「鳥屋ケ崎無勢ノ所ヲ夜討ニセントソ打立ケリ大手ノ大将ハ和賀主馬介隨逐ノ一族郎従ニハ鬼柳伊賀守、須ケ孫上野介、成田藤内、八重樫孫十郎、筒井縫殿助、齋藤九右衛門尉、江釣子民部、河原田采女、都鳥相模守、更木主水、宇喜田、中内、湯澤、平澤ノ者共藤根、滑田ノ一門ニ近郷ノ地下人驒集テ三百八十餘人袖印合詞ヲソ定メケル右の人数ハ成田藤内カ館ニ在テ其刻限ヲ待居タリ…（中略）…櫻ヨリ九月十三日黄昏ニ打立豊澤川ヲ打越ケリ」とある。

岩崎一揆の契機となった鳥屋ケ崎夜討ちの兵が刻限まで集まっていたのは成田藤内の館（現：成田館か。当時の呼称は不明）であったことがわかる（第 4 図二子城想定図）。

おなじく「巻三十五：和賀主馬介敗軍事」には、成田藤内の館に関して、その地点を推測させるよ

うな一節が登場する。「和賀主馬介ハ鹿ケ鼻ヨリ八森ニ引ヨシ斥候ヲツカヒ見セケル（中略）…松齋ノ名代北内蔵先手ノ大将岩田源右衛門其外（中略）…都合二百五十餘騎二子ノ城へ押寄ル和賀主馬介ハ（中略）…其勢百八十騎八森ヲ後ニアテテ小川ヲ前ニシテ岩田堂ニ陣ヲ張ル寄手行懸ニ成田藤内カ舘ヲ焼拂ヒ夫ヨリ岩田堂ニ取掛ル（中略）…敵味方入乱レ生死モ知ラス揉合ケリ」という、慶長５年の岩崎一揆にかかる場面である。

和賀氏は花巻城（旧鳥谷ケ崎城）を落とせずに八森まで後退し、小川を前に南部と相対する。北から追いかける敵方に藤内の居館（現：成田館か）に火をかけられた後、岩田堂に攻め込もうとする敵と、応戦する和賀勢は成田の馬場野付近で合戦となる、という内容であるが、ここに言う小川とは飯豊川のことであると考えられ、地理的に考えれば和賀勢が八森に控えた時、小川を前に相対する格好となるのは成田館である。この場面は象徴的で、下記に挙げた『南部根元記』においても、奥州仕置後の和賀・稗貫一揆でも同様に和賀勢が八森に陣を取って小川を前にして控える場面が書かれる（写される過程で話が混同されたか、偶然なのかは不明）。

また、『二子村誌』によれば、成田藤内に関する施設として「馬場野」について「和賀家家臣成田藤内とて八百石取の者の馬場跡なり」と書いている。『飛勢城物語』では内膳堀の北側に成田馬場野があり、その北に成田岩渡堂の八幡の森があり、和賀家家臣で小原姓に属する成田藤内の岩渡堂舘があると書かれるが、その出典については不明である。

ク．「から堀」に関する記述

から堀については、19 世紀前葉に書かれた『二子物語』が初現である。著者の小原辰見は二子町出身の人で、二子城周辺の地理や村に伝わる言い伝えにも詳しかったと見られる。

「夫より壱ツ森と申ハ和賀持（時）代に物見ケ崎と申也。此森之下西ノ方ニから堀有り、是ハ和賀一揆蜂起之節一夜ニ堀鋏ト言所なり。其時持人足ハ近郷在住之者、家別に拾五歳より六拾余之年迄手足立ツ者ハ不残被召出、勢限りこんかぎりに被為堀候所ト伝承候。勢つきくたびれたる者あれハ、御奉行数人懸廻りあやがり者与被思不物言ニ首を切捨通りけれハ、命を限りなぎさけび掘りける程に、内膳沢より斎藤ケ沢之北迄ニ半塚斗り場所ヲ只一夜之内に堀候と申伝ル也。此壱ツ森ニハ今金毘羅様進心之輩ハ石塔ヲ建拝シ候なり。」という記述がある。また、時代が下り大正２年の『二子村誌』に見える空濠の記述も、二子物語の内容に忠実に倣ったものである。

一方、昭和 12 年に書かれた『源姓和賀家家系圖と其考證要録』「和賀薩摩守義忠」の項によると、「天正十九年辛卯三月十三日夜九戸左近将監政實南部家に反す。…南部信直急遽秀吉の救いを乞ふ。秀吉は蒲生氏郷、浅野長政に命じて兵三萬を奥州に進発せしむ。此の大軍を迎撃せんとして和賀義忠は秀吉と一大決戦を覚悟し、之に備ふる為、飛驒城の大修築を行ふ。」とあり、註書きには、義忠の修築は特に外濠と塹壕とに於て厳重を極めたるものの如し。外濠は内膳澤（筒井内膳）より齋藤ケ澤（齋藤九郎右衛門）に至る里余に亘るものなり。塹壕は一ツ森、二子ノ森に於て工築せしめ現在も尚其址歴然たり」とある。同書によれば、所謂「から堀」は、和賀・稗貫一揆から奥州再仕置の浅野・最上軍の北上までの間に着工された外濠であると考察されている（出典は明記なし）。

現在もこの「から堀」については内膳沢から一つ森の西側にかけて堀と土塁の痕跡を明瞭に認めることができる。なお、令和２年度当センターによる二子城発掘調査によって、調査区西側からこの堀と土塁の続きが新たに検出され、調査されることとなった（本報告書）。その痕跡はさらに秋葉山の西側から南西側までをぐるりと囲むように廻っていることが確認されている（第 41 図 SD03 全体図、第４・５図二子城想定図、写真図版等参照）。

ケ．「旧舘・故舘・古館・古舘」に関する記述

18世紀代の『和賀稗貫郷村志』には、「薩摩守旧舘」が「東森ノ下」にあり、「是和賀代々ノ居城也云」とある。また、「故舘ノ南涸漾隔テ東通之路有」と、旧舘周辺の地形についても多少の情報がある。この「故舘ノ南涸漾」については、北上市教委による発掘調査でその存在が確認されている（北上市教委2004）。これが19世紀前半代の『二子物語』の頃には故舘から古館に変化している。更に20世紀初頭の『二子村誌』には、「今の白鳥館で、里人御館と称す」とあり、「白鳥館」・「御館」が新しい呼称として広まったことがわかる。

コ．「文殊堂」・「文珠堂」に関する記述

18世紀代の『和賀稗貫郷村志』には、文殊堂荒迹について「西ノ森ノ南山之先ニ在相伝紫野純蔵主一休和尚之ヲ建其側に暫栖止スト焉」とある。文殊堂は西の森の南山の先にあり、紫野純蔵主一休和尚がこれを建て、そのそばに暫く留まったと書かれる。また、同書「五輪壇文殊堂」の項では、「五輪壇文殊堂南今街道の東側に在　昔誰ヲ為テ之を建ト云コト知ラズ　俗伝一休和尚道師ト為リテ之ヲ建　知是和賀領主之ヲ建ルコトヲ又是ヨリ西ノ広野ノ紫野ト云モ亦（また）一休ニ於イテ起哉ト時俗之疑フ」と「文殊堂」と「五輪壇」を結び付けて書いている。これが19世紀前半代の『二子物語』まで下ると「此西之山ハ和賀時代之時、愛宕堂建給ふ所也。（中略）。嵐に吹落ニて今ハ八幡山ノ東成文珠院屋敷ニ文珠堂ト愛宕堂ト被建置ル也。」「此山之西南ニ当て一休和尚之文珠堂被立候跡有、今ハ八幡之東文珠院之所江奉移シなり。」として、八幡の東の文珠院屋敷という所に一休和尚が建てた「文珠堂」と、西の山（愛宕山）から「愛宕堂」が奉移されたという記述が見え、この頃には二子城内に移っていたことがわかる（また、この時点で既に字体が「文殊」から「文珠」に変化している）。20世紀初頭の『二子村誌』には、「古舘の南なり、近年迄愛宕堂ありしが、今は村社の境内に遷し奉れり。」とあり、この時には愛宕堂は文珠院屋敷から村社境内に遷されたようである。つづけて「此地何人の館なりしか明ならず、或は白鳥館の内かとも思はる、要害の構なり。」と書かれている。

踏査した限りでは城主居館と同様、周囲にぐるりと二重堀を巡らして厳重に守られた郭である。城主居館とは堀を挟んでレベル的に地続きでもあり、重要な郭であったのは確かだろう。

サ．「御大方屋敷」に関する記述

18世紀代の『和賀稗貫郷村志』の頃は、永明寺の項に「御大方屋敷」としての記述が見える。19世紀前半代の『二子物語』まで下ると「御大法坂」という記述が見え、字体が変化していることがわかる。更に20世紀初頭の『二子村誌』には、「御台方屋敷」・「御台方坂」とあり、更に字体が変わり「御台方屋敷は奥方屋敷なり」。「御蔵場となりし時もあり」という記述が加わっている。『飛勢城物語』を含むこれ以降の文献では「御台方屋敷」が一般的になる。

シ．「永明寺」に関する記述

永明寺については、18世紀代の『和賀稗貫郷村志』の頃から「（永明寺の）寺地ハ御大方屋敷ノ北ニ在」とあり、地点については現代の文献に至るまで一貫して変わらない。

一方で永明寺跡について同書には「旧ノ寺地ハ二子ノ西森ノ東南下有ト云」、西の森の東南下にあったと書かれる。19世紀前半代の『二子物語』まで下ると、永明寺古屋敷の項には、「右山之南ニ門前ト言所有、是ハ和賀殿菩提所永明寺古屋敷ト言也。」とあり、八幡山の南の門前というところに永明寺古屋敷があったとされている。20世紀初頭の『二子村誌』には、「八幡・秋葉両丘の間、森合

と云う処にあり。其寺門のありし辺、今に門前と称す。」「初め更木梅の沢にあり、それより二子森の間に移し、今は御台方坂の北に移れるなり。」とあり、ほぼその内容は変わらない。時代が下って昭和12年の『源姓和賀家系図と其考証要録』の図中では、従来の地点より北にずれた場所（西森の東）に永明寺址と付されており、地点が変化している。

ス．「遍照寺」に関する記述

18世紀代の『和賀稗貫郷村志』の項は、「（遍照寺は）東森下ニ在　旧城南也　寺ノ上上小路ト云有　是其昔士家之町也」とある。19世紀前半代の『二子物語』まで下ると、「此山（右山）之北に坊館ト申所有、遍照寺之屋鋪跡也。」とあり、遍照寺が現在の場所に移る前は坊館にあったと書いている。また、同書は「夫（文珠院）より又黒岩海道之右之方ニ真言宗金剛山遍照寺、昔し和賀主馬守御祈祷寺ニて高野山末寺ト言。今ハ花巻八幡寺末山也。此寺之重物ニハ（中略）。国光の刀、あかまか石、伽羅木これハ和賀殿奉納ニ而寺之宝物成ルト言。今ハ焼失へ成ル哉。又時之住寺盗失江成ル哉。今あかまか石ニ伽羅木トにせ刀斗有ト申也。」とある。20世紀初頭の『二子村誌』も、内容は忠実に『二子物語』を踏襲したもので、現在のところに移転するまでは坊館にあったと述べている。

セ．「宿」に関する記述

『和賀稗貫郷村志』には、「故舘ノ東路南北ニ通ニ　其長三町ばかり北ノ方上宿ト号ス」とあり、「旧宿」の地点について具体的に述べられている。『邦内郷村志』は、「舊宿」の表記で同内容である。

ソ．江戸時代後期『二子物語』（1831）以降に現れる呼称

1～14以外の郭・施設については、『二子物語』『二子村誌』『飛勢城物語』にその名が見える。『二子物語』においては、坊館・行人塚・加賀坂・監物坂・鶴ケ池・亀ケ池・八重桝屋敷之跡・五輪壇・あみだふぢ・延妙寺屋敷之跡・背谷地等、これまでで最も多い郭・地点名がはじめて登場する。いずれもその地点・郭名については従前の史料には見られないものである。

一方『二子村誌』には監物館・加賀館という郭名称が初めて現れるが、これについても出典根拠が示されていない。更に『二子村誌』の24年後、佐藤暲・佐氏による『源姓和賀系図と其考証要録』が刊行される（1937）。同書に掲載された「第十二代和賀忠明築城岩手和賀郡飛騨城實測平面図：二千五百分の一」は二子城を構成する郭の名称と地点を結び付けて視覚的に示した初現であり、画期的な書籍である。ただし、その根拠が示されず出典等もないため、これを検証することができない。『源姓和賀系図と其考証要録』から更に下り、19年後に刊行された『飛勢城物語』は、ちょうど『二子村誌』と『源姓和賀系図と其考証要録』の中間を取り入れた内容となっており、同図を基にして作成されたと見られる「飛勢城址略図」が掲載されている。

戦後の出版物は、これまでの史料の要素が取り入れられて更に新しい解釈が加わっていくこととなる。先学の研究により、現代においてすでに定着した感のある二子城の郭名であるが、その地点・名称の成り立ちについてはそれぞれの史料の内容を理解したうえで出典を示しながら使用していく必要があろう。　（丸山）

3　史料にみる二つの一揆と和賀氏・南部氏の動向

和賀氏は鎌倉時代から約400年間、二子城を拠点として当地に権勢を誇った戦国時代の領主である。その和賀氏が没落への転機を辿るのは豊臣秀吉の北条攻めに参集せず、所領を没収されたことに端を発する。ここでは奥州仕置の後に起こった和賀・稗貫一揆と岩崎一揆における和賀氏と南部氏の動向を、「場所」をキーワードに史料から辿って行きたいと思う。参考とした史料、文献は、主に『南部根元記』、『奥羽永慶軍記』、『門老遺事』、『奥南旧指録』、『和賀稗貫両家記録』、『源姓和賀家系圖と其考證要録』である。

【天正18年　和賀・稗貫一揆から奥州再仕置にかけての和賀氏の動向】（第57図）

①旧鳥屋ケ崎城　※『南部根元記』による

和賀義忠は稗貫氏、根子氏などと同心して天正18年10月23日、稗貫氏の旧本城、鳥谷ケ崎城を三方から攻めた。三戸で知らせ受けた南部利直は11月7日に帰陣し、一揆勢の背後を攻めた。

②上館→③八反清水物見が鼻（物見獅子鼻）　※『南部根元記』による

反撃を受けた和賀の一揆勢は豊沢川を越えて上館へ引退き、八反清水物見が鼻（小郡保・天明本には物見獅子鼻）に陣をひかえた。

④上館鹿ケ鼻（獅子鼻）→⑤八森　※『南部根元記』による

そこから上館鹿ケ鼻（小郡保・天明本には獅子鼻）→岩谷堂（現岩田堂か）まで兵を引き、八森に陣を取って小川を前にひかえた。

※②～⑤の動向について、和賀氏は豊沢川を越えて上館→八反清水物見が鼻→上館鹿ケ鼻→八森と兵を引いたこととなるが、一旦上館まで南下したところを再び北上して八反清水に移動するとは考えにくい。地理的に見れば八反清水→上館→獅子ケ鼻と兵を引くのが経路としては自然と考えられる。書き写される過程で地名が様々に混合したために、混乱が生じたのではなかろうか。

⑥二子城　※『南部根元記』による

信直は首数百十一を挙げた後、鳥谷ケ崎へ戻り暫く逗留し、雪の時期になったので三戸まで戻っていった。和賀勢は久しぶりに二子城へ帰り、暫くの間は安堵の思いでそこで過ごした。

⑦秋田県仙北方面（大鐘原経由）　※『奥羽永慶軍記』による。

翌年の天正19年、九戸の乱に端を発した奥州再仕置きが行われた。九戸行の本隊から引き別れ、北上してきた浅野・最上の再仕置軍は総勢3万人、対して迎え討つ二子城の籠城兵は130騎、雑人800人の合計930人であったという。二子城は主戦場となり、激しい戦は三日間続いた。

結果として二子城は落城、和賀氏は没落した。薩摩守義忠は羽州（秋田）へと逃れる道中、和賀の大鐘原で土民の襲撃を受け落命する。息子の又二郎・又四郎は家臣らと共に仙北へと落ち延びた。

※『源姓和賀家系圖と其考證要録』によると、二子城を落ちた又二郎又四郎兄弟は和賀西奥山に到り、傷を治療し、秋田仙北の本堂家に頼ったとある（本堂家其他の記録より）。その後又二郎は本堂家の親を受け秀親と名を改めたが、のちの文禄の役の出征中に下野国で病没している。

【慶長５年　岩崎一揆における和賀氏の動向】（第 58 図）

①相去の里谷地小屋　※『奥南旧指録』による

二子城落城から４～５年が過ぎた頃、主馬（又四郎・和賀忠親）は秋田県の仙北から胆沢郡の大林へ来て、伊達政宗を頼り時節を伺いながら暮らしていた。慶長５年、政宗が領内巡見として水澤へ来た際、花巻の城を攻める際には加勢するので、早く兵を挙げ本懐を達するよう、主馬を招き言ったとされる。これを聞いた主馬はよろこんで大林へ帰り、用意をして相去の谷地小屋へ入った。

密かに二子村へ人を出して和賀の一味（譜代の家臣含め上下 20 人ばかり）を集め、谷地小屋へ出向いて主馬を伴って二子城へ向かった。

※『和賀稗貫両家記録』によると、「平沢へ帰り、支度を整え、相去谷地小屋へ罷越」とあり、大林とは名称が異なる。

※『源姓和賀家家系圖と其考證要録』には「慶長三年春伊達政宗和賀義房を擒れみ、公と共に若し南部口に事あらば先手を命ぜんとする志あり、依て胆沢郡に招き釆地五百余町を賜り、同郡西根郷平澤里に住せしむ。」との記述があり、大林とは名称が異なる。

②二子城（経由）　※『奥羽永慶軍記』による

主馬介（又四郎・和賀忠親）は二子城に出向いたが、人が住まなくなって久しい年月が経過したために荒れ果て、本丸は言うに及ばず数百件あった建物も敵に破却され、門と塀ばかりが残るありさまであった。

※『源姓和賀家家系圖と其考證要録』には「慶長五年十月和賀義房故地を復さんため分家本堂家の忠親を襲名し、主馬祐忠親と名乗り兵を挙ぐ。急遽譜代の家臣に激を飛せる所統々と廃城飛驒に集る。然れども当時城の殿舘崩れ果て、四方の塀門悉壁を残すのみにして修築の余裕なし。」という記述がある。

③筒井縫殿助の舘　※『奥南旧指録』による

二子城に入れなかったため、譜代の重臣である筒井縫殿の居宅に密かに集まり、花巻の城への夜討ちの評議・計略を練った。

④成田藤内の館　※『奥羽永慶軍記』による

和賀勢は鳥屋ケ崎城の手薄を狙って夜討にしようと出発した。集まった兵は 380 余人、袖印と合ことばを決め、成田藤内の館に集まってその刻限を待った。それから９月 13 日の黄昏時に出発して豊澤川を越えた。

※夜討ちの兵が刻限まで集まっていたのは現在の成田館か。

⑤花巻城（旧鳥屋ケ崎城）　※『奥羽永慶軍記』による

和賀勢は花巻城を攻めた。しかしながら城内では北松斎の指揮のもと、城中に残っていた者たちによる身命を惜しまない働きと城の堅い作りに阻まれ、遂に和賀氏は花巻城（旧鳥谷ケ崎城）を落とせず敗走する。

⑥鹿ケ鼻→⑦八ツ森　※『奥羽永慶軍記』による

和賀主馬介は鹿ケ鼻より八森まで兵を引き、総勢 180 騎、八森を後ろにあて小川を前にして岩田堂に陣を張った。

※『門老遺事』によれば、花巻城を落とせず後退した和賀勢は豊沢川の向こうへ引き、十二丁目上舘（物見が鼻上館と十二丁

目館が混合されたか。江戸時代の区分では根子村）から、その日の内に本所二子へ引き取ったとある。

※『奥南旧指録』によれば、『其翌日和賀勢上館鹿が鼻に控たるを北重左衛門・岩田源左衛門・北湯口主膳等駈向て打散しければ、一揆の輩陣を引て成田村八ツ森に馬を立る、花巻勢續て追かけ小川を隔てせり合ふ』とある。

※『源姓和賀家家系圖と其考證要録』によれば『忠親和賀郡内十二丁目邑上館鹿ヶ鼻（よみがなシシガハナ）に封陣す。更に飯豊成田堂八ツ森に敵を迎へ飯豊川を隔て両軍大に戦ふ。』とあり、文献によって内容が微妙に異なっている。

⑧馬場野　※『奥羽永慶軍記』による

北から追いかける敵方に藤内の居館（成田館か）に火をかけられた後、岩田堂に攻め込もうとする敵と、応戦する和賀勢は成田の馬場野付近で合戦となる。この場面で、和賀方の成田藤内と南部方の北湯口主膳との一騎打ちが描かれる。

※『奥羽永慶軍記』では、この一騎打ちで落命したと書かれる成田藤内であるが、江戸中期頃書かれた『奥南旧指録』、幕末・安政年間（1854～60）に書かれた『内史畧』『南旧秘事記』には岩崎一揆の慶長６年３月13日の岩崎城中の籠城兵の中に成田藤内の名が見える。

※『門老遺事』によれば、花巻城からその日の内に二子へ引き取り、馬場野での合戦後、二子を貴落され更に飯豊村に引き退いたとある。

⑨二子城　※『奥羽永慶軍記』による

主馬介は家臣たちが必死の働きで敵の足を止めている間に二子城に到着する。このとき敵は馬場野の南の高い森に勢を引き上げた（一つ森か）。主馬介は二子城に敵を防ぐような構えが無く、味方勢も大将の行方が分からず思うように集まらなかったことから、17日の夕方に二子城を脱出した。その際、主馬介の乗った馬が庄田堤の深田に乗り入れ、危ないところを江釣子民部が助けたという逸話がある。南部勢は二子城を破却すると、鳥屋ケ崎へと帰っていった。

※『源姓和賀家家系圖と其考證要録』には『大堤は城内天守並の背後にして西庄田堤と称するところなり。今田地と化す。』という記述がある。→西庄田堤は庄田堤のことを指すのだろうか。

⑩飯豊館→⑪相去の里谷地小屋　※『奥羽永慶軍記』による

17日の夕方、残った十七・八騎で二子城から飯豊に引退いた。主馬介は飯豊（館か）に暫く滞在し、谷地小屋に戻って軍慮（岩崎城の普請・兵糧の依頼など）をめぐらした。

※『門老遺事』によれば、和賀主馬は仙台領相去谷地小屋へ引退いたあと、同領門岡館というところで越年し、慶長６年２月、主馬は政宗へ相談にて岩崎の古城を取り立て籠城したとある。

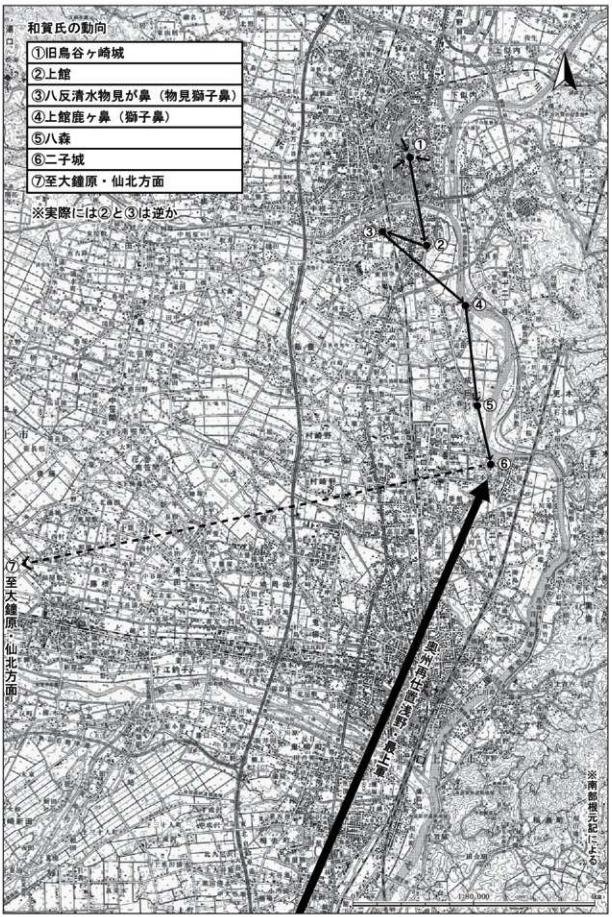
⑫岩崎城　※『奥羽永慶軍記』による

主馬介は籠城の準備を整えると岩崎城に籠城した（『門老遺事』によれば慶長６年２月か）。力添えを頼んだ水澤城主からは鉄砲玉薬、前澤城主からは金子鳥目等、岩谷堂城主からは兵糧と馬具をそれぞれ送られた。和賀の土民も「旧君が再び旗を揚げ給う」と喜んで、米穀を持って岩崎城へと馳せ参った。

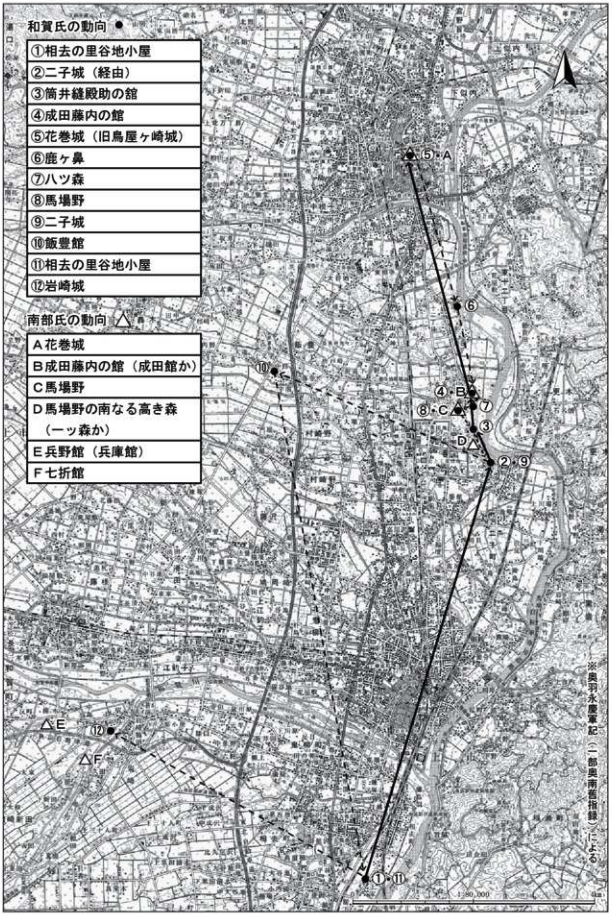
【慶長５年　岩崎一揆における南部氏の動向】（第58図）

Ａ．花巻城　※『奥羽永慶軍記』による

北松斎の守る花巻城（旧鳥屋ケ崎城）は、９月13日の黄昏時に成田藤内の屋敷を出発して花巻城



第 57 図　和賀・稗貫一揆から奥州再仕置にかけての和賀氏の動向



第 58 図　岩崎一揆における和賀氏・南部氏の動向

に向かった和賀勢の襲撃を受ける。城中は小勢であったが松齋率いる南部勢が健闘し、また城の作りも堅かったので遂に一揆勢を退けることに成功した。

※「奥南旧指録」によれば、「花巻城代北尾張入道松齋は熟楽へ加勢を出しければ城中圖無勢なり…（中略）。敵将多田主馬は譜代の郎従煤孫之州・筒井縫殿・齋藤九郎右衛門・江釣子民部・八重樫彌十郎を始め数十人を催して、又根子周防・同備中・櫻田雅楽介・八反清水次郎左衛門杯と心を合せ二日の夜相圖を究め花巻の城へ取懸り無二無三に攻立る…」とあり、夜討ちの日付が異なっている。

Ｂ．成田藤内の館　※『奥羽永慶軍記』による

「…其勢百八十騎八森ヲ後ニアテテ小川ヲ前ニシテ岩田堂ニ陣ヲ張ル寄手行懸ニ成田藤内カ舘ヲ焼拂ヒ夫ヨリ岩田堂ニ取掛ル…」八森まで引いた和賀勢を追いかけてきた南部勢は、八森（館）を背後にして小川（飯豊川か）を前にして岩田堂に陣を張る和賀勢180騎と相対する形勢となり、行きがけに成田藤内の舘（成田館か）に火を掛けてから、小川を超えて岩田堂に攻め入った。

Ｃ．馬場野　※『奥羽永慶軍記』による

「齋藤九郎右衛門　須々孫惣助　馬場野ニテ踏止リ　先ニ進ム兵二三騎突テ落シ　大勢ヲ引受粉骨ノ合戦　目ヲ驚カス計ナリ」岩田堂から馬場野にかけてが戦場となったことがわかる。

Ｄ．馬場野の南なる高き森　※『奥羽永慶軍記』による

主馬介が二子城に到着する頃、南部勢は馬場野の南の高い森（一ツ森）に勢を引き上げたとある。17日の夕方主馬介たちが二子城を脱出すると、これを深追いすることなく二子城を破却してから鳥屋ケ崎へと帰っていった。

Ｅ．兵野盾（兵庫館）　※『奥羽永慶軍記』による

和賀の土民たちが米穀を旧君和賀主馬介の籠城する岩崎城へと貢ぎ、南部藩に年貢を送らないという由々しき事態となったため、南部利直は９月下旬に最上を出発し、急いで本国に帰陣した。盛岡に三日逗留した後、鳥屋ケ崎城に移って松齋と対面し、時日を移さず和賀一揆を鎮定するため10月18日に鳥屋ケ崎を出発し、江釣子の三月田に宿陣、長沼の瀬を渡り兵野盾に三日間封陣し、敵の様子をうかがった。

10月23日から戦闘が開始されたが、二十日あまりが過ぎても岩崎城中の兵は少しも弱らず、そのうち雪も降ってきたので利直は11月16日に兵を引き、鳥屋ケ崎に一旦人馬を納めた。

かくして慶長５年は暮れていった。

※「源姓和賀家家系圖と其考證要録」によれば「南部利直は北松齋の注進により同年十月十九日岩崎村安俣館に封陣す。和賀勢頑強にして拔く能はず。一先づ断念して十一月中旬居城三戸に退く。慶長六年三月三日利直4700余人の軍勢を以て再び押寄せ城の近傍七折館を築きて封陣す。」とある。→兵野盾（兵庫館）とは名称が異なる。

【慶長６年　岩崎一揆における南部氏の動向】（第58図）

◎盛岡城　※『奥羽永慶軍記』による

慶長６年に年が改まると、南部利直は北松齋を盛岡の城に招き、岩崎退治の評定をして軍事を整え、雪が消えるのを待った。３月３日、鳥屋ケ崎に向けて出馬した。

Ａ．花巻城（旧鳥屋ケ崎城）　※『奥羽永慶軍記』による

花巻城を経由して３月９日、和賀郡の籠城する岩崎城に向かった。昨年のように三月田で人馬を休めた後、和賀川を渡ろうとしたが、山からの雪なだれで川が増水し渡ることができなかった。その日は神楽島三郎左衛門という地下人の家に一泊した。

Ｅ．兵野盾（兵庫館）→Ｆ．七折館　※『奥羽永慶軍記』による

翌日、和賀川を渡って兵野盾に陣取った。

「家々ノ旗馬印春風ニヒラメカシ煤孫ノ寺坂ヲ打上リ兵野盾ニ陣取リ給フ　利直カ子テ岩崎ノ城ノ南七折ト云所ヲ向陣ニ取テヒカエタリ」

利直は岩崎城の南にある、七折（館）というところを向陣に取って控えた。

【慶長６年　岩崎一揆の顛末】

以下、『奥羽永慶軍記』をもとに慶長６年の岩崎一揆の経過を概観する。

３月 13 日：「寄手三方ヨリ打圍テ時ヲ作ル其声山彦ニ答ヘ松風ニ和シテ山川忽震動ス」

岩崎城に籠城する和賀勢と、兵野盾と七折館に陣を構えた南部勢による昨年 11 月以来２度目の戦いが開始された。

３月 17 日：「城ヲ攻ント催シケルニ今日俄ニ大風發（たつ）テ草木悉（ことごと）ク吹倒ス陣屋モ破壊シテ旗馬印帷（とばり）幕ヲ吹切テ虚空ニ飛ス事夥シ…」

強風が吹き荒れた日、岩清水右京亮の乗った若馬がこれに驚き大手門付近まで暴走したことをきっかけに、升形から出てきた和賀勢と駆け付けた岩清水の郎等との間で合戦となり、南部勢十余人が討ち死にした。

「三百余騎カケ合セ追ツ返シツ烟（えん）塵天ヲ掠メテ相挑ム事三ヶ度ナリ去ハ雙方ニ討ルル者数ヲシラス」

その後も寄せ手は何度も攻めたて、城内の和賀勢は応戦し、双方の討ち死にした者の数は数えきれないほどであった。

卯月の上旬：４月になっても和賀勢に弱るそぶりは見られず、利直は主馬介の背後に仙台勢の加勢があるのではないかと感じていた。「去ニテモアレ是程ノ小城ヲ落シ得ス日数ヲ経ル事コソ口惜ケレイサヤ明日ハ惣攻セン…（「奥南舊指録」によれば、下知は４月 19 日）。」という利直の下知を受けた松斎は、井楼を作り中の様子を窺ってから総攻めすることを発案した。城内に寄手の様子を知られないよう井楼に幕を掛け、飛んでくる火矢を防ぎながら、ほどなく井楼は完成した。

土民の密告

「爰（ここ）ニ胆澤ノ土民元ハ柏山伊勢守カ領内ノ者…（中略）来テ密ニ申ケルハ明日水澤岩谷堂前澤ノ大勢後詰シテ南部勢ヲ討ント催シ候ソ後レヲ取ラサルヤウニ御軍慮候ラヘトイヒ捨テ胆澤ニソ帰リケル」

ここに胆沢の土民からの密告があり、利直は後詰を討つための軍慮を巡らした。

４月４日：早朝、相去のほうから後詰の先手白石若狭守の郎等、鈴木将監が現れた。利直は土民の密告を受け前夜から岩崎城搦手下の中島に兵を手配していた。将監が夏油河原へ駆け下り城に入ろうとするところを乙部大興寺が討ってかかり、その後両軍入り乱れ命も惜しまぬ戦となった。鈴木将監は激闘の末に落命し、この後詰は失敗に終わった。

※「源姓和賀家家系圖と其考證要録」によると、この時の将監の激闘ぶりを「将監敵陣へ三度迄乗り入れ敵兵数多討取り数か所の傷をつくる。中にも脇腹へ傷つけられたるをもって一旦近村の民家に入り布を以て巻き付けまたも敵の陣中に乗入る」と書いている。

江府の旗本大箭小右衛門の助言

この頃、家康の命を受け北海道へ鷹を求めるために東北入りしていた江府の旗本大箭小右衛門がこの兵乱を見て利直のところにやってきた。利直から事の次第を聞くと、「政宗の郎等の水澤・前澤・岩谷堂がこの一揆に加担していたことは私がこの目で見た。証人になるのでこの一部始終を書簡で家康へ訴えるようにと助言され、利直はこれを受け入れた。

4月26日：利直帰陣。大箭小右衛門は北海道（松前）へ渡っていった。南部の郎等一條助兵衛は急いで井伊直政の舘へ入り、直政に大箭の書簡を届けた。直政は家康の御前へ出て両者の書簡を言上した。家康はこの由を聞いて政宗の関与を疑い、使いをもってこの度の一揆の事、政宗が下知して郎党が岩崎の後詰に関わった行為を咎め、政宗に説明を求めた。

これに対し政宗は、自分は知らぬことであったと申し開きをした。

→「何ノ因ヲ以テカカル世ニ落者ニ與力仕候ヘキヤ郎党共カ加勢仕候ヨシ御不審ニハ候得共政宗ユメユメ存シ候ハスト陳謝ス」

これにより家康は、白石・大内・母帯等が主馬介に頼まれて仕方なく加勢したことと解し、「兎角政宗馳下テ退治セヨ」と仰せになった。

事態の収拾を図る為、政宗は遠藤出羽守を間に立てて主馬介を説得した。主馬介が岩崎の城を開けさせると、籠城していた牢人たちは皆散り散りになった。その後、主馬介は僅かに20余騎で仙台に上り、松山に置かれた。

※「源姓和賀家家系圖と其考證要録」によると、「政宗は家臣遠藤出羽を遣はし、忠親に諭すに解兵を以てす。忠親天下の大勢非なるを知り、枉（ま）げて之に従ひ、夜半岩崎を出づ。…茲（ここ）に兵を解きたる忠親は家臣を離散せしめ。出羽と共に自ら二十余人を率いて仙台青葉城に至る」とある。

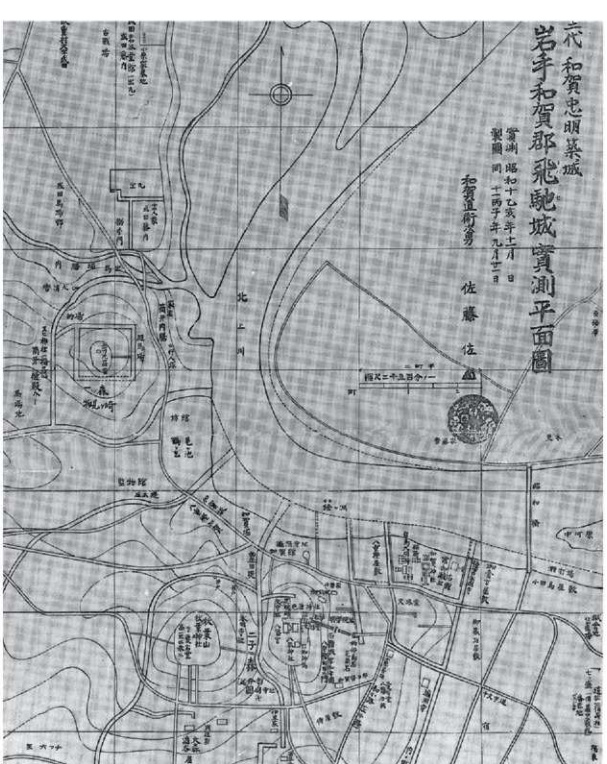
8月下旬：「政宗モ主馬介ヲ申乞ヒ助ハヤトセラレケレトモ内府公頼ニ憎マセ給ヘハ叶ハスシテ国分ニ於テ八月下旬ニ討レケリ則首ヲ江府ニ送リ給フ」政宗は主馬介を助命したかったが叶わず、8月下旬に主馬介は家臣と共に仙台国分にて討れた。

※「奥南旧指録」によると、自刃したのは仙台の国分寺で慶長6年5月24日とある。　（丸山）

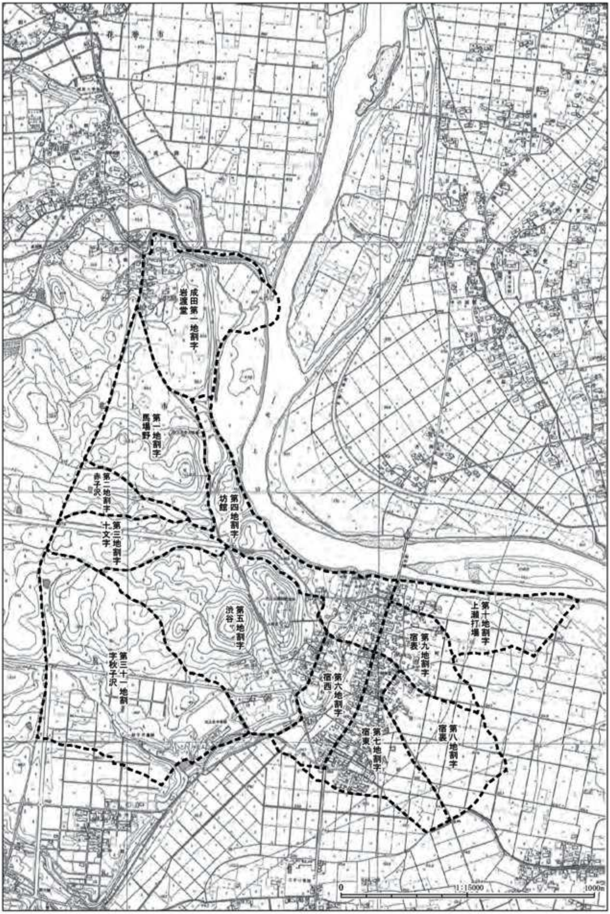
主要参考史料・文献

『南部根元記』『奥羽永慶軍記』『門老遺事』『奥南旧指録』『和賀稗貫両家記録』『源姓和賀家家系圖と其考證要録』

※個々の詳細については第4表　二子城にかかる史料一覧に記載。

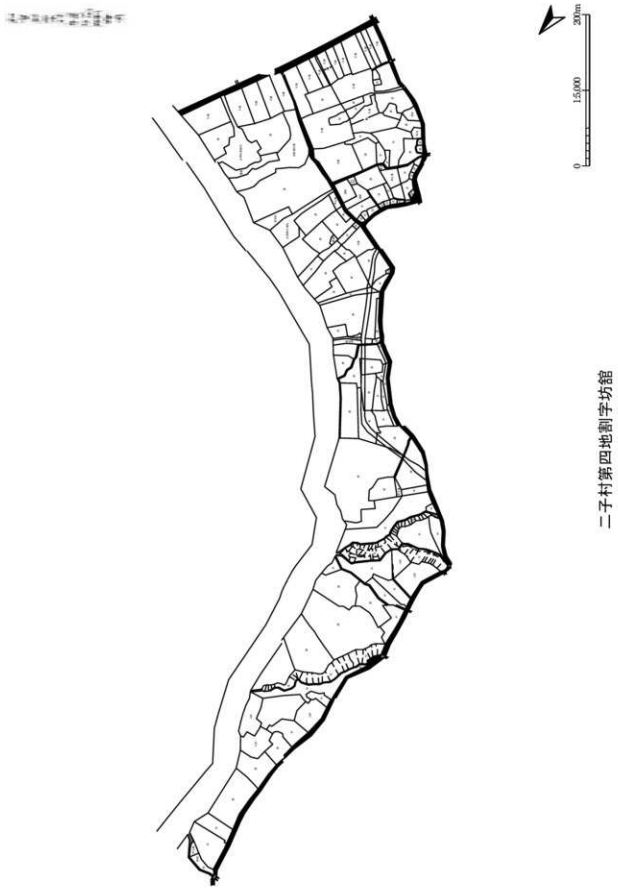


第 59 図　飛勢城実測平面図


成田第一地割字
岩渡堂
第一地割字
馬場野
第二地割字
赤子沢
第三地割字
十文字
第四地割字
坊館
第五地割字
渋谷
第三十一地割
字秋子沢
第六地割字
宿西
第七地割字
宿東
第八地割字
宿表
第九地割字
宿表
第十地割字
上瀬打場
0
1:15000
1000m

第60図　地籍図地割

第61図　地籍図（第一地割字馬場野）



第 62 図　地籍図（第四地割字坊舘）

第 63 図　地籍図（第五地割字渋谷）

第４表　二子城にかかる史料一覧

時代	発刊年（和暦）	発刊年（西暦）	編著者	資料名	備考１	備考２
安土桃山	天正９年（大正15年写）	1581（1926写）	−	『小田島家記録写「御城持衆其他御家臣紋章」「和賀御分限録」』	和賀氏滅亡の20年前に書かれた小田島家の記録	北上市史刊行会1970『北上市史』第二巻　古代（２）・中世「136和賀氏家臣及び館と紋章　小田島家記録写　天正九年」として所収「天正９年のものを寛文２年三月に黒岩の小田嶋軍七郎が写し、さらに明治16年９月…が写し、大正15年７月23日に…が写したものである。原本も写本も失せて不明であるので…」と記される。
	天正18年	1590.10.24	南部信直	南部信直書状写	和賀氏滅亡の11年前に書かれた書状。宝翰類聚が書かれたのは和賀氏滅亡から140年後	江戸中期・寛保年間（1741〜44）伊藤祐清・円子記『宝翰類聚』に記載。「和加」は二子城を指すか。※藩士所伝の古記録をまとめたもの。
	天正18年	1590.12.19	浅野長吉	浅野長吉書状	和賀氏滅亡の11年前に書かれた書状。	『盛岡南部家文書』二子関係に登場する「和賀」は二子城を指すか。
	天正19年	1591.8.23	蒲生氏郷	蒲生氏郷書状	和賀氏滅亡の10年前に書かれた書状。この前後に二子城は落城。	『伊達家文書』二子関係に登場する「和賀」は二子城を指すか。
	天正20年	1592.6.11	南部大膳大夫	南部大膳大夫分国之内諸城破却書上之事「門老遺事」	和賀氏滅亡の９年前に書かれた。	南部叢書刊行会1928『南部叢書（二）』「門老遺事」所収「二子平城破　南部主馬持分」※門老遺事は江戸中期・文政５年（1822）に梅内祐訓が南部家の事跡について記録したもの。
	文禄２年（文化３年写）	1593（1806写）	八重畑勧歩斎	稗貫状「門老遺事」	和賀氏滅亡の166年前の大乱。永享７・８年の抗争の記録。勧歩斎が稗貫状を書いた時点で永享の抗争より157〜8年経っている	南部叢書刊行会1928『南部叢書（二）』「門老遺事」所収　稗貫状は1593八重畑勧歩斎が記し、寛文６年（1629）の書写を経て、文化３年（1806）書写されたものが、門老遺事に収録とされる「江刺之面々二子城贅掴致ス」※門老遺事は江戸中期・文政５年（1822）に梅内祐訓が南部家の事跡について記録したもの。
江戸・近世	〜近世初期	−	不詳	『奥南落穂集』	北東北の中世諸領主や諸地頭の戦国末期〜近世初期の動向を知る史料。	花巻市教委1977『花巻市史（資料篇二）』所収「和賀家ノ次第：…建久二年（1191）下向二子城ニ住ス…」頼朝の子を隠して育てたという内容
	江戸前期・寛永18年	1641	糠子内杢	『南部根元記』	和賀氏滅亡40年後に書かれた。	南部叢書刊行会1928『南部叢書（二）』所収　南部家始祖より天正19年に至る間の歴史的叙述。その系統に一巻本と二巻本がある。古資料の一部が散逸。「和賀・稗貫一揆蜂起之事」※奥羽永慶軍記と同じ項名だが和賀一揆で「八森に陣を取りて小川を前に當（あ）て扣（ひか）へける…。」という記述があるのは根元記のみ。南部家始祖から天正19年（1591）までの歴史書。
	元禄11年	1698	戸部正直	『奥羽永慶軍記』	和賀氏の滅亡より100年程経ってから書かれた。	近藤瓶城編1901『史籍集覧』史ノ第八冊　近藤出版部　所収「奥羽永慶軍記　巻二十一：和賀稗貫一揆蜂起ノ事・二十二巻：和賀落城之事・三十五：和賀主馬弁敗軍事」※「此度諸国の大軍を引き受け戦わんには…二子城に立て籠り心を一つに戦おうではないか」。「小川を前にして岩田堂に陣を張る。寄手行きがけに成田藤内の館を焼き払い…」北湯口主膳との一騎討が描かれる。
	〜元禄年間？	〜1704	松井道圓	『吾妻むかし物語』	和賀氏滅亡約100年後	南部叢書刊行会1928『南部叢書（九）』所収「昔、二子の森を見ようとする旅人が一人二人さすらい来て、岩田堂の八森に上って八幡の社で休憩し、その後内膳沢、一つ森「人積り説」、本城の堀跡などを見て回った。すると畑を耕していた土地の古老が手を止め話しかけてきて…」二度成りの栗の事。
	〜享保11年頃	1726頃	松井道圓	『和賀稗貫郡村志』	和賀氏滅亡125年後頃	享保10年の出来事も収録・死の前年まで筆を入れ続けた。大迫町教委1999〜2001『早池峰文化』11〜13号所収「二子村：二子森、烏雲ノ陣…、内膳屋敷、二度成ノ栗、永明寺、遍照寺、旧宿、文殊堂荒跡、五輪壇文殊堂、八幡宮（白鳥館の文字は見えない）」。※永明寺…其昔永明寺ハ…二子ノ西森ノ東南下有ト云。遍照寺は現在の場所。円明寺…昔在二子村五六十年前移于此
	〜寛保元年頃	〜1741頃	伊藤祐清	『祐清私記』	和賀氏滅亡140年後	南部叢書刊行会1928『南部叢書（三）』所収「和賀古館之事」※南部信直・利直の治世を中心として前後の経緯や歴史的流れを付け加えている。南部藩の諸士系図・古筆等調用係を務めた人物。
	江戸中期・明和〜寛政年間	1764〜1801	大巻秀詮	『邦内郷村志』	和賀氏滅亡163年後	南部叢書刊行会1929『南部叢書（五）』所収　藩内の地誌、郡町村の石高、戸数、人口、社寺などを記録。
	安永２年頃	1773頃	−	『安永風土記』	和賀氏滅亡172年後頃	風土記御用書出　江刺郡諸村　宮城県史編纂委員会1961『宮城県史』28風土記所収
	安永５年頃	1776頃	−	『安永風土記』	和賀氏滅亡175年後頃	風土記御用書出　上胆沢相去村・相去村端郷六原　宮城県史編纂委員会1961『宮城県史』28風土記所収
	天明５年	1785	菅江真澄	『けふのせはのの』	和賀氏滅亡184年後	南部叢書刊行会1927『南部叢書（六）』所収「…飛勢森といふなるは天正十八年の春のころほひたる和賀の主馬のかみと聞へたりし城あと也…」天明５年８〜10月迄の旅を記したもの
	江戸中期・文政５年	1822	梅内祐訓	『岩崎一記由来記』	和賀氏滅亡221年後	南部叢書刊行会1928『南部叢書（二）』「門老遺事」所収　天正18年秀吉の小田原攻めから慶長５年岩崎一揆にかけての記述「主馬二子を責落され飯豊村に引退けるに…二子の城の西「庄田堤」といふ所にて、主馬の乗たる馬ふけへ足をふみ込既に危く見へたる所に、主馬か家来江釣子民部馬より飛下り、主馬か乗たる馬の四足を取り陸地へ指上ける故、難なく其場を遁れける。」※門老遺事は江戸中期・文政５年（1822）に梅内祐訓が南部家の事跡について記録したもの。
	江戸中期頃	−	不詳	『奥南舊（きゅう）指録』	和賀氏滅亡200年後？	南部叢書刊行会1928『南部叢書（二）』所収「奥南舊指録　巻之一　十八ケ崎援兵之事・巻之三　利直公最上出陣並多田主馬蜂起之事　花巻夜討并和賀主馬籠岩崎之事」※岩谷堂八つ森に屯して小川を前にあて士卒を集む。南部根元記と内容が酷似。南部根元記・奥南舊正録の書と倶に内容殆ど一様の形式に出でたる関係文書献…である。南部家歴代の記録。

時代	発刊年（和暦）	発刊年（西暦）	編著者	資料名	備考1	備考2
江戸・近世	江戸後期・文政7年以降	1825以降	和賀多田之輔かそれ以降の人の手による	『和賀稗貫両家記録』	詳細な記述。頼朝の子「春若」。家紋の由来。二子に居を移すまで。ほか情報量多い。	北上市史刊行会1976『北上市史』第三巻　近世（1）収録　忠親のひ孫・義直が伊達氏部とかかわっていた寛文十年（1670）前後から、文政七年（1824）和賀義章（多田之輔）の時代まで約150年間の記録。
	天保2年	1831	富岡理指	『二子物語』	和賀氏滅亡230年後	北上市史刊行会1983『北上市史』第九巻　近世（7）に収録「和賀氏関係史跡、和賀氏の家臣、村内の古跡・伝承」延妙寺（円明寺：1243年の仏像がある寺）については本文献が最も詳しい。「和小路のほうにあって、その後就間村へ移った」とある。『和賀稗貫郷村志』の記述とも合致する。その後、源姓佐藤家の『源姓和賀家家系圖とその考證要録』の図に誤記載？があり、それが元となって後世の書物に永明寺の位置と混同されたような表記が散見されるようになる。元々は「とばせ森の南東麓和小路のほう」が正しいのでは。
	天保6年頃	1835頃	和田甚吾兵衛氏武	『二郡見聞私記』	和賀氏滅亡234年後頃	南部叢書刊行会1928『南部叢書（九）』所収　「二子の光り物：二子の森を飛驒ケ森ともいふ、往古の城主和賀薩摩守といふ…寛延年中右御大場屋敷の杉三四本伐倒しけるに、杉の枝に大成鏡一面かかりてあり、取上げケ見るに誠の白銀の鏡とぞ…」「八反清水：豊沢川南上手より太田街道へ登る坂ノ途中…」。
	幕末・嘉永～安政年間	1848～60	江刺恒久	『奥々風土記』	和賀氏滅亡247年後	明治3年以前に完結。南部叢書刊行会1927『南部叢書（一）』所収　「二子ノ城　二子村に今も城跡あり。和賀家の先祖より歴代居住りし城なり…」簡素な記述。
	幕末・安政年間	1854～60	横川良助	『内史畧』	和賀氏滅亡253年後	岩手県立図書館1973『岩手史叢　第一　内史畧（1）』「内史畧前二　十四：和賀一揆、十七：岩崎城の攻囲戦、十八：岩崎城落城す」「前三　三五：和賀氏元祖、五五：和賀忠親一揆を起す、五六：南部利直岩崎出陣　和賀氏没落」「前五　二四：和賀氏の祖」※一揆の蟹瘴を引て成田村八ツ森に馬を立る　花巻勢続て追懸小川を隔て迫合ふ
	江戸	−	−	『和賀一揆次第』	−	塙保己一編『続群書類従』第22輯ノ上　合戦部　続群書類従完成会1924所収
大正から戦前・近代	大正2年	1913	鈴木隆太郎	『二子村誌』	城東文庫	第十五：和賀家の事、第十七：傳説、第十八：雑考（1）地名、（4）異説欄：白鳥館の名あり　二子城について
	大正8年	1919	和賀郡部會（鈴木隆太郎ほか）	『和賀郡誌』	和賀郡部會	編著兼発行所　「二子村：村社八幡宮、秋葉神社、白鳥神社、遍照寺、永明寺、一ツ森、空濠、馬場野、二子城址、古館（白鳥館）、二子西の森、五輪塔」
	昭和10年	1935	及川銀太郎	『我等が祖和賀氏』	和賀神社奉賛會	銀太郎氏は宿出身の実業家。主として和賀氏の史的事実を順次に配列　奥々風土記、南部根元記、門老遺事、拓清私記、郷村古實見聞記、邦内郷村志、眞澄遊覧記、吾妻昔物語、奥羽永慶軍記、奥南舊指録、澤内風土記、源姓和賀氏系譜、二子村誌其他を参照して執筆したとあり。
	昭和12年	1937	源姓佐藤家（佐藤暐・佐藤佐）	『源姓和賀家家系圖と其考證要録』	源姓和賀家家系圖と其考證要録刊行會	岩手和賀郡飛驒城實測平面圖掲載　共著発行者：佐藤暐・佐藤佐「一　源姓多田和賀家系圖　二　源姓和賀家系圖とその考證　松山系和賀氏についても詳しい　三　和賀家史蹟と遺物其他　岩手　八五：飛驒城址、九一：五輪塔、九四：更木城址　付録　和賀家臣二百八十五名」源姓多田第34代和賀家嫡宗故朝章の孫である佐藤兄弟が執筆。※和賀家臣一覧に八重樫加賀實清の名がある。
戦後・現代	昭和27年	1952	及川真清	『和賀氏小史』	岩手県和賀郡岩崎村社会教育委員会	−
	昭和31年	1956	及川雅義	『飛勢城物語』	北加実社	飛勢城址略図掲載
	昭和31年	1956	高橋伊勢次郎	「和賀氏の一族壽沢氏について」	−	『猿ケ石叢書』第16輯　土沢郷土研究会
	昭和43年	1968	司東真雄	「和賀氏の姓系についての考察」	−	『奥州大学紀要』創刊号　北上市1970『北上市史』第二巻　古代（2）・中世に所収
	昭和55年	1980	北上市立博物館	『和賀氏の史跡をたずねて』	北上市立博物館	第1回歴史探訪会資料　和賀郡関係年表、和賀氏の家系、和賀氏の業績とその家臣、和賀氏の没落、和賀氏関係の史跡について
	平成4年	1992	菅野清春	『二子風土記』（五）	二子風土記編集委員会	第二章に二子物語を現代的仮名遣いで掲載
	平成7年	1995	北上市立博物館	和賀一族の興亡　前編	北上市立博物館	北上川流域の自然と文化シリーズ（16）
	平成8年	1996	北上市立博物館	和賀一族の興亡　後編	北上市立博物館	北上川流域の自然と文化シリーズ（17）
	平成12年	2000	北上市立博物館	和賀一族の興亡　総集編	北上市立博物館	北上川流域の自然と文化シリーズ（21）
	平成12年	2000	北上市立博物館	『出土陶磁器からみた和賀氏の時代』	北上市立博物館	平成12年度特別展
	平成13年	2001	佐々木政蔵	『和賀氏ものがたり』	和賀氏400年祭実行委員会	参考図書：我等が祖和賀氏、源姓和賀家家系圖と其考證要録、和賀氏四〇〇年　和賀一族の興亡　北上市史　岩手県の歴史　等
	平成17年	2005	伊奈晴太朗	『中世和賀氏の伝承遺跡めぐり』	株式会社　河口	「週刊きたかみ」連載。「和賀氏の伝承遺跡めぐり・カメラルポ」
	平成22年	2010	二子史誌編纂委員会編	『二子史誌』	二子史誌編纂委員会	二子史誌編纂委員会2010『二子史誌』二子地区振興協議会　円城寺門のことが詳しく書いてある

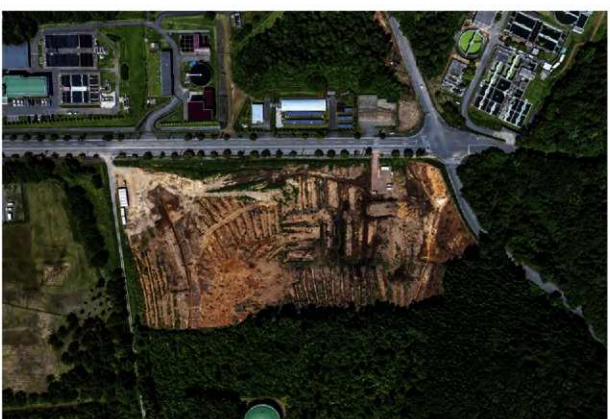
写　真　図　版

二子城跡遠景（北から）

二子城跡全景（南から）

写真図版１　航空写真（１）

二子城跡全景（右が北）



調査区全景（上が北）

写真図版２　航空写真（２）

ＳＫ 03 出土遺物

ＳＩ 03 出土遺物

写真図版３　出土遺物（１）

ＳＩ02出土遺物

ＳＩ01出土遺物

写真図版４　出土遺物（２）

南東部調査前現況（東から）

東部調査前現況（北東から）

南東部調査前現況（北から）

西端部調査前現況（東から）

調査区全景（上が北）

写真図版５　調査前現況、調査区全景

ＳＤ01・02確認状況（南から）

ＳＤ01・02及び土壇現況（北から）

写真図版６　ＳＤ01・02現況

ＳＤ01・02完掘（北西から）

ＳＤ01・02完掘（南から）

写真図版7　ＳＤ01・02（1）

ＳＤ 01・02 完掘（北から）

ＳＤ 01 断面Ａ - Ａ´（北から）

写真図版８　ＳＤ 01・02（２）、ＳＤ 01 断面（１）

ＳＤ０１断面Ｂ - Ｂ´（北から）

ＳＤ０１断面Ｃ - Ｃ´（北から）

写真図版９　ＳＤ０１断面（２）

ＳＤ 01 断面（北から）

ＳＤ 02 断面Ｂ - Ｂ ' （南から）

写真図版 10　ＳＤ 01 断面（3）、ＳＤ 02 断面（1）

ＳＤ 02 断面Ａ - Ａ´（南から）

ＳＤ 01 土塁断面（北東から）

ＳＤ 01・02 完掘（北から）

ＳＤ 01・02 完掘（南から）

写真図版 11　ＳＤ 02 断面（2）、ＳＤ 01・02（3）他

SD 03 完掘（北から）

写真図版 12　SD 03（1）

ＳＤ 03 完掘（南から）

ＳＤ 03 断面Ａ - Ａ´（南から）

写真図版 13　ＳＤ 03（２）

ＳＤ 03 断面Ｂ - Ｂ´（南から）

ＳＤ 03 Ｃ - Ｃ´断面（南から）

写真図版 14　ＳＤ 03（３）

ＳＤ 03 断面Ｄ - Ｄ ′（南から）

ＳＤ 03 断面Ｅ - Ｅ ′（南西から）

写真図版 15　ＳＤ 03（４）

ＳＤ 03 断面Ｆ - Ｆ ′（南から）

ＳＤ 03 断面Ｇ - Ｇ ′（南から）

写真図版 16　ＳＤ 03（5）

ＳＤ 03 完掘（北から）

ＳＤ 03 現況（南から）

ＳＤ 03 現況（南から）

ＳＤ 03 現況（北から）

写真図版 17　ＳＤ 03（6）

ＳＤ 04 完掘（南東から）

ＳＤ 04 断面Ａ - Ａ ' （東から）

ＳＤ 04 完掘（北西から）

ＳＤ 04 断面Ｂ - Ｂ ' （東から）

ＳＢ 01 完掘（北から）

写真図版 18　ＳＤ 04、ＳＢ 01

ＳＩ01 完掘（北東から）

ＳＩ01 断面（南から）

ＳＩ01 断面（西から）

写真図版 19　ＳＩ01（1）

ＳＩ01 炉平面（東から）

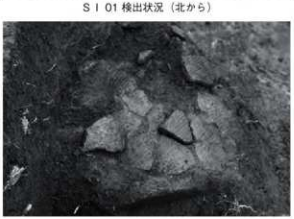
ＳＩ01 炉平面（北から）

ＳＩ01 炉断面（西から）

ＳＩ01 炉断面（南から）

ＳＩ01 検出状況（北から）

ＳＩ01 遺物出土状況（西から）

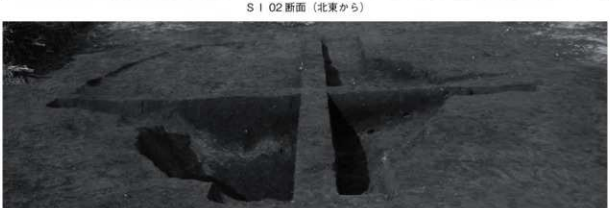


ＳＩ01 遺物出土状況

写真図版20　ＳＩ01（2）

ＳＩ02完掘（北から）

ＳＩ02断面（北東から）

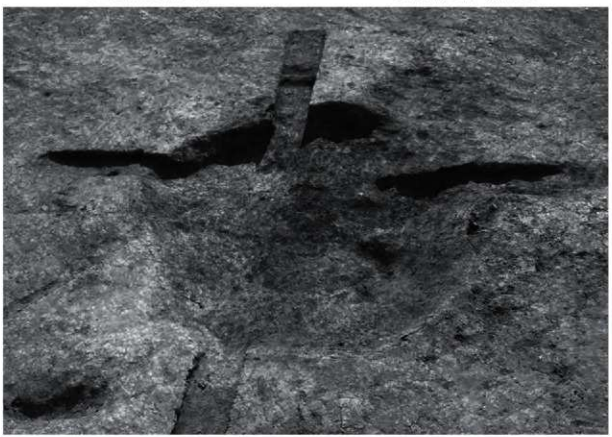


ＳＩ02断面（南西から）

写真図版21　ＳＩ02（1）

ＳＩ02炉断面（南から）

ＳＩ02検出状況（南東から）

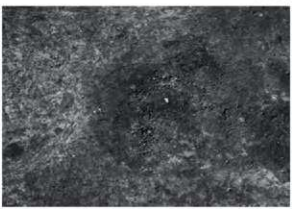


ＳＩ03完掘（東から）

ＳＩ03断面（南から）

写真図版22　ＳＩ02（2）、ＳＩ03（1）

ＳＩ03断面（西から）

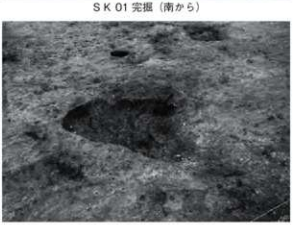


ＳＩ03炉平面（東から）

ＳＩ03炉断面（南西から）

ＳＫ01完掘（南から）

ＳＫ01断面（南から）



ＳＫ02完掘（南から）

ＳＫ02断面（南西から）

写真図版23　ＳＩ03（2）、ＳＫ01・02

ＳＫ 03 完掘（北から）

ＳＫ 03 断面（南から）

ＳＫ 04 完掘（北から）

ＳＫ 04（南から）

ＳＫ 05 完掘（北から）

ＳＫ 05 断面（南から）

ＳＫＴ 01 完掘（北西から）

ＳＫＴ 01 断面（南東から）

写真図版 24　ＳＫ 03 ～ 05、ＳＫＴ 01

ＳＫＴ 02 完掘（南東から）

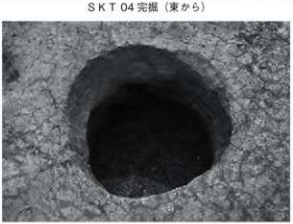
ＳＫＴ 02 断面（東から）

ＳＫＴ 03 完掘（南東から）

ＳＫＴ 03 断面（南東から）

ＳＫＴ 04 完掘（東から）

ＳＫＴ 04 断面（西から）



ＳＫＴ 05 完掘（北から）

ＳＫＴ 05 断面（南から）

写真図版 25　ＳＫＴ 02 ～ 05

ＳＫＴ 06 完掘（南から）

ＳＫＴ 06 断面（南から）

ＳＫＴ 07 完掘（北東から）

ＳＫＴ 07 断面（南から）

ＳＫＴ 08 完掘（東から）

ＳＫＴ 08 断面（南から）

ＳＫＴ 09 完掘（東から）

ＳＫＴ 09 断面（西から）

写真図版 26　ＳＫＴ 06 ～ 09

ＳＫＴ 10 完掘（西から）

ＳＫＴ 10 断面（西から）

ＳＫＴ 11 完掘（北から）

ＳＫＴ 11 断面（西から）

ＳＫＴ 12 完掘（北から）

ＳＫＴ 12 断面（東から）

ＳＫＴ 13 完掘（北西から）

ＳＫＴ 13 断面（西から）

写真図版 27　ＳＫＴ 10 ～ 13

ＳＫＴ 14 完掘（西から）

ＳＫＴ 14 断面（南から）

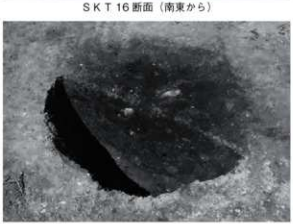
ＳＫＴ 15 完掘（北から）

ＳＫＴ 15 断面（東から）

ＳＫＴ 16 完掘（北から）

ＳＫＴ 16 断面（南東から）

ＳＫＴ 17 完掘（南から）

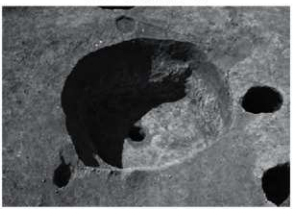


ＳＫＴ 17 断面（南から）

写真図版 28　ＳＫＴ 14 ～ 17

ＳＫＴ 18 完掘（北から）

ＳＫＴ 18 断面（南から）



ＳＫＴ 19 完掘（北から）

ＳＫＴ 19 断面（西から）

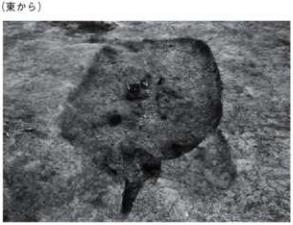
炭窯 01 完掘（南から）

写真図版 29　ＳＫＴ 18・19、炭窯 01（1）

炭窯 01 断面（南から）

炭窯 01 断面（東から）

炭窯 01 検出状況（南西から）



炭窯 01 完掘（西から）

炭窯 02 検出状況（西から）

炭窯 02 完掘（北西から）

写真図版 30　炭窯 01（2）、炭窯 02（1）

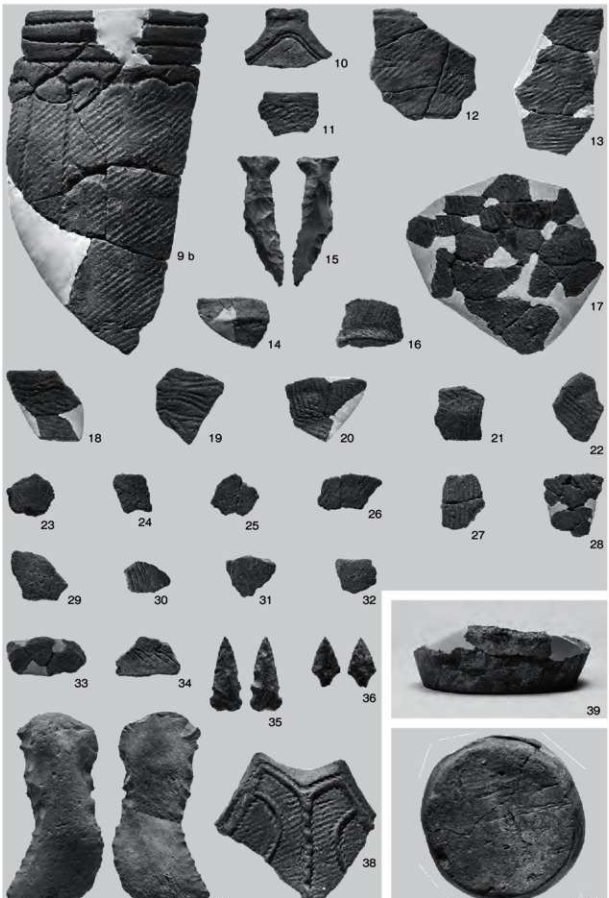
炭窯 02 完掘（南西から）

炭窯 02 断面（南西から）

炭窯 02 断面（北西から）

写真図版 31　炭窯 02（2）

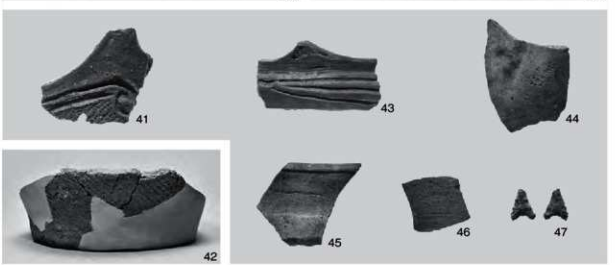
写真図版 32　出土遺物（1）



写真図版 33　出土遺物（2）

40

40


41

43

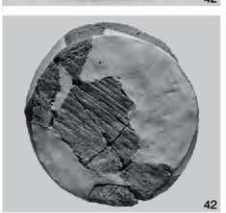
44

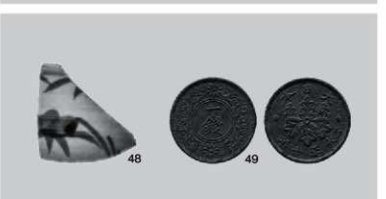
42

45

46

47


42


48

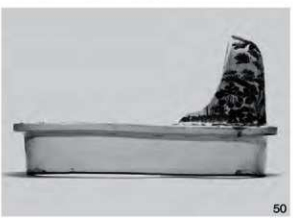
49

写真図版 34　出土遺物（3）

50

50

50


50

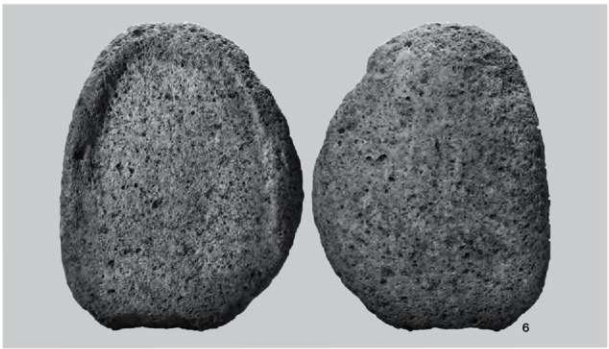
50

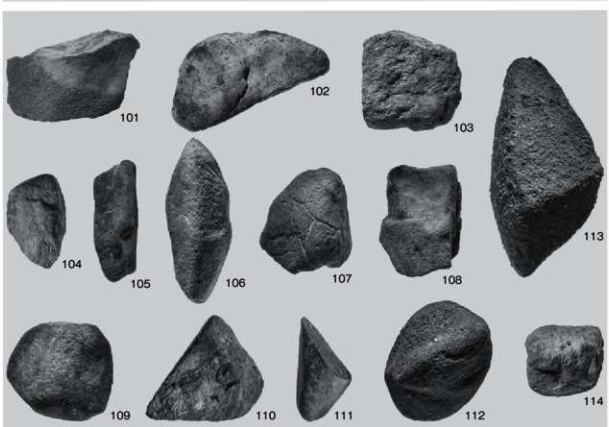
50

50

6

写真図版 35　出土遺物（4）





番号	遺構名・出土層位	石質	産地	重量（g）	備考	番号	遺構名・出土層位	石質	産地	重量（g）	備考
101	SI01・炉石 1	凝灰岩	奥羽山脈	3158	新生代新第三紀	108	SI01・炉石 8	ホルンフェルス	奥羽山脈基盤	2035.9	古生代
102	SI01・炉石 2	凝灰岩	奥羽山脈	2278	新生代新第三紀	109	SI01・炉石 9	凝灰岩	奥羽山脈	1965.3	新生代新第三紀
103	SI01・炉石 3	凝灰岩	奥羽山脈	1781.1	新生代新第三紀	110	SI01・炉石 10	凝灰岩	奥羽山脈	3123.5	新生代新第三紀
104	SI01・炉石 4	ホルンフェルス	奥羽山脈基盤	683	古生代	111	SI01・炉石 11	ホルンフェルス	奥羽山脈基盤	412.2	古生代
105	SI01・炉石 5	ホルンフェルス	奥羽山脈基盤	934.1	古生代	112	SI01・床面	安山岩	岩手山	2229.7	新生代第四紀
106	SI01・炉石 6	凝灰岩	奥羽山脈	1672.8	新生代新第三紀	113	SK03・埋土	流紋岩	奥羽山脈	9206.3	新生代新第三紀
107	SI01・炉石 7	安山岩	岩手山	2733.3	新生代第四紀	114	SK03・埋土	凝灰岩	奥羽山脈	1181.9	新生代新第三紀

写真図版 36　出土遺物（5）

報告書抄録

ふりがな	ふたごじょうあとはっくつちょうさほうこくしょ
書　名	二子城跡発掘調査報告書
副書名	北上市特定公共下水道終末処理場整備事業に伴う緊急発掘調査
巻　次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第734集
編著者名	羽柴直人　杉沢昭太郎　丸山直美　北田勲
編集機関	（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地　ＴＥＬ（019）638-9001
発行年月日	2022年3月11日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査対象面積	調査原因
ふたごじょうあと 二子城跡	いわてけんきたかみし 岩手県北上市 ふたごちょうあざしぶや 二子町字渋谷 60-1 ほか	03206	ME46-2214	39° 20′ 0″	141° 8′ 6″	2019.7.16 ～ 2019.10.31 2020.4.9 ～ 2020.8.31	29,230㎡	北上市特定公共下水道終末処理場整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
二子城跡	集落 狩場 城館 など	縄文時代	竪穴住居１棟、陥し穴19基、土坑１基	縄文土器 弥生土器 石器 土師器 須恵器 陶磁器 銭貨	
		弥生時代	竪穴住居２棟、土坑（墓壙）１基		
		平安時代	炭窯２基、土坑２基		
		中世	堀３条、溝１条		
		中世～近世	掘立柱建物１棟、時期不明土坑３基		

要約

遺跡は、北上市北東部の北工業団地東端付近、ＪＲ東北本線村崎野駅から北東約２kmの距離に位置している。立地は北上川西岸の河岸段丘、現況は山林で、標高は82～98ｍである。

検出された遺構は、中世の堀３条、溝１条。中世～近世の掘立柱建物１棟、平安時代の炭窯２基、土坑２基。弥生時代の竪穴住居２棟、土坑（墓壙）１基。縄文時代の竪穴住居１棟、陥し穴状土坑19、土坑１基。時期未確定の土坑３基である。出土遺物は縄文土器大コンテナ２箱（主に中期前半）、弥生土器小コンテナ１箱（赤穴式）、石皿１、石鏃・スクレイパー等５点である。

調査区西部で南北に緩賃する大規模な堀SD03を約120ｍにわたって検出した。これは、二子城全域の西辺を画する堀と解釈され、二子城の城域の西辺が明確となった。また、調査区西側尾根頂部で、弥生時代後期（赤穴式）の住居２棟を検出し、当該期の良好な資料を追加することができた。また赤穴式の土器片を含む土坑（SK03）から石鏃が２点出土し、墓壙と推測される。

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第734集

二子城跡発掘調査報告書

北上市特定公共下水道終末処理場整備事業に伴う緊急発掘調査

印　刷　令和４年３月４日
発　行　令和４年３月11日

編　集　（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話　(019)638-9001

発　行　北上市
〒024-8501　岩手県北上市芳町１番１号
電話　(0197)64-2111
（公財）岩手県文化振興事業団
〒020-0023　岩手県盛岡市内丸13番１号
電話　(019)654-2235

印　刷　株式会社阿部印刷
〒020-0873　岩手県盛岡市松尾町２番２号
電話　(019)624-2242

©（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2022